精神分析

第二巻 第八號

昭和九年十一・十二月

昭和九年十月廿五日印刷納本
昭和九年十一月一日發行
毎月一回一日發行

夫婦生活研究號

——（裏面に續く）——

東京精神分析學研究所出版部

本研究所關係者名簿（いろは順）

◎印……客員
＊印……特別誌友
△印……雜誌委員

△東京濟生會 法學士 岩倉具榮
＊東京澁谷區 岩倉良子
＊奈良縣 茨木基忠
＊大連 伊藤梅吉
＊京城帝大 伊東高麗夫
東京本鄉區 伊東豐夫
＊東京淀橋區 入江敏夫
＊第一神戸中學校 池田多助
新潟縣 磯野信司
東京本鄉區 今福由江
＊滿洲國吉林 石橋園穠
＊大阪華陽病院 井尻辰之助
△早稻田大學 長谷川誠也
東京瀧野川 長谷川浩三
◎東北帝大醫博 早坂長一郎
＊愛知縣 本田了惠

◎名古屋醫大醫學士 堀要
＊北海道函館 堀濱吉雄
東京 朴永鎭
東京日本橋 時平佐喜雄
＊東京荒川區 遠山四郎
滿洲國新京農學士 千葉廣洋
＊新嘉坡 林獨步
長野、醫學士 和田節雄
◎警視廳技師醫學士 金子準二
◎東洋大學 高島平三郎
東京下谷區 高橋鐵
＊西の宮市 田中雅子
東京杉並區 田內長太郎
＊右同 田內貞喜
＊宮崎縣 竹之下學山
東京澁谷區 武俣勇往

阿佐谷幼稚園 高崎能樹
＊東京本鄉區 高村光太郎
本研究所內 高水力太郎
慈惠醫大文學士 武田忠哉
橫濱鶴見 立川玄一郎
＊京都中京區 津田九郎
山梨縣 辻修
◎廣島文理大文博 塚原政治
東京神田區 土屋喜一
北海道札幌 浪越春夫
＊京都府 中野正一
東京本鄉區 中山太郎
＊金澤市 南雲義男
△東京杉並區 長崎文治
東京蒲田區 生形要
◎早稻田大學文學士 內田勇三郎

*山形縣 梅木米吉
⊙東京能率研究所 上野陽一
*北海道小樽 井上千秋
東京麻布區 小野田幸雄
東京本郷區 小柳津邦太
成城學園前 奥村博史
*京都府舞鶴 奥本島田
*横濱神奈川區 太田繁子
△本研究所内 大槻憲二
右同 大槻岐美
*奉天 大橋正二
*神戸市林由區 大岡正已
東京杉並區 大久保眞太郎
*宇治山田市 大山浩
*東京荏原區 尾形孝治郎
⊙廣島文理大文博 久保良英
甲府母の友社 窪田甲子郎
精神分析學會 矢部八重吉

⊙東北帝大醫學士 山村道雄
*神戸精神衛生相談所 山田一郎
東京赤坂區 山本鎭雄
*京都左右區 米原浩
⊙東北帝大醫博 丸井清泰
東京麹町區 松居桃多郎
⊙東京四谷區 慶大神經科教室
*東京本郷區 福間光
*獨立美術協會 福澤一郎
*東京麹町區 藤井和子
*東京中野區 藤木義輔
臺灣阿里山測候所 近藤石象
江戸橋病院醫博 小山良修
*長野縣 小林忠藏
東京麻布區 小林五郎
東京板橋區 小松德
東京麻布區 小杉長平
精神分析學診療所、醫博 古澤平作

東京豐島區 江戸川亂歩
⊙東京、醫博 雨宮保衞
*奈良縣 佐藤政宕
*東京府 佐々木龍治
⊙東北帝大醫學士 木村廉吉
*京城府 三井慶次郎
⊙成女學校 宮田修
*長野縣 三輪輔
*東京、醫學士 芝川又太郎
*栃木縣 島崎勝次郎
*沖縄 島袋常雄
⊙靜岡腦病院醫博 式場隆三郎
*東京 清水桃子
トモヱ幼稚園 霜田靜志
*熊本五高 澁田見勝亮
大阪 廣井重一
*「雲雀」誌主幹 廣瀬操吉
*横濱中區 平野良太郎

東　　京　　平塚雷鳥
早大演博内　平塚義角
●東京、醫博　諸岡存
＊朝鮮平安北道　森永醇
＊東　京　府　森下雨村
＊東京、醫博　鈴木雄平
＊ハ　ワ　イ　ドクトル　菅村芳松
＊東京淀橋區　須田勇
●名古屋醫大　醫博　杉田直樹

本誌の特色と意圖

一、關係者にはわが國に於ける斯學の諸權威を網羅してゐること。

一、海外斯學界と常に通信し、提摯し、またその活氣ある運動の詳細なる報道に努めてゐること。

一、分析學、精神病學、神經學、教育學、心理學、民俗學に關係する諸方の研究室、學校、診療所、病院などを探訪して、その様子を讀者に紹介し双方の利便を圖れること。

一、時事批評に力を注ぎ、新科學の立場より常に活潑に、社會諸方面の問題に示唆を與へつゝあること。

一、專門家のためのみならず、一般讀者のためにも『講座』と『語彙解說』と『アプフウブ』欄とを設けてゐること。

一、諸種の相談に應じて懇切なる答辯を與へてゐること。

一、新しい科學は新しき人材に俟つとの建前より、常に新人登用の用意を有すること。

一、歐洲斯學界の重要なる論文は常に飜譯紹介すること。

一、斯學は東洋的科學なりとの信條に基き、わが國に獨創的なる分析學の樹立に着々邁進しつゝあること。

夫婦生活に於ける性的關係と道德的關係

大槻憲二

一、一夫一婦制の必然性

男女の共同生活が現在のやうな形式をとるまでには、相當の歷史的變遷を經てゐることは、人々のよく知るところである。亂婚や一夫多妻、一妻多夫などの形式が存在してゐた時代もあつたが、それ等が變革して漸次に一夫一婦の形式をとるに至つたことに就いては、十分な社會的（道德的）根柢が存在するのである。併しそれが道德的に必然であるほどには、性的に必然でないと云ふところに、現代の種々な男女間の問題胚胎の源因が存するやうに思はれる。

何故に一夫一婦制が道德的に必然的であるかと云ふに、それは種々な見地から是認せられる。（一）男女は相互に自分の配遇者をその私有財産と見做してゐる。この見方は法律的に云つて是認せらるべき十分な理由がある。さうして現在一般に人々は確にさう見做してゐる。尤も久しく法律は男の場合にのみ認めて、女の場合にこれを認めなかつたが、漸次にこれを認めつゝあるやうである。故に現在、男女何れか一方が、配遇者以外の異性と交渉すると云ふことは、慥に所有權の侵害である。故に、かゝる侵害をなさず、なさしめないと云ふことは、確に法律的（從つて道德的）正義である。正義は常に勝利者であり、勝利者であるべき筈であるが故に、かゝる正義を遵奉する生活は現實的に必然である。次に――

（二）子供に卽して考へて見てもさうである。子供は男女の共同製作物である。この製作物は二人の共力に依るもの

であるが、三人の共力と云ふことはあり得ない。自分の責任と權利とのないところに義務はないと云ふ法律的論理がそこに成立し得ると共に、自分の直接製產品でないものには、自分のナルチスムス的リビドーが纒綿せられないと云ふ心理的理由もあつて、男女の性生活は必ず一夫一婦制に則らねばならないと云ふことになる。

（三）子供に對する親のナルチスムス的リビドーの纒綿と云ふ點からの必然性は右に述べた通りであるが、第三に、男女間のナルチスムス的リビドーの相互纒綿と云ふことも考へらるべきである。他人の『お古』であると云ふことはそこにその他人のリビドーが這入り込んでゐることを意味してゐる。從つて、本人のナルチスムスはその純粹性を滿喫することが出來ない。これ、夫婦間の相互私有の法律的見解の心理的根據であると云ふことが出來る。次に

（四）子供の立場から見ても、夫婦（兩親）は永く自分の兩親（夫婦）であることを彼等は要求するものである。幼兒時代に於けるほど、この要求は熾烈である。片親に養はれたものは、殆ど常に必ず神經症的である分析的事實に徴しても、この要求の當然であることが首肯せられる。諺にも子は鎹と云つて、子供は暗默の內に、一夫一婦制の正義を主張してゐる。養父母や繼父母に育つたものが如何に不幸であるかは、これを證明すべき實例の多きに過ぎて我等は選擇に苦むほどである。

このやうに數へ上げて來ると、一夫一婦制は如何にも必然であつて、かゝる制度の發達のあまりに遲かつたことを不思議に思ふほどである。併し一夫多妻や一婦多夫制とても、種々な點から見て全然必然的でないとは云へない。現にそれが存在してゐたのだ。ヘーゲル哲學ではないが、凡そ存在するもの、又は存在したものは必然である。では、その必然の理由は何か。

二、一夫多妻制その他の必然性

凡そ存在するもの、又は存在したものが必然である以上は、一夫一婦制が現代に於いて必然である如く、一夫多妻制、その他亂婚制度もまたそれが存在した當時に於いて必然であつたに相違ない。で、我々はこゝで、少くとも心理

學的見地から見て、そこに如何に必然性が存在し得たかを考究して見ることが、科學的認識のために必要である。

第一に、一切の個々の人間は殆ど一切の個々の異性と戀愛（又は性交關係）に入り得る可能性がある。その關係に於ける肉體的又は精神的滿足の程度を割引すればするほど、殆ど一切の範圍は、反比例的に增大して行く。滿足の程度を高め、贅澤を云はせれば云はせるほど、殆ど一切の範圍は反比例的に狹小になつて行く。その意味に於いて、自己戀慕症者（ナルチスト）は、最も贅澤なる戀愛者であると云ふことになる。さうしてそれは分析的見解と一致する。

このやうに殆ど一切の人間の間に、條件さへ許すならば、關係の成立し得べき可能性があると云ふことは、一切の人間が殆ど如何なる相手に依つても滿たされ得べき一般的要求を持つてゐると云ふことを意味すると共に、他面に於いて、一切の相手を以てするも、未だ滿たされ得べからざる絶大な要求を持つてゐると云ふことをも亦、意味してゐる。この意味に於いて、一切の人間は最も容易に或る程度の性的滿足を與へられ得るものであると共に、何物を以てしてもなか〱滿足せしめられない貪慾な要求を持つてゐるものだと云へる。

嘗て私が本誌第二卷第一號に『千軒盜み分析考』を試みた際に擧げた實例を、讀者諸氏は記憶してゐられるであらうか。或る失戀者が戀人おきみに求めて得られなかつた一部分をお靜に求めようとする。おきみの『持つてゐる總ての內、その各部分を切離して考へて、甲の少女にその髮の色を、乙の少女にその恰好を……さうして何百人、何千人かの少女によつて少女の持つてゐるあらゆるものを部分的に求めて行つて、それを綜合して完全なおきみを作り上げることが』その失戀者の權利のやうに考へられてゐる。この心理は、殆どあらゆる戀愛者に共通な傾向であると云つて差支へない。何となれば、あらゆる戀愛者にエディポス・コムプレクスがあつて、完全な女（母）又は完全な男（父）の觀念を以て戀愛に臨む時には——自分自身の不完全は棚に上げておいて——永久に自分の期待は滿たされることはないからである。

このやうに一夫多妻制にも、一妻多夫制にもこの心理的根據（要求）はある。またこれを可能ならしめるエディポス的根據も存在してゐる。一夫多妻制下に於いては、妻は通常相互に反撥し合ひ嫉妬し合ふものである筈だが、時に

はそれが反撥し合はず、非常に仲よくなることもあり得るのである。仲よくなると云ふのは、分析的に云へばそこに同一化作用が働くことを意味するのである。この同一化作用の起る源因は兄弟姉妹關係の經驗にあるだらうと思はれる。兄弟姉妹は一父一母の下に於いて、その愛に均霑しつゝ相互に同一化のリビドーを纒綿し合つた間柄であるからだ。社會統合の心理的契機は常にこのコムプレクスに依憑するのである。故にキリスト敎社會に於いては、キリストを父とし、マリアを母とし、一般信徒は相互に兄弟姉妹と呼び合つてゐるし、社會主義仲間に於いても、マルクスやレーニン（又はそれ等の體現する觀念）を父母として、その下に於いて一般主義者は同志と云つて、やはり兄弟姉妹的コムプレクスを以て結び合つてゐるのである。一夫又は一妻の下に於ける多妻又は多夫等も亦、その相互關係はこの宗敎社會又は社會主義社會に於けるそれと、同一又は類似のものであることは明かである。三角關係と云ふものは特に近代に於いて問題となつて來たことは、注目に價することである。古代又は中世に於いては、これはさして問題にならなかつたと云ふことは、卽ち人々の個人意識發達につれてこの問題が表面化したことを意味するのであつて、換言すれば、兄弟姉妹的コムプレクスが人々の間にいゝ意味でも惡い意味でも、解除せられて來たことを證明してゐるのだ。併し現在に於いても、このやうな三角的關係に於いて兄弟姉妹的同一化作用の生じてゐる場合は屢々報告せられ、現に筆者も或る本妻と妾との間の非常に圓滿であるばかりでなく、一方が病氣をすると他方もまた必ず病氣をし、これを引離すことに依つてやうやくこの極端なる同一化を防ぎ得たと云ふ話を聞いたことがある。

三、一夫一婦制の非必然性

このやうに一夫多妻制又は一妻多夫制の方が本能的無意識的であるだけに、快樂原則的見地からはより必然的である。で、無意識心理と快樂原則とにより多く支配せられてゐた古代及び中世（個人に就いて云へば幼兒期）に於いては一人にして多數配偶者を有する制度が盛んであつたことは當然であつて、個人の意識が發達し、現實原則に從ふことがより多くなるに從つて一夫一婦制が盛んになつて來たことは、極めて當然である。で、今日では一夫一婦制が道

德的にはその妥當性を疑ふべからざる唯一の制度と視られてゐるに拘らず、なほ且つこの制度が種々な形で破られやうとし、また現に屢々破られてゐるのは、意識的活動と無意識活動との間に、快樂原則と現實原則との間に、不調和が存するからであることは、今更申すまでもないことである。これ等兩種活動、兩種原則の間の調和を圖ることは、獨り精神分析學にのみ期待（少くともそれ以外に途はないと斷言）しなければならないが、これにはまた他面に於いて人類の本能力の强弱消長と云ふことも關係することであるから、絕對的責任を斯學及び斯法にのみ嫁せられることは當分辭退せねばなるまいと思ふ。

右は性心理的條件に基く一夫一婦制の非必然性であるが、その他一般の生活條件に基くそれの非必然性も、序に擧げておかねばならない。人間の生活は健康、能力、經濟、運命（偶然的事故又は事件）その他の點で決して固着的なものではないし、またあつてはならないのだ。これ等の諸條件に依つて夫婦の一方が生活者として失格する時、又は一方よりも餘りに落伍する時、その夫婦生活はどうしても破綻せざるを得ない。これは善惡の問題よりも當然の問題となつて來る場合も多々ある。超自我は分析的に云へば、本來神經症的性質を帶びてゐるものであるから、道德も現實生活への適合と云ふ點を目安に置かない限りは、却つて人間を不幸にすることになるのである。

以上、私は夫婦生活に於ける性的關係と道德的關係との間に存する種々な問題を一般的に論じて來たが、これから私は更に、論點を具體的に局限して、現代に於いて所謂有閑夫人問題が何故に社會の注目を牽くやうになつたかを分析的に考究することに依つて、夫婦生活問題への一示唆としたい。但し有閑夫人問題に就いては、筆者は嘗て『新靑年』誌に寄稿したことがある。それをこゝに更に敷衍して、我々の目下の題目への助けとしたい。

四、現代に於ける婦人解放と有閑夫人問題

近頃の社會に於いて夫婦生活問題に關してセンセイションを起した事の一つは、有閑夫人問題である。所謂有閑夫人とは何であるか。ブルヂョア階級の妻君にして、有閑なるまゝにその性生活を放肆することに依つて消閑せんとす

ゐるものであると云ふことになつてゐる。その實例として兒玉博士夫人、吉井伯爵夫人、靑山某病院長夫人等の名が何人もの記憶になほ甚だ生々としてゐるであらう。

人妻にして放肆なる性生活を送るものが、必ずしも現代に限らず、ブルヂョア階級にのみ專らなるものでないことは明かである。江戶に於いても町人階級の妻君にして、さう云ふ方面に可成りの勇名(?)を轟かし、今日までもその記錄を殘してゐるものも少くない。また現代の中流又はそれ以下の階級にもさう云ふ方面の猛者が時々は見受けられる。併し中流以上の現代の人妻に於いて、さう云ふ生活者が特に多いのが事實であるとすれば、それには相當の原因がなくてはならない。それ等の源因の一つ〳〵を擧げて硏究を試みよう。

それ等の源因の一つは慥に、婦人が近代に至つてさま〴〵な意味に於いて、著しく解放せられてゐることである。抑々近代は、ひとり婦人に對してのみならず、人類一般に對して解放の時代である。人々はまづ宗敎から、恐ろしい神の禁壓から、解放せられた。文明の增進と、知識の傳播と、敎育の普及と、社會の變革とに依つて、精神的肉體的に解放せられた。人類全般は個人として解放せられ、今までにない自由を享受することが出來るやうになつたが、殊に近代自由主義の福音を最も强く感得したものは婦人と小兒とであらう。卽ち中世に於いて最も强く壓制せられてゐた婦人と小兒とが、近代に入ると共に最も大きな自由を享受し、時にまた自由を放肆にまで極端化せしめたことも亦、固より自然であつたかも知れない。現に見よ、街頭の少女等の活々としたその擧動とその潑剌たる瞳とを! 靑年男子が多く憂鬱な、何となく生活の不安におびえてゐるやうなのに比して、何と彼女等は元氣一杯に、明朗に、快活に語り、笑ひ、行動し、思考してゐることであらう。

五、男子の憂欝と性本能の昇華

街頭の少女等の明朗と快活とは、婦人一般の解放の歡喜を象徵し、代表するものであつて、家庭夫人の生活態度もまた、これに準じて明朗であり、自由であり、時にまた放肆であることは、察するに餘りがある。

次に女子の明朗に對比して、男子は何故にこのやうに沈鬱なのであらうか。この事が當然問題になつて來る。

封建制度の崩壞と共に家族制度も亦從つて崩壞し、更に資本主義の爛熟に依つて、人々は全く個人として社會に立たねばならなくなり、その勞働力は極めて露骨に商品として賣買せられることになつた。勞働力は、その力の實質的、又は精神的價値を離れ、全く需給關係の原則に依つて支配せられることになつた。こゝに於いて男子の勞働力も、女子のそれも、全く平等の水準にまで立たせられ、そこに何等のハンディキャップを許さないことになつた。否、時には十分な學歴ある男子は陋巷に窮死しても、フラッパーの女ダンサーは一夜に數百金を獲得すると云ふやうな、變態現象をさへ生じてゐる。

そのやうな社會的原因に依る男子の沈鬱のみならず、そこにはまた心理的原因に基く男性陰鬱の傾向がある。それは現代社會のいや增し行く多忙と煩勞とのために、現代の男性が益々神經質になり行くことのためである。繁雜な現代生活は、社會に立つて活動することに於いて今なほ何と云つても主要者であるところの男子の心身を、愈々多く消費せしめることになる。このことは何としても、男子の生活全般をいびつにしなければ已まないのである。例へば、かう云ふ戲曲の筋がある。

或る新婚の夫婦があつた。彼等は相互に非常に愛し合つてゐた。併し彼等は若い夫婦の常として生活はあまり豐かでなかつた。妻を喜ばすためにはどうしても夫は相當の物資を社會から獲得して來なければならない。彼は勤勉實直な青年であつた。彼は獨創的な頭腦の所有者であつて、敢然として或る理化學上の發明を思ひ立つた。彼は日夜圖書館に通ひ、書齋に退き、實驗室に閉ぢこもり、孜々として研究し、思索し、創案して、苦心慘膽、殆ど寢食を忘れ、家庭を顧みず、努力を續けた結果、立派な發明品を作り上げ、それが特許せられて、今や眼前に富と名譽とを約束せられ、喜々勇躍して愛妻の許に歸つて來た。然るに、家の中は靜まり返り、妻の出迎へる聲も聞えない、机の上を見ると、書置きがあつて、妻は空閨のさびしさに堪え得ず親切な夫へのすまなさを十分に自覺しつゝも、已むなく若き愛人を作つて出奔する旨が謝罪の言葉と共に記されてあつた、と云ふ筋である。

この戯曲の筋は、必ずしも、兒玉博士の事件を契機として思ひ付いたわけではないが或る意味で兒玉博士の場合を聯想させないこともない。

吉井德子夫人の場合はどうか、私は詳しくは知らないが、兒玉博士夫人の場合とは一寸違ふやうである。吉井伯爵は兒玉博士のやうな學究的な人とは違ひ、もつと享樂的な人のやうであるからだ。併し、享樂的と云へども必ずしもその人の性生活の全般が、近代文明生活の影響の下に何等かの影響を受けて、そこに何かの不調を來してゐるのでないとは云へないと思ふ。又現に、夫人はさう云ふ意味の告白をしてゐた。私は、只今、輕卒の斷定を下すことを避けて置きたいと思ふ。

以上、私は近代生活が性生活に障害を與へると云ふことを、既定的のこととして論じて來たが、以下その理論的根據に就いて少しく述べて見たい。

一體、我々の文明なるものは、あまねく本能（常識的に精力と云つてもよいし、精神分析學的に心理的に考へられた性慾と云つてもいゝのである）を禁壓することに依つて成立つてゐるのである。例へて見れば、我々は自分の儲けて來た收入の中から、家賃、食費、被服費、交際費のみならず、修養費、書籍費までも支出するのと同じである。如何に高尚な目的のための出費と雖も、元を洗へば我々の卑しい（と假りに考へて）勞働に依つて得た金錢から割出すのである。それと同じで、我々の高尚な文明も、元を洗へば、我々のエネルギー（リビドー）を使用することに依つてそれを産出するのである。その證據の一つは、文明人になればなるほど性慾力は弱くなり、野蠻人ほど性交の歡喜を知らないらしいことである。

このやうに文明人は、或る程度まで自分の性的本能力を犧牲にし、放棄することに依つて文明に寄與して來たのである。この寄與に依つて、物質上、及び觀念上の財貨としての文明的所産は成立したのである、何が個々人をして、このやうな本能力の放棄をなさしめたかと云ふに、それは生活の必要（自然と戰つたり、物資を生産したり、獲得するための）と云ふこともあるが、それ以外には他の人間、殊に父母兄弟との社會的、家族的感情であらう。これ等の

人々と圓滿に、無事に、接觸して行くためには、人々はその本能の本來の力を或る程度まで放棄しなければならない。例へば、總ての男兒はその父親に對して半ば尊敬して崇拜すると共に、他面に於いてこれを種々な意味で競爭者として憎惡し反抗する心を持つてゐる。固よりそれ等は悉く無意識の心理現象ではあるが、無意識ながら、それ等の內的葛藤は、我々の心に苦痛と不安と焦燥とを與へる。で、それ等の苦痛を克服するためには我々は意外に多くのエネルギーを消費してゐる。さうして或る人は神經症となり、或る人は健全な良心を作り上げることに依つてやうやくこの自己心內の矛盾を克服し統御するのである。

併し以上に云つたことは、性本能變化の一部分に過ぎない。本來、人間の性本能は文明の作業に對して、異常に大きな力を給與してゐるのである。それと云ふのもつまりは、人間の性本能に具はつてゐる特性（本來の激しさを失ふことをなしに、その性目的を轉向させることの出來る特性）のためである。精神分析學ではこの能力（本來は性的である目的を、既に性的ならぬ、併し心理的にはこれと關係のある他の目的に變へることの出來るこの能力）を「昇華」と名付けてゐる、例へば、石炭や石油の持つ力を變化させて、熱や光にすることが出來るのと同じである。我々はランプの光と熱とをとつて、これは石油の力ではないと云ふことは出來ない。我々は食物を喰ふ。さうしてカロリーを得る。併し、このカロリーは、我々の喰つた食物の力でないと云ふことは出來ない。それとやゝ似たものである。我々の文明は如何に崇高、華麗であらうとも、それが根本に於いて性本能の力でないとは云ひ去れないのである。

六、リビドー昇華の個人的限度

この昇華にこそ、性本能の文化的價値は存するのである。文明人又は文化的に優秀な才能を有する人々は、卽ち昇華の能力の强い、又は多い人である。文學や藝術の方面に於いて非常にすぐれた人々が多く獨身者であるのは、この理論を裏付けしてゐる。ミケルアンヂェロ、ダギンチ、ニイチェ、カントなどの諸天才はみな獨身者であつた。さうしてカントもミケルアンヂェロも明かに學問や藝術を一生の妻としたと云ふやうな表現をさへ、自ら用ゐてゐるほど

である。如何に彼等の無意識にとつて、そのリビドー(愛慾)纏綿の對象としての學藝が、本來の性目的の轉向せられた對象であつたかは、これに依つても明かであると思ふ。

このやうな昇華とは正反對に、性本能に於いて、また特に頑固な定着が現れる。この定着のために性本能は活用されなくなり、また、時には所謂變態となる。性本能の本來の强さは、個々人によつて區々であるやうである。性本能にして昇華せられるのは、その人の性本能の全體中のどれだけの量か、纔か、これは慥に不定である。性本能のどれほどの部分が昇華され、また活用されることになるかは、當人の持つて生れた有機組織によつて決定されるのだと我々は考へる。その他、それ以上の部分が昇華されることのあるのは生活上の種々な影響、經驗が働きかけたり、精神作用の上に知的の感化、例へば(教育)が及ぶからである。併し、この轉向過程は、何處までも押進めて行くことは出來ない。丁度、機械に於いて、熱を何處までも動力に轉向させることが出來ないのと、同じやうである。或る程度の直接的性滿足は、大體の有機體に於いて已むを得ないことであるらしい。その程度は個人に依つて等差はあるが、この程度を全然自分に許さないと因果は報いて來て、機能の障害となり、主觀の不快となつて、我々から見れば神經病と認めなければならない狀態となつて來るのである。例へば、多くの宗教狂熱家は大抵は神經病患者であるし、性慾を抑壓しなければならない事情にあるものが、宗教に入ることの必要を特に痛感する如きである。世に結婚と同時に教會行きを廢する青年男女の如何に多いか、また未亡人が如何に寺詣りに熱心であるかなどの事實を見れば、思ひ半ばに過ぐるものがある。

這般の問題に就いて、フロイドはかう云つてゐる『經驗により得たところに依ると、大抵の人間には、その素質が文明的要求に從ふに際して越え得ざる一つの限界が存する、彼等の素質が彼等に許すより以上に崇高な人間にならうと思ふ者は、神經病になる。彼等は、そんなに崇高になるに及ばなかつたならば、もつと幸福で、もつと健康であつたらう。變態と神經症とには互に積極的並びに消極的の如き關係があるとの洞察は、同じ生れの者の間を觀察することに依つて疑ひがないとの確證を得ることが屢々である、兄弟姉妹の內で、兄弟の方は性的に變態であり、姉妹の方

は女だけに性本能が弱いから、神經症者となることが屢々である。ところが、彼女等の神經症の症狀は性的に能働的な兄弟の變態と同じ傾向を表はしてゐる。さう云ふわけであるから、一般的には大抵の家族に於いては、男達は健康であるが、併し社會的には望ましからぬ程度に不道德であり、女達は崇高で、あまりに洗練され過ぎてゐるが、併し甚だしく神經質である』と。

また別のところで、フロイドはから云ふ風にも云つてゐる。『凡そ、性本能のやうな力强い亢奮を、滿足させる以外の方法で支配しようとするのは、個人の全力を擧げて掛らねばならない仕事である。昇華によつて支配すること、卽ち、性的本能力を性目的から引離して、もつと高尙な文明的目的に轉向させることに依つて支配することは、たゞ少數者のみのよくするところである。而もまた、これはたゞ一時的によくするのみであつてその最も困難なのは、生活力に燃えてゐる靑年時代である。それ以外の多數者は、神經症者となるか、それ以外の弊害を被る。經驗の示すところに依ると、我々の社會を構成してゐる大多數者は、節制と云ふ仕事には、素質的に不向きに出來上つてゐるやうである。一寸した性的制限にも惱むものは、我々の今日の文明的性道德の下に於いては、一層迅く、一層激しく、病氣になる。何となれば、出來損ひの仕組みや、發達上の弊害に依つて、常態的の性生活が脅されるならば、これに對して我々はこれを滿足させる以上に、よき安定の法を知らないのである。人々は神經症になればなるほど、愈々節制には堪えられなくなるのである』と。

七、果して夫人たちの罪か

以上の理論を、わが有閑夫人とその夫君たちに適用して考究して見るならば、夫君たちが既に多くは有識階級であるだけに、その性本能を昇華させ過ぎ、或は自分等の能力以上に昇華させることを要求され過ぎてゐる人々であることが考へ合はされる。從つてその性本能力は比較的微弱になつてゐる人々であることが考へ合はされる。然るに、その夫人たちは、その夫君たちほどには性本能を昇華させる必要もなく、またその昇華能力も極めて低い人々であるの

だと考へられる。さう云ふ場合には彼女等の性本能は必然的に、その直接的滿足を合法的方面以外の方法に於いて求めようとするやうになる。こゝに、現代文明社會の性生活の悲劇性を發見せざるを得ないのである。なほまた右と關聯して、近代文明社會に於ける、性生活の一般的卑しめと云ふことゝ、婦人の敎養の向上と云ふことゝを考慮に入れておかねばならないと思ふ。

原始社會に於いてとは違つて、近代文明社會に於いては、性生活を一般に卑しむべきことゝ考へてゐる。その證據の一つは古代の神社は多く、近代人の所謂『淫祠』であつて、その本尊は大抵露骨なる性生活の象徴またその代償であつて、彼等古代人はこれを崇拜することに崇高なる歡喜を覺えたに相違ない。併し近代人は、この無邪氣なる歡喜を抑壓し、これを恥づべきこと、卑むべきことゝして了つた。而も他方、婦人の敎養は愈々高まり、男子に匹敵し、また時にこれを凌駕するほどの文明的昇華能力ある婦人さへ輩出し、從つてまたかゝる婦人を妻とする男子も多くなつたわけであるが、かゝる尊敬すべき婦人に向つて卑しむべき性生活のパートナーたることを要求せねばならない近代文明男子の苦痛や、また察すべきものがある。

このやうな苦痛は、男子を驅つて、尊敬する必要のない他の女に向はしめることもあるであらうし、また不能症となつて一般に如何なる婦人との交渉も不可能となつてゐる男子も愈々多くなりつゝある。併し同様の事はまた婦人に就いても云はれ得るので、婦人も性生活一般を卑しめるために不感症となり、神經症となつてゐるものが、愈々多きを加へつゝある樣である。某婦人科病院長は、婦人の大半が不感症者であると云ふ、戰慄すべき事實を報告しつゝある。併しその原因は肉體的に存するのではなく、精神的であると云ふ事を、私は特に斷言する。

フロイドはまた次のやうな婦人の場合に就いて語つてゐる。

『ある夫人はその夫を愛してはゐないのだ。何となれば、彼女はその結婚の條件からしても、結婚後の經驗からしても、夫を愛すべき何等の根據を持たないのだ。然るに彼女はその夫を何とか愛さうと思つてゐる。何となれば、さうすることが彼女の受けた教育からすれば、結婚の理想だからである。そこで彼女は自分の內なる一切の感情を殺し、

眞實の事を表現すまいとし、自分の無意識を欺いて優しい、親切な、甲斐々々しい妻らしく振舞はうとする。このやうな自己抑壓から結局生じ來るものは、神經症である。さうしてやがて、愛してゐない夫に對して復讐するやうになる。で、夫としても、本當は妻は自分を愛してゐないのだと分ると共に、また不滿や憂慮も十分に湧いて來るわけである。これは神經症の行動としては典型的である。』

結局この夫人は、始めからその夫に對して愛が十分にないと云ふことを正直に、勇敢に、併し我儘に、云つて了つた方が、さうしてそのやうに行動した方が、却つてよかつたのだ。さうすれば彼女は自分を苦しめることも少かつたであらうし、夫を失望させることも少なかつたであらうし、二人とも別の新たな生活に入り得る可能性も多かつたであらうと云ふことになる。人間は畢竟するに、我儘な動物である。道德で統御しなければ何をやり出すか分らないが併し道德一點ばりで統御しようとすることは殘酷であり、角を矯めて牛を殺すやうな結果になる。

今日のやうな社會的狀勢、文明的傾向の內に生活する我々として、單獨に、一概に、有閑夫人の行狀を批難したり、攻擊したりすることは、意味をなさない。我々は個々人の特殊な場合に就いて、深く正しくその根源を研究して、徹底的な對策を講ずるやうにしなければならないのである。（完）

初夜權を考察して現代夫婦生活の葛藤に及ぶ

長崎文治

（一）

女性がその處女性を捧げた最初の結婚に案外素直に順應する事が出來ないで破鏡の嘆を見、却つて第二の結婚に於て幸福な生活を獲得する事があるといふ事は、一の云ひ慣はしとなつてゐて、俗間に物識りと云はれる樣な人達の口から屢々種々の實例を擧げて聞かされる事柄である。實際に於て、最初の結婚生活が、世事に通ぜぬ者同志によつて行はれる『飯事遊び』的であり、今迄經て來た生活の全面とは悉く異つた、全く新らしい境遇に投げ込まれて、彼等の直面する生活の一つ一つが、未だ黃色味の失せきらぬ嘴を以て不手際に拾ひ取られるのであるから、勢ひ食傷や消化不良を惹起して、生活機能に支障を來すは當然の事柄である。家庭生活の均衡を保つ事が出來ないで、常に暗雲の低迷を見るのはこゝに胚胎する。卽ちこの第一の結婚が失敗に歸する理由は、新らしい生活の總ての點に不熟練であり、加ふるに處女生活から人妻生活への連繫が精神的にも肉體的にも巧く行かないからである。これに反して第二の結婚が多く成功するのは、最初の失敗の苦汁に依つて結婚生活といふものゝ眞實の姿と正しい意味とを了解したと共に、女性の社會的評價が大低は處女性の上におかれてあるものであるのに最早處女では無く、所謂『疵物』となつてその價値標準が低下してゐることを知つての彼女等の劣等感が、一の獻身的態度となつて夫に對する擧措の隅々に迄柔しい心遣りが行亙るのである。この結果として、夫婦生活の行程が、平和に親密に運ばれるのである。

斯ういふ様な説明は一般に承認され、それだけ極めて通俗的であるが、併しこれが通俗的な説明であるだけ總てを盡した解釋といふことは出來ない。寧ろ多く詮議すべき餘地を殘してゐる。第一の説明に於て、新らしい生活に不熟練であるといふ事が最初の結婚を不成功に導くといふならば、家庭にあつて家庭的の仕事に携はつてゐた處女は凡てこの危險から免れる事が出來る筈であり、又第二に、處女生活から人妻生活への連繫も、結婚の豫備知識として敎へ込まれた生活態度の上に、吾々は多くの期待を持つ事が出來る筈である。事實これは結婚生活が順調に取運ばれる爲めには大いなる效果を齎らすものである。併し乍ら、それにも拘はらず尙ほ、初婚に於ける幸福よりも、再婚に於て得たものがよりよく大きいといふ事實を示してゐるのは何を物語るか。如何なる結婚形式が最も理想的であり、最もよく幸福を享受せしめるかといふ事は、常に社會的の話題とされ、戀愛結婚とか自由結婚とか試驗結婚といふ様なものが、媒介結婚の弊を補ふものとして唱導されて來、それが亦お互を批議し合ひ、實際に於て何れも一長一短を持つてゐて、完全なるものは見出せない。結婚生活をよりよくせんとする爲めにこれ等形式上の問題の提出されてゐることは、結婚生活の不協和といふ事に古來總ての社會が何れだけ惱んで來たかといふ事を如實に物語るものである。而して離婚數は、近代的傾向として益々增加して來てゐるのは、離婚手續の簡易化と、近代人の放浪性にもよることながら、吾々は更にそこに根本的なものを求めねばならない。近代文化が生活の階段を縮めて、獨身生活と夫婦生活との隔たりをそれほど甚だしいものでなくしてゐるのであるから、處女から人妻への轉移が初婚を必ずしも破鏡に導かねばならない程困難で無いに拘らず、尙ほ且つ最初の結婚が不幸福に終る例の多くあるといふ事を、新生活に不熟練の爲めだとか、處女から人妻への生活の連繫が巧く行かぬからだといふやうな説明を以て片付けて了ふ事は出來ない様に思はれる。

そこで、玆に精神分析學が、他の學問の言ひ及ばなかつた處の解釋を與へようとする。女性がその處女性を捧げた最初の結婚に幸福を見出せないとすれば、それは女性が自己の絕大な財產である所の處女性を破壞した男に對する無意識的な敵意の爲めであると精神分析學は解釋するのである。フロイドは、分析眼を以て婦人を觀察してみると、從

層と敵對との對立的反應が共に現はれてゐて、夫に對する愛憎二元の感情が見られると云つてゐる。所謂『腐れ緣』の夫婦が、お互に不平を持ち爭ひを續け乍らも別れることが出來ないで、一生涯を愚痴の生活に終始するのは、處女性の破壞、卽ち破瓜といふ事が、『最初の夫に妻を永久に結びつけて置くといふ文明的結果を持つのみならず、又夫に對する敵對感情といふ古代的反應を呼起すものである』（大槻氏譯『分析戀愛論』六三頁）から、女性が自己の處女性を捧げた最初の男性に愛着を感ずるにも拘らず、その結婚生活が不成功に終るといふのは、多くはこれに依つて解釋出來るのである。この二重の心理は小說の中にも、處女性を奪つた男に對して抱く複雜な心理――愛憎交錯して――が屢々描かれてゐる。女性の心理が極めて複雜にして測り難いものであり、この測り難い心理の迷宮に探り入つて一つ一つの謎を解きほごすことが、精神分析の職能であるが、多くの人達が常に見落してゐたこの結婚心理に、斯くの如く複雜な、『秘められた荊棘』のある事を見出したことは亦一つの功績であると云はねばなるまい。これを適宜に處理することに依つて正しい結婚生活の順調な營みへの機緣が作られる事になるのである。それ故に此の立場からすれば、結婚の外的形式などに就いて云々する必要は吾々には餘り認められない。それよりは、兩者の性的傾向と結婚後の營みといふ事が重要な問題となる。これは過去に於て文化の低い段階の社會では、極めて自然に素朴な形を以て行はれてゐたものであつて、敢て精神分析學に依つて創唱されてゐるものではない。精神分析學は唯この古代的遺習に就いて、深い無意識層の解剖を行つて、正しい解釋と處置法とを與へたに過ぎないのである。この過去の習俗とは何であるか。處女性のタブー、これである。

（二）

古代に於ける處女性のタブーは常に處女その者にあるのでは無く、處女に與へられた或る一つの機構がそれと認められたのである。具體的に云へば、處女が始めて男と性交する場合にのみタブーは存するのであつて、他の場合は一般的に定められた時期――月經時、出產時――以外はタブーでは無い。であるから、處女性のタブーは一生涯に一度

より外認められないものであつて、成年式、成女式といふ樣なものと同樣な意義を有する。事實、處女性のタブーは一定の年齡、卽ち成女式に於て重要性を有たせてゐる民族が多い。そして總ての女性はこの處女性のタブーを解除してから結婚の資格が與へられるのであつて、處女の儘結婚する事は嚴重に禁ぜられてゐたのである。それ故、處女性の解除と結婚とは別個のものでなく、結婚する場合に處女であつてはならないといふ事を以て、掟としてゐたのである。或人がこれを結婚のタブーと云つたのも當然了解出來ることである。結婚のタブーは、總てのタブーがさうである如く、魔の觀念と關聯してゐるのであつて、唯處女と接觸するだけならば、これは必ずしもタブーでは無い。處女との性的行爲が或る特定の人以外には不幸な運命を招來するといふ信仰の下に、嚴重なタブーが行はれてゐたのである。であるから處女そのものに神祕的な力、卽ちマナが有るのでは無く、處女をして處女たらしめてゐる所のものに於てこれを認めるのである。このものが失はれた時、處女のみ有つ事の出來る力が無くなつて了ふといふ事は、かのピカルデー物語の『乾草の上に放尿する王女』の話に出て來る樣に、この王女が處女である間は幾人もの求婚の青年達が、競つて高く積み上げた乾草を悉く濡して了つたに反して、或る賢い青年の計畫に陷てその處女性が失はれて了つてからは、乾草の上への放尿は他愛もなく失敗して、僅かに靴下を濡らしたに過ぎなかつた。この物語は、處女性——卽ち處女をして處女たらしめてゐるもの——に秘められた神祕的な力の存することを意味してゐるのである。

古代の習慣に於ては、處女は破瓜に依つてタブーから解除されて結婚の資格を持つのである。破瓜とは處女膜を破る事である。處女膜を破られた女は、性的交涉に於て危險を齎らさ無い。この立場からすると吾々は、處女性の本質は處女膜にあり、處女の有するマナは處女膜が司るものであると想像され易いが、多くの習慣に於て、處女膜それ自身に、人體の他の部分の附屬物、例へば毛髮とか、爪、齒、皮肌、眼球等が古來幾多の呪的材料となつてゐたのと同樣に、これにも神祕的な性能が獨立に附せられてゐるといふ證據は少しも探し當てられない。であるから、處女膜はそれ自身として單獨にマナを有するものでは無く、それが破壞される時に伴ふ或種の過程がタブーの對象となるのであると考へられる。要するに處女性のタブーは、嚴密に云へば、處女自身、又は處女膜に架せられたものではなく、

破瓜される場合の過程に危險が伴ふといふのであるから、處女との最初の性的交渉は絶對に避けなければならないと考へられてゐた。併し結婚生活が人間の總ての者の目的である以上、この難關は何等かの方法を以て切り拔けなければならない。こゝに初夜權といふ習俗が成立つたのである。

初夜權とは、婚姻を結ぶ以前に、新夫以外の者が新婦の處女膜を破る事、又は一定の年齡（月經開始期又は始まらんとする前期）に達した處女を試嘗する習慣であつて、この習俗は嘗て多くの民族に行はれてゐたものである。この習俗は幾多の民俗學の文獻に見られる所で、一々の實例を引證するは煩雜に堪えない。吾々が最も手近に知る事の出來るのは、二階堂招久の名に於て無名出版社から出されてゐる『初夜權』といふ著書に於てゞある。又フロイドの『分析戀愛論』（大槻氏譯フロイド全集第九卷）に於てクロウリーの『神祕の薔薇』Crawley : The mystic rose, a study of primitive marriage, より引用して立論してゐる。その他、佐藤紅霞氏の『世界性欲學辭典』に就いても知る事が出來る。唯玆では一つの實例を擧げて初夜權の全般を想像して貰ひたいと思ふ。草野忠孝氏の實見記に從へば、西カロリン群島のパラオ族の少女は、初潮にあたつて母から性の秘密を敎へられる。六歲乃至九歲頃に始めて手や關節にかけて爲された文身は、もうこの頃には肘迄延びてゐる。月經があり乳房が脹れ始めると人工的に膣を擴大する。母親は長く卷いた草の葉を娘の局部に挿入し、毎日これを厚くして遂に成年男子と無痛に交りを完全に果し得る樣にする。この間は專ら煮たり燒いたりした物ばかり食べ、安靜にして居なければならぬ。かうして母は凡そ一ケ月位を期限として年長の餘り頑固ならぬ男に委せて、娘に性の祕密を授けしめる。それからやがて手首に文身するともう一人前になる。（草野忠孝著『自由性交と戀愛の變革』一三八頁）これに依つて知られる樣に、處女性の破壞には二つの段階を持つてゐる。第一段は、人工的に器具又は手を以て處女膜を破る事、第二段は一定の人によつて試嘗される事である。この二行程が結婚生活に重大な意義を持つ事は次第に明らかになるであらう。

次に初夜權を行使する人の種類に就いてだけ擧げてみやう。酋長、族長、領主、地主、君主、長老、等の權力者、醫覡、祭司、僧侶等の神權者、その外親戚、知友、父兄、賤奴、異鄕人、外人等に依つても行はれる。これで見ると

處女の破瓜を行ふ者は、それに依つて降りかゝる災害に對して免疫になつてゐる者、又はこのマナよりも强力なマナを有してゐてそれを鎭撫する事の出來る者、或は禍を背負はせてやつて支障のない屑的人間である樣に思はれる。部族の權力者は强いマナを以て處女性のマナを征服する事が出來るし、醫覡、祭司、僧侶等の神權者は、彼等のマナを行使する方術に於て禍を免れる事が出來ると考へられてゐた。異人外人は野蠻人には不可思議な力を有つ者と考へられ、所謂『よそ者』として避けられてゐたし、又賤奴と同樣に禍を背負はしてやつても責任の降りかゝらぬ存在とされてゐたのである。唯、親戚、知友、父兄の行ふものに就ては、まだ說明が下されない樣である。

（三）

初夜權は斯くして、處女を破瓜する際に生ずる危險を避けるといふ意味を以て發生したものであつて、その動機は古代の人々が、處女との結婚、卽ち初夜に於ける不用意な性的交涉に依り嘗めさせられた苦い經驗に歸因してゐるといふ心理學的の觀方と、一つの因襲として社會的意味を有するものといふ二つの立場から考究せられてゐる。社會學的立場にあるのは、

（一）ラボック J. Lubboch の說で、一部落內の凡ての男子は、その部落內の總ての女子に對して均等に性的交涉を結ぶ權利を有するといふ、所謂亂交の時代から、一夫一婦制の個婚に至るに從つて、その部落の共有物である婦人を一個人の私有に任せる樣になる。併し以前には之れはその部落への異約であつた。異約者に對して與へられる制裁、瀆罪の意味を以て、その部落の代表者が、結婚初夜に當つて新婦を犯すといふ形式が初夜權であるといふのである。この說に對して、既にその根據を爲してゐる原始亂婚說は多くの學者に依つて破られんとして居り、又假令この說が成立つものとしても、婦女を獨占した罪を瀆ふ爲めに處女性を犯すといふ說明は極めて薄弱である。それよりも古來吾國などに於ても行はれてゐる花嫁花婿いじめ等の形式の方にもつと暗示的意義が見出されるのである。

（二）モルガン Morgan エンゲルス Engels 及びグロッパリ Groppali 等の權力說では、權力者が被治者に加へた橫

ぬとの反對論も成立つ。

暴であるといふが、初夜權俗が單に權力者のみならず、賤奴、他國人、或は知友親戚の人々によつて行はれてゐることを思へば、その全般を說明し盡すものではない。又、權力說は敢て初夜權に就いてのみ假定せられるものとは限らぬとの反對論も成立つ。

（三）ポスト A. H. Post は、婚姻生活の將來の慶福の爲めに、神聖なる力を有する人の思召しを受ける意味のものであると說くが、極めて古代の人達は、招福といふ事よりも除災に對して最も大きな關心を有してゐたといふ事は、民族學者の一致して唱へる所であるから、この說も部分的には妥當であるが全部的には妥當でない。

（四）類似呪法の一種であるとの說がある。即ち土地の豐饒と人畜の多產を祈求する所より出でた一種の象徵形式であるとするフレーザー Frazer, ハートランド Hartland 一派の人類學者の說は、宗敎的賣淫とか神殿賣淫といふ樣なものに初夜權の姿を見出すといふが、これ等の形式は民俗學上から見て初夜權よりも新らしいものであり、又豐饒を希求する爲めの處女獻納は、寧ろ女性全體が一定の祭禮日に於て行ふ亂交の形式に多くの意義を見出すのであつて、處女にのみこれを限る理由は見出せないのである。

（五）クロウリー Crawley は女性そのものが古來タブーであり、女性には特に多くのタブーの時期がある。即ち月經時、姙娠時、分娩時、產褥時等のみならず、女性に觸れる事が穢れだとされてゐたと述べてゐるが、これに就いてフロイドが批判してゐる樣に、『女性一般のタブーだけでは何故に個人として處女との最初の性交に對して特殊の掟が生ずるのであるかといふ事に就いての說明がつかない』。（「分析戀愛論」四七頁）

（六）ヴァン・ゲナップ Van Genap は新狀態に入る場合、又は新たな經驗『變移の儀式』rite de passage を有つことと等には總て危險が伴ふものとして行はれてゐた古代の考へ方につけられたものであつて、男女が新たな生活樣式に入る結婚式も、この『變移の儀式』として種々のタブーが附されてゐるが、同樣に處女から人妻になる場合も、同じく『變移の儀式』が要求され、このタブーを解除する爲めに初夜權俗は成立したのであるといふ觀方は、民族心理を貫いて極めて妥當である。

併し『變移の儀式』が如何にして起つたか、新狀態、新經驗に入る事に伴ふといふが、處女性を放棄する場合に何んな危險が伴つて、これより初夜權俗が生れたかといふ事は未だ問題として殘されるのである。これの說明は心理學的觀察を俟たなければ解決出來ないであらう。

（七）『血に對するタブー』は殆んど總ての人達に決定的の解釋だとされてゐる。實際に於て處女膜破壞の場合には出血が伴ふので、血に對して神祕的な力を認めて原始人は非常に恐れてゐたのである。『初夜權』の著者は可成りの獨斷を以て之れを論述し、古代にあつては、月經が始まる前に旣に性交の經驗を持つたといふ事、處女膜が現代女性のそれに比して强靱であつた事、これ故に結婚初夜の處女膜出血は月經の經驗以前のもので、生理的出血の最初のものであるから、初夜權は血に對する最初の恐怖として、マナの觀念と結合して處女回避となつたのであると云つてゐるが、この說明には俄かに贊同する事は出來ない。成る程、處女膜出血は初夜權俗を形成する一つの契機とはなつたであらうが、これのみを以てその全部であるとするは早計である。初夜權行使の二過程——處女膜の破棄（破瓜）とその後の性交（試嘗）と——は時間的に異つてゐるものであつて、處女膜出血の回避は、第一の過程たる破瓜によつて爲されてゐるから、或る特定の人の試嘗を受ける事の說明はつかないのである。尙フロイドは、流血の忌みなど〻云ふ事は原始人の餘り重要視しなかつたことかも知れぬと云ふ氣もすると證據を擧げて說いてゐる（「分析戀愛論」四三頁）が、必ずしもさうでない。吾々はフレーザー等の著書の中から過去の人が流血に對して多大な關心と恐怖心を持つてゐたかを知る事が出來る。

（八）以上は初夜權の起源に就いての諸說の大體であるが、此の外に未だ純心理學的な見方が立てられる。それは最初の同衾に伴ふ恐怖心と、處女膜破壞に依つて生ずる苦痛驚愕の爲めに起る膣痙攣といふ苦い經驗である。文明人の間に尙ほ屢々、結婚初夜の交りの招くこの不幸の爲めに悲慘な死に至る例をさへ聞く。膣痙攣は結婚生活の劈頭に於て新婦を見舞ふものであつて、醫學的の口調を藉りて云へば、膣括約筋の反射的痙攣性收縮に結合した處女膜及び膣口周圍の過度の敏感性を意味する。そしてこれは性交に於ける苦痛、恐怖、驚愕等に依つて惹起されるものである（勿

論先天的に膣口周圍が極めて過敏である爲めに性交不能な婦人もあるが）から、原始時代の婦人の如き强靭な處女膜を持ち、更にこれが熟さぬ早年に結婚が盛に行はれた時代、更に自然の恐怖の中に曝された儘の交接に於て膣痙攣の機會は決して尠くなかつたと思はれる。又、膣痙攣は必ずしも新婦にのみ起るものでないことは、古來性的交渉の愼まれなければならなかつた色々の場合――例へば、天災地變の場合、精神的感動の激しい場合――が總ての夫婦にもあつたことによつて明かであつて、これは精神の强い動搖と之れに伴ふ肉體的變北に依つて生じた膣痙攣の怖れに對する戒めと見るが至當である。この説が正しいならば、初夜權の二工程は容易に説明出來るのである。

（四）

以上觀て來た所に依つて、處女性のタブー（又は結婚のタブー、初夜權俗）は單なる社會學的機制に依つて出來たのでは無く、人間自身の苦い生理的並びに心理的經驗から成立つてゐるといふ事が想定出來るのである。性に就いて少しも豫備知識を有たず、又結婚に對して幼稚な考へより持つてゐない人達の結婚が、その最初から既にそぐはない雰圍氣を作り出す。彼等の精神狀態はこの新狀態に就いて極めて動搖し易くなつてゐる。彼等の神經は異常に興奮しきつてゐるのである、これは自ら身體の狀態にも及ぼして來てゐやう。又、彼等の未熟な性的操作は所謂盲滅法である。その結果として起る膣痙攣は最惡なものとして、決して少くは無かつたであらう。又、此處迄至らないとしても、處女が破瓜に於て感ずる苦痛は更に大きかつたであらうし、處女膜の破壞に伴つて生ずる處女膜出血は、殆んど闘爭を行つたと云ひ得る樣な效果を持つてゐる。現代の人々の間にも、斯くの如き初夜のいきさつがある。況して古代にあつて、性に就いての何等の知識も持たず、槪して早婚であり、處女膜も强靭であつた時代の性的操作には、大きな苦痛と拒否と暴力とが伴つたに違ひないし、又彼等の精神狀態も、當時の野蠻未開な狀況では極めて多くの不安が伴つてゐたであらうから、總ての點に於て性的行動は不利益であつた。

卽ち古代の狀況と、性的無知から釀し出す不安と恐怖と苦痛と、その結果生ずる處女膜出血、或は時に膣痙攣の悲

慘なる狀態、斯ういふものが當時の人々の心に災禍として强く印象づけられたのである。そして古代の人々は、不幸や災禍は單なる自然的事象とは考へなかつた。不幸や災禍の生起は總て神祕的な存在にその源因が歸せられた。膣痙攣は明らかに性的行動に就いての時處、樣態を誤つた爲めに招致せられた神祕的存在の怒りであると考へられ、出血の畏怖は、以前に私が本誌上で述べた如く、本性的なものであり、之れにも魔の觀念が附隨したのである。處女そのものは決してタブーでは無く、處女との性的交涉がタブーであるといふのはこれによつて理解出來る。古來處女との交接は災禍又は死を齎らすといふ云ひ慣はし、及びそれに對する習俗は、幾多の民族の有する所であつて、例へば『初夜權』の著者に從へば、Yahans of Liendel Fuego の間には、若し誤つて處女と交つた時は直ちに海中に身を淸めなければならぬ、若しさうしなければ病患を得て死ぬと信ぜられ（「初夜權」一九九頁）、又英領アフリカの Wayao 族は婦女が處女のまゝ男子に接する時は本人はもとより、相手及び母親迄も死の襲來を受ける。幸に死を免れても子孫を得ないか、或は是れに劣らぬ程度の慘害を來すとの信念を持つ（同上二〇〇頁）といはれてゐる。

斯樣な信念は、過去に於て味はつた苦い經驗から生じたもので、これを避ける爲めに、豫め結婚前の一定の時期に破瓜して處女膜を取去り、性的交涉を不快ならしめない樣にして置いて、更に性的老巧者をして性行爲に就ての手ほどきを授けさせる樣な習慣が行はれた。そしてこれが更に、人間が新奇に對して抱く樣になつた畏怖心の結果として考へ出された、ヴァン・ゲナップの所謂『變移の儀式』に依つて形式化せられ、初夜權俗といふ一定の形態をとる樣になつたと見るべきである。

これは初夜權俗に對する意識的（又は經驗的）の說明である。一般の人は此の說明を妥當として承認し、これが全部であると思ふであらうが、併し吾々の生活は意識的といはれるものゝ底を流れる無意識的な力に依つて支配されてゐることは精神分析學によつて闡明された。初夜權の起源に就いても、精神分析學は無意識の働らきを透して、極めて異色のある觀方をしてゐる。この解釋に依れば、『女の未完成な性感情が、始めて彼女に性交を敎へる男に對して憤りとなつて爆發する』といふのである。この理由に就いて云ふ所は、第一に處女性の矜持――處女の價値を決定す

るところの性器官が破壊される爲めに生ずる自尊心の毀損、第二は最初の性交に對する期待と現實とが一致せぬ爲めの失望であつて、これは本來性交に對して總ての人は多くの禁制秘密を附して、羞耻心は性的操作の上に最も強くあらはれて來、そうして女のなごやかな感情はこの狀態に於て發露されるのである。所が結婚に於ては公然と許された性交によつて、この期待してゐた感情が現はれる事が出來ない爲めに早くも最初の生活に於て失望を來すのである。第三は、これよりもつと重要な、基礎的な契機で、幼時に於けるリビドー定着はエディポス境地 Oedipus' situation に於て女性にあつては父親（又はその代償たる兄）に就いて爲される。それ故女性が自分の戀愛對象を主として父親に選び、夫は次席候補者たるに過ぎない。であるから父親に定着の強い女性程、夫に不滿を持つてこれを拒否する様になる。原始未開の多くの民俗に見られる様な處女性破壞の習慣は、部落の支配者とか長老又は僧侶、神官等の如き父の代償者に依つて爲されるのは斯かる心理的起源に因るのである。次に更に深い層に於て、女性の有する男性器羨望 Penisneid といふ無意識的な働きが見出される。フロイドは、女性が嘗てその兄弟を男性器の故に妬み、それが自己に缺如してゐることに就いて劣等感を持つた時代のあつた事を、或る神經症婦人を分析して知つた。この劣等感は男性一般に對する無意識的な敵意となつて彼女の精神を支配してゐる。この危險を避けさせる爲めに、處女性のタブーは出來たのである。要するに精神分析學に從へば、初夜權俗は最初の交渉に於て爆發する處女の憤り――女性一般に有たれる男性への敵意は處女が最初の交渉を持つ男に於て爆發し易い――の矢面に立つべきものゝ意味を以て成立したものである。

併し現代では初夜權は行はれてゐない。それ故自ら女性の有するこの古代的反應である處の無意識的な敵意を壞く事が出來なくなつた。處女から人妻となつた婦人の家庭生活といふものは、宿命的に不調の因を孕んでゐる。運命のまゝに從ふならば、最初の結婚は必ず破鏡に終るべきものである。さうでなければ所謂、『腐れ緣』の夫婦として絕えざる不平といさかひとを續け乍ら、それでも離れる事が出來ないで終るかである。この後者の心理をフロイドは、女性が處女性を破壞した男に對して復讐を果してゐないといふ無意識の迫力の爲めだとしてゐるが、それを敷行すれ

ば、畢竟は破鏡に終るべきものである。颱風ならば愚律ついた天氣と云ひ得べく、それは何うしても一暴れ來なくては收まらぬ。兎に角、精神分析學の結論からすれば、女が處女性を捧げた最初の結婚は原則的には破鏡に向ふべきものであつて、幸福な結婚をしやうとすれば、勢ひ再婚か、又は非處女を選ぶべきであるといふ、極めて非文化的な結論が引出されるのである。さうすると文明人の要求する處女の純潔性といふものが塵埃の如く價値の無いものとなつて了ふ。

精神分析學は科學である以上、勿論事實を事實として提示するのであるから、右の如き結論も、假令非文化的のものであつても、それが人間の本性的のものであるならば仕方が無い。併し乍ら精神分析學はこの宿命を人力の如何ともする事が出來ないものとは解さない。この科學は極めて經驗を重要視するのがその特質である。最初の結婚は破鏡に陷るべき多くの可能性を持つが、嚴密に觀るならば、それの根據を爲してゐる男性への妻の敵意は後天的なものであつて女性の一のコムプレクス——去勢コムプレクス Kastrationskomplex——に不可避的のものである。コムプレクスは精神分析法に依つて解除出來るから、女性の無意識的敵意も、吾々は敢て恐るゝに足りないのである。

（五）

初夜權俗（又は處女性のタブー、結婚のタブー）は、畢竟、無意識心理的契機の上に更に生理的契機を加へて生じたものゝ習俗化であつて、これの要素として以上述べた如き、女性の男性に對する無意識的敵意、處女膜破壞の際の生理的苦痛、出血、及心理的の不安（新狀態に入る場合の）である。それが未開野蠻な段階を背景として魔の姿をとつて現はれて來たのである。そしてこれが、昔は人間の結婚生活を不幸から救ふ所の最善なる方法であつた。

ところが、文明は人間の精神を昇華し過ぎて纖細にし、長い間一定の慣はしとして行はれて來たこの素朴な形式を露骨、卑俗卑猥であるとして拒否して了ふ。又、古代人が有してゐた嫌新性——古代人が總て新しいものに對して恐怖を抱き、これをタブーとしてゐた傾向——は現代的に洗練された敎養に依つて、ロマンチックな好新性に替えられ

て了つた。事實に於て、文化は處女性を重要に評價し、總ての結婚にこれを要求する樣になつた。過去の習俗に於て處女性の嫌惡と尊重とが如何なる經緯に依つてなされて來てゐるかといふ事は、尙ほ民族學者や文化史家の意見の別れる所であるが、少くとも現代にあつては處女性は女性の重要なる財產である。財產であるが、併しそれは過去の人達が認めてゐた樣な商品的價値ではない。文化はこれに人格的意義を附し、從つて等しく男性にも要求される所となつた。それ故結婚以前に於て童貞性、處女性を失ふ事は極めて不道德の事であるとされてゐる。

併し文化のこの道德律は餘りにも不用意に行はれて了つた。不用意と云ふは、初夜權の發生的意義を深く究めずに棄て去つて了つた爲めに、結婚生活の幸福がこれに依つて緩衝されてゐたのに、その據り所が失はれて了つたことである。結婚の幸福に缺くべからざる關門として發達して來た初夜權俗を、之れに代る文化的方法を考慮せずして棄て去つた結果は、文明人の性的無知と、行き場を失つた（女性の男性への）無意識的敵意の焦慮とに依つて、神經症的な不安を生み、文明的結婚生活を動搖せしめることになつたのである。

結婚生活を如何にして幸福に導くべきか、これが次に與へられる所の課題である。文化的な正しい性的知識を持つ事と、女性の男性に對する無意識的敵意を分析處理する事とである。前者は識者によつて唱導され漸く一般人の關心を牽く樣になつて來たが、後者は未だしである。家庭生活の全部が性生活に依つて支配されてゐる間は、結婚生活を順調ならしめる爲めの性的知識は就中必要ではあるが、文化社會に於ける結婚生活が次第に精神的方面に醇化されて來るに從つて、性的行動を以てのみ結婚生活を高めて行く唯一のものとする事は出來ない。結婚生活の幸福への道は前に述べた如く、精神分析に依つて女性の男性に對する無意識的敵意を消化する事がその重要な一つである。その具體的方法に就いては尙ほ稿を改めて說かなければならない。（完）

性交と受胎の生物分析（フェレンチー）

高水力太郎譯

吾人は肉體（ゾマ）と性細胞との間に相反影響のあることを語つたが、併しゾマに依つて性細胞が影響を受ける事を如何にして考へたかに就いては、まだ何も語らなかつた。獲得せられた性質が遺傳するかどうかの、例の喧しかつた問題を、吾人がこゝで又持出すであらうと期待する者はあるまい。それに就いて精神分析學は如何に考へるかに關しては、既にフロイドがその生物學的論文に於いて盡してゐる。祖先の經驗に依つて子孫が影響を受けるものでないとワイスマンが主張したに對してフロイドは反對してゐるが、フロイドの反對説になほ我々の附加し得べきことは、正にフロイドの性説の中に擧げられてゐる精神分析的實驗である。この實驗に依ると、凡そ有機體中に起る何事かにして、同時に性の亢奮を喚醒まさないものはないと云ふのである。ところでこの性的亢奮は常に性細胞の上に影響を及ぼすものとすれば、さうしてそのやうな影響の跡を性細胞がいつまでも保有してゐる性質を有するものとすれば、我々はさう云つたやうな影響が如何にして起り得るか、また起り得たかと云ふことに就いて、想像することが出來る。ダーギンは性細胞的實質の起源は『汎發生的』であると云つてゐるが吾人はそれとは違つてかく主張するものである。卽ち、性細胞は單にゾマの派生としてゾマの分裂から生じたのではなく、寧ろその根源はゾマそれ自身よりは非常に古いものであると。併しとにかく、性細胞はゾマのその後の成行きに依つてやがて決定的に影響されることは、丁度それと同時にその正反對に、ゾマが外界の刺戟並びにそれ自身の衝動に依つてのみならず、性細胞の傾向に依つても衝動的刺戟を獲得するやうに思はれるのと同様である。ゾマと性細胞との複雑な關係を以上のやうに細々と說いて來たが、それはたゞ性交及び受胎の器關並びに

過程の間の類似をよりよく理解せんがためであることを記憶しておきたい。この理解は、多分或る程度までは、出來るやうになつたと思ふ。

以上述べ來つたところを大觀し易からしめむがために同時的に發生する事柄を平行的な表にして示すならば、次の如くである。

	種族發展史	個體發展史
第一期變動	有機生活の發生	性細胞の成熟
第二期變動	單細胞個體の發生	性　腺
第三期變動	性的交渉に依る蕃殖の開始 海中に於ける種族發展	性腺から成熟性細胞の「誕生」 母胎内に於ける胎兒發展
第四期變動	海の乾涸、陸上生活への適應 性交器關を有する動物種族の發展	誕　生 性器帶域主權の發展
第五期變動	氷河時代、動物より人類へと發展	潜　在　期

右の表の二つの題目に就いては、多少の說明が必要だ。吾人は有機的生命の發生と個々の單細胞生物とを區別するものであるから、卽ち吾人は、フロイドが無機物から有機物が發生したのは宇宙に大變動があつたゝめであつたと云ふ假定を下してゐる、その假定を二重の大變動としなければならないとするものである。第一の變動に於いてはたゞ有機體、つまり或る有機的構造に基く物質のみが發生し、第二の變動に於いては、獨立した、（自動力と自律力とを有する）個體がこの物質から派生するやうになつたのである。元來この物質（Materie）と云ふ語はラテン語の Materia から由來してゐて、母（Mutter, mother）と云ふ語と同根であつて、計る、形成する、構造するなどの意がある。卽ち、語源的には母なる實質と云ふほどの意味である。で、我々は第二の過程（自動力、自律力ある獨立の個體の發生）を最初中の最初の誕生（その後のあらゆる誕生の原型）と見ることが出來る。この意味に於いて我々はやはり、フロイドの假定說に還元しなければならない。フロイド說に依れば、生命の（少くとも個體の）發生は物質（材料）の分裂に存するのだ。要するに、これは自己分裂の最初の實例であつたのだ。外界變動のために、物質（材料）の諸要素は一大錯綜體として混在してゐるに堪えなくなり、混在的群衆はより小さき統一體として分離するやうになつた。或る結晶性ある物質から（つまり「母液」から）一つの結晶體が「乾燥」に依つて生ずる際には、やはり同樣な力が作用してゐたに相違ない。

說明を必要とする今一つの題目は、人類の祖先が遭遇

した最後の大變動として氷河時代を置いたことである。私が一九一〇年に發表した『現實感の發達段階』と云ふ論文に於いて私は、文化の發展をこの大變動に對する反動として解釋しようと試みた。今や私はこの時に云つたところへ更にかう附言しておかねばならない。卽ち、エロス的現實感覺は既に發展して性器的段階に達してゐたが、それが氷河時代のために後々までも影響を受けて、エロス的現實感覺としては利用されない性器的本能が、『より高尙なる』、より知力的、より精神的（道德的）な行動に利用されるやうになつたのだと。

吾人が既にこれまで二三の機會に述べた通り、性器の出來たと云ふことそれ自身は固より、性器に依つて性本能の自餘の組織が身輕になり他の仕事に向ひ得るやうになつたと云ふことは、仕事の分配上に於ける本質的な進歩として、また現實感發展の素因として、考へらるべき事柄である。これに對してはやはり、種族發生上の平行事實が存在すると云ふことも、云ひ添へておくべきだらう。或る種の有脊推動物（それに於いて始めて性交器關が發生したと云はれてゐる）に於いて、始めて腦髓（それ以前の動物に於いては眞直であつたものが）が彎曲するやうになつた。また移動動物に於いて始めて硬皮を有する肉體が生じ、それと同時に腦の兩半が聯絡結合するやうになつた。この事は、知力的行動能力に於ける恐らく偉きな進歩であつた。人間の幼時に於ける性的潜在期（四、五歳頃から思春期まで）の間に文化的能力の發展するのは、つまりたゞこの性器本能と知力性との原始的、內面的結合の本質的に變化せしめられて表現せられたものに過ぎないと思はれる。

併し腦の發達と云ふことを問題にするならば、吾人は今一つの考へを報告したいと思ふ。この考へは性器力と知力との關係に對して、一つの側光を投ずるものであるが、併し同時にまた、思考器關の働き具合の肉體的模範（原型）を示すものである。吾人は既に、嗅覺なるものが性に於いて如何に重大な役割を果すものであるかに就いて述べておいた。他方に於いてまた、腦の發達には腦の嗅覺中樞が（從つてまた性感に對して匂ひの役割が）愈々重大になつて來る。かくて大腦の半球の双方を解剖的に、機能的に强化することが、最も大切の事となる。直立歩行の生物にとつては鼻の代りに眼が主導帯域となつた、性の方面に於いてもやはりさうなつた。類猿人や人間は、動物學者ツェル Th. Zell の云ふところに依ると、『眼の動物』であるさうである。で、今や我々はかう考へる、嗅覺器關と思考との間には非常に大きな類似が存し、嗅ぐことは形式的に、思考の生物學的原型であると見做

され得るほどである。嗅ぐことに依つて動物は、營養物の最小の端つくれを『味ふ』のである。何となれば動物はその營養物から發散するガス體の氣を鼻孔から取入れて、然る後にそれを喰物として口から取入れることに決心し直すのだからである。丁度そのやうに、犬やその他の動物は雌の性器を嗅いで、然る後に自分の男器をそこに挿入するのである。ところで、思考器關の機能はどうか、フロイドは何と云つてゐるか。エネルギーの最小量を支出する試驗行爲である。では、注意とは何か。感覺器關の助力に依つて環境を故意的に、一定期間、探索することである。さうしてその際、亢奮の小量が知覺のために支出せられるのである。――思考器關と嗅覺器關、これ等二者は現實機能に役立つのである。その現實機能とは自我的な機能であることもあらうし、エロティッシュな機能であることもあらう。（承前完結）

附記――右は前號からの結論であつて、本稿を以て完結した。フェレンチーの學才を十分に發揮した、實に暗示に富んだ好論文であると思ふ。内にに言及せられてゐる『現實感の發達段階』と云ふ論文は、斯學界に於いて既に古典視されてゐる名論であつて、やがて私が本誌上に飜譯紹介したいと思つてゐる。こゝに簡單に紹介しておくならば、第一は無條件（絕對）萬能感段階、第二は魔術的幻覺性萬能段階、第三は魔術を伴へる萬能段階、第四は魔術的念慮及び魔術的言語の支配する段階である。詳しくなほ説明を要するが、精神分析の考へ方に多少親熟して來てゐる人々ならば、右の四つの名を聞いたゞけでも、子供等の實際生活を觀察することに依つて容易にその意を判知することが出來るであらう。（譯者）

（四七頁末から續く）

其の問題は何れとしても、此の發情帶域の性心理に於ける意義が、果して既に充分認識されて居るだらうか？シャムバールが最初から明瞭に正常現象として記述したにも拘らず、其後は主として本來神經症の病理に專念し發情現象が極端に走つて現はす倒錯現象にのみ沒頭する研究者の手に委ねられて來た關係上、此の發情帶域が正常なる性愛過程の重要なる一部をなすもので、且全く尋常な戀愛術に於いても正當の役割を演じてゐる點が、必ずしも常に明確に强調されて來はしなかつた樣である。發情帶域なる考へ方及命名の由來、其の展開を、簡單に辿つて見るのも、强ち無用の業でないと信じた所以である。――一九三四・九・二一譯――

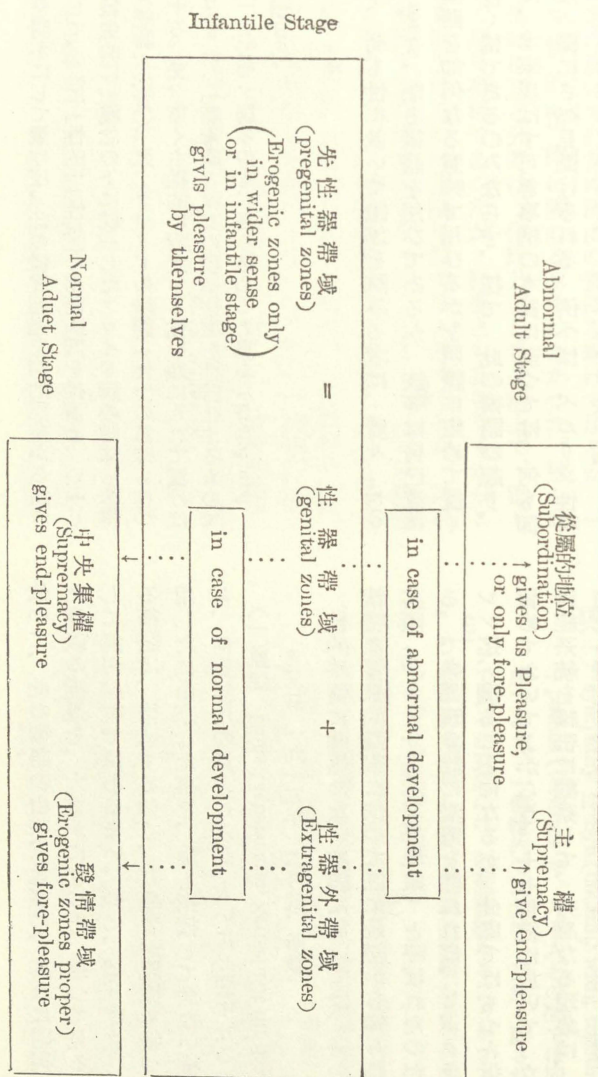
發情帶域論（ハヴロック・エリス）

——"The Doctrine of Erogenic Zones," Havelock Ellis——

千葉廣洋譯

譯者小序——この論文はエリスの『性心理研究』の第七巻中の一篇である。これは既にM氏の邦譯もあるが、對照して見ると、抄譯で且つ曖昧な個所もあるので、敢へて自ら試みた次第。相當良心的に譯したつもりであるが、なほ不備な點は御注意を乞ひたい。これを精讀して、自分としてはフロイドの「性說」や「幼兒性感論」や「リビドー發展說」が呑込めるやうになつた。これ等諸論を讀む人々への豫備知識としても、エリスのこの論文は價値があると思はれる。

なほこの題名の意義及び譯語について一寸云つておきたいことがある。元來 erogenic は eros(love)+genes(création)で、『色情を生起(誘發)させる』の意で、M氏は簡單に『色情帶』としてゐるが、それは genes（生起させる）の意味が現れない。「催淫帶域」と譯さうかと思つたが、「淫」の字に惡い意味があるのでよした。科學的術語には價値感情の入りこむことは絕對に避けねばならぬ。「精神分析」誌に連載の「語彙」中、「肛門帶域」の項下に、「性感區域」と譯し、同じく「性感帶域」の項下に、「性器の外に、口腔、肛門、尿道口、及び皮膚、乃至其以外の敏感な表皮」とあり、矢部氏「精神分析の理論と應用」第八章にも、「性的帶域」と譯してある。尙、「精神分析總論」六〇頁にも、「性的帶域」とあるが、同書六二三頁に現はれる「性器帶域」は、「ゲニタールツォーネ」の譯で混同してはならない。（同書索引には混同せる如くなるは、性器帶域は廣い意味では發情帶域であるからならむ。）以上の如く、「性的帶域」、或は「性感帶域」或は「性感帶域と曖昧に譯してあるのは、「性器外」と、「性器」とも含めてしまつてあるためであるが、性器プロパーと、他の「性(感)的帶域」プロパーとの、主從關係を明瞭にするためにはこれ等譯語を區別するのも一法かと思ふ。性器に於ける中央集權が確立せぬ迄に、群雄が勝手に割據して居た各領地（方々の快感を與へる帶域）——其時迄は性器も其の內の一に

過ぎない――は、精精、廣義の「性的帶域」であり（譯者は既に屢々用ひられて居る「性器前帶域（プレジエニタルゾーンズ）」なる語を之れに充てたい）、やがてリビドーが中原（性器帶域）に乘り出して他を統一し政權を確立して後は、「性器帶域」を除いた殘りの「性器外帶域（エキストラジエニタールゾーンズ）」は、各局所の感覺を中央へ（proximal）傳へて中央を動かし、又中央の發動に依つて愈々連絡的に敏感になり（distal）、遂に總動員を經て大活動を準備規定する所の末梢機關に成り下がる。其れが「發情帶域」プロパーなのであるから（若し此の發展がうまく運び得ないで何れかに政權を乘つ取られゝば變態が現はれる）、斯く時期を異にする「廣義の性的帶域」と、狹義なる「發情帶域プロパー」との意味上の區別、及び、最初は同等の仲間であつた「性器帶域」と、「性器外帶域」との、後來の主從關係を明かにする必要がある。

此を明かにして置けば、此の發展經過を病的現象から逆に分析して、「性」「性的」「性感」の用語範圍を推廣め、いみじくも發生的に一概念の下に統一したフロイド說の妙味も味得され(總論六〇頁)、又、フロイドの所謂「性」の意味もはつきりする。又、斯く主從的に對立する點を頭に入れて置けば Wittels が、「藝術家とは其の發情帶域(ゾーンズ)を性器化する(ジェニタライズ)ものである」と云つて居るのも、呑み込めると思ふ (Freud and His Time)。

×

當今、苟も性に就いて論述を試みる者は、屢々 "Erogenic zones" なる術語を用ひてゐるが、彼等は自己流に此の術語を如何なる意味で用ひるかを明瞭に定めて置く者は極く稀であるのみならず、扨て、此の術語の起り、乃至は、本來現はす可き事柄の本質に至つては、何も御存知ない樣にさへ見受けられる。例へば、ベルリン性科學及優生學醫學會に於いて、リーベルマンは、『フロイドの所論に關連して、發情帶域を論ず』と題せる講演を試みたる內に、彼も、此の術語に就いては、其れが『佛語形から轉來した(フランスの學者の間から唱へ出されたもの)らしい』(一)と云ふ以外には、何も知らないと述べて居る如きである。甚しきに至つては、此の術語は、フロイドが提唱したのだと做すものさへある位である! 依つて、此の術語(ターム)の由來、並びに、其れに附與されて來た意義の變遷を、大まかにざつと、辿つて見るのは、決して無用の業ではあるまい。殊に、"Erogenic zones" なる術語は、後述する如く、某學者が記憶を過つて誤り引用したに由來した事を、誰も指摘して居ない樣であるから、尙更無用の業どころか、大いに必要になるのである。

(一)原註 Hans Liebermann, Zeitschrift für Sexualwissenschaft, 一九一五年一二月號、所載。

性的感情に關係のない廣義に於いては、斯かる現象は精密な醫學的觀察に依つて既に最初から知られて居た。其頃 "Sympathy" (共感現象)(一)と呼ばれたのが、是である。で共感現象說の濫觴を尋ねれば、ヒポクラテスやガレン(二)迄、溯ることになるが、此處ではもつと近代に筆を留めておいてよからう。十七世紀に於いて、ウィリス(三)は神經系統を細密に觀察して、共感なる現象は、人體の如何なる機制に依つて働くものかを、幾分闡明するに寄與する所あつたが、其の約一世紀後、一七六四年に蘇格蘭の著名なる醫師ロバート・ホィット(一) (Robert Whytt、彼の著書の表紙には Whyte と綴つてある) に至つて、初めて包括的に、其の劃時代的著作『所謂神經質(ナーヴァス)、憂鬱症(ヒポコンデリアック)、及ヒステリー症など諸病の本質、原因及療治に關する所見』(Observations on the Nature, Causes and Cure of

Diseases Commonly Called Nervous, Hypochondria and H.steric）中に於いて、文獻並びに彼自身の經驗から數多く例證しつゝ、「共感現象」を扱つた。彼は、卷頭に於いて先づ多くの例を擧げて、『全身に亙つて見られる一般的共感現象』を論じ、續いて、『身體の若干の器官の間に特に見られる甚だ著しい共感現象』にも論及し、就中後者に就いて非常に澤山の實例を擧げて居るが、一つとして性（セクシュアル）的情緒（エモーション）に觸れるものはなかつた。蓋し此の性的情緒に亙る分野は、俗說乃至日常生活上で、誰もが知つて居る事柄であつたが、科學ともあらうものがこんな事を取上げるのは見識に關すると思つてゐた。其れより數年後、彼の偉大なるジョン・ハンター[五]は『筋肉運動に關するクルーン講座講演集』[六]（Croonian Lectures on Muscular Action, 1776—1782）の內に、「共感現象」に、『身體の一局部（パート）に刺戟を與へたゝめに他の一局部（パート）が起す作用（アクション）』と云ふ天晴れな定義を與へ、續いて、高等動物に於いて「共感現象」が起きるに、三樣の樣式（モード）——全く異つたものではないが、兎に角——がある事を識別した。が、ハンターも、其の先驅者達の御多分に洩れず、「共感現象」があれほど迄に見事に現はれる所の性感の分野には、全然觸れる所がなかつた。而して今日に至る迄、彼の後繼者も亦、“Synalsthesia”（共感覺）や、“Synalgesia”（共痛覺）[七]の如き、非性感的分野にのみ、沒頭して居るのである。是は、科學的探求者でさへが、古來性に置かれて來た禁制（タブー）を、如何に執拗に今日迄遵守して來たかの意味深い證據である。次に本題目の「發情帶域」說の展開を辿つて行つて見ると、此の禁制が一層執拗に遵守されて居る事が分る。

註（一） sympathy は Syn (Gk.sun, with, together, alike) ＋pathos (feeling) で、人と人との間では同情同意同感であり、一個體內では共感、交感と譯されて居る樣であるが交感には、交感神經なるよりポプュラーな術語があり、果して此と直接的關聯があるのか疑問であるので、共感を採る。

（二） Hyppocrates (B. C. 460—377) 醫學の父、勿論彼以前にも醫者はあつたらうが、彼は其等を「古い醫者」と呼び、自由な觀察から理性に訴へた經驗的知識を醫術の基礎と主張して其等を超越した。患者の顏觀、脈搏、體溫、呼吸、排泄物、咯痰、局部痛等を細心に組織的に調べたのは彼が最初である。又疾病を急性、慢性、流行病、風土病とに分け、治療に就いては多くの藥を知つて居たが、「自然の全能」を信じ、新鮮なる空氣、滋養食、便通、葡萄酒、鳩麥湯、按摩、水治法等を用ひたと云ふ。

Claudius Galen (130—200?) アジア系ギリシャ人、

アレクザンドリヤで醫學を習ひ、羅馬に住み、勤勉と熟達により帝國最大の醫者となる。Marcus Aurelius 帝國の侍醫、種々の動物の屍體、活體、解剖を行ひ、神經系の働きを調べ、七個の腦神經を區別し、實驗生理學の開祖、善かれ惡かれ彼の觸れなかつた問題は一つとして無かつた。『ヒポクラテス及プラトンの學說に就いて』を著し、數學、文法、哲學、醫學に關し四百以上の著書あり、常時十二人の筆耕を用ひたと云ふ。其著書は數世紀に亘つて、主要なるテキストであつた。故に「精密なる醫學的觀察」の元祖として、兩人が引合に出される所以。

(三) Thomas Willis (1621—1675) 初めオクスフォードで神學を修めたが、クロムエルの迫害から方向轉換し醫學に進み、後倫敦で臨床家として名聲を博した。彼は時として奇矯な實驗方法、推理方法を用ひたが、記錄中に屢々透徹せる見解を殘し、彼の觀察力の銳さを示して居る、腦殊に其の血管に就いての解剖は著名な業績である。

(四) Robert Whytt (1714—1766) エディンバラーの神經學者、中樞神經系統の既知の領域を切除して後動物が如何樣に種々の刺戟に反應するかを研究し、其成績を記載した著書は神經學史上最も著名なものの一つである。脊髓は反射作用に必要なること、但し內脊髓を要しないこと、反射作用の機構及意義を充分把握した。生理學的心理學に對する貢獻甚大。

(五) John Hunter (1728—1793) 蘭格蘭生れの外科醫、解剖學、生理學、胎生學、實驗病理學を英國に於いて初めて論じ、此等を外科學に應用し、當時內科學の下位にあつた外科學に科學的基礎を與へた。

(六) Croonian Lecture は、十七世紀の最も華かなる生理學者の一人 William Croone (1633—1684) が創設した講座。

(七) Synaesthetia=syn+aesthetia (perception) で、共感覺と譯し Synalgesia=syn+algesia (sense of pain) で、譯語が見當らないが、「共痛覺」と譯して置く。共感覺は獨文で Mitempfidung 或は sekundäre Empfindung (副感覺) とも云ひ、例へば、鋸の丁立の音が歯を浮かし、喇叭の音を聽いて赤い色を見たりする樣に、一種の感覺刺戟に依つて其に相當せる感覺と共に生じたる異類感覺(Qualität の差でなく、Modalität の差) が是である。吾々が或る音を聽き、又は或る色を見て、直ちに一種の心像を見るのは弱い共感覺に屬し、人に依つて殊に女子、音樂家、文學者の或者は、其の度を越えて、音を聽いて色を見たり(photism)、色を見て音を聽いたり (phonism) する。Beethoven 作ハ調短音階シンフォニー中のハ調長音階の所を聽い

て非常に强い白色光感を感じ、爲に眼を閉ぢなければならなくなる人があり、Lizst は屢其の指揮するオーケストラに、『もつと紫色に』『もつと赤色に』と求めた如き是である。音で色を感ずる例は、俗に云ふ「黄色い聲」や「赤い笑ひ」(Andreyev) や、詩人が各樂器で色の感じがちがつたりする（ハープは白、提琴は靑、ノルートは黄、オルガンは黒の如き）のが其だ。『香と色と音とは一致す』(Les parfums, les couleurs et les sons se répondent) と云つた Baudelaire の如き、Huysmans の作に出て來る主人公 Des Esentes 侯が、各種の酒を盛つた小さい管を幾つも併べて樂器の樣に組立て、扣を壓せば欲しいと思ふ色々の酒が出て其味が皆一々各種樂器の音になり、調合して飮めば樂器の合奏を聞くのと同一の感じを生じ、又香料を嗅ぐと美しい景色や姿を聯想する事が出來る如きは、嗅覺、色彩感覺、味覺の交叉する例で、此が藝術上の現象になれば、佛の Gautier が呼んで「藝術の轉換」(Transportations of art) としたものになり、象徴派の發生の由來となるのだ。此の現象を Wundt は感情の共通に基かしめ、Bleuler は之を神經の共同興奮に依るとして居るが、高橋穰氏は之を、全く經驗的に聯合したものとする事は不合理で、其の遺傳關係が發見されて居るから、神經中樞に於ける特別な關係が根抵をなして居るらしく思はれ、今の所感情の同一なるが爲めに聯合してゐるとする以外に適當な解釋がない。

次に來るものは、シャルコー(一)であつた。彼は共感現象の研究を、謂はゞホイットが捨てた所から取上げて、其に尙一層の細密さを與へたのである。卽ち、或る一局部(リージョン)位に加へる壓力を加減する事に依つて、ヒステリー性痙攣が誘發されたり、或は急に竭んだりする事を、シャルコー自身が發見した所の「ヒステリーの誘發帶域」(二) (zones hystérogènes) の事が特に問題になつて居るのである。是とても、實はシャルコーが始めて觀察した現象ではない。遠くはヴィリス及ブールハーフェ(三)の如き、近くはブロディ(四)も、此の現象を認めて居つた。が一八七三年に、特に此を提唱し、其の著作『神經系統の病症に關する講義』(Leçons sur les maladies du système nerveux) 中に始めて斯く命名したのは、シャルコーである。該講義中では、只卵巣の感覺過敏の研究だけを扱つて居るが後に一八七九年に及び、感覺過敏になり得る帶域(ゾーン)は、卵巣區域だけでなく、廣く分散彌漫してゐる事があり、而も皮膚面、粘膜、或は內臟の如き、異つた方面にも亘り得る事を認めるに至つた。(五) が此處でも、性的現象に全く觸れて居らず、類推だに試みて居ない。ジーユ・ドゥ・ラ・トゥレット編纂の綜合的詳論の內に於いても、性的

情緒に關する箇所が全部で僅か一、二頁を占めて居るに過ぎない。此點では、シャルコーの偏見と全く一致して居る。彼は、性の如き尾籠な問題は、假令此の現象を最も良く說明しさうであつても、苟めにも學術的論述に上つてはならないと考へたのであらう。處が、此の「ヒステリー誘發帶域」こそ、實に後來「發情帶域」だと判明するに至つたものの替玉、或は補償的代用物、乃至は病的變形であつたのだ。が、此點にシャルコー派は全く氣が付かなかつた。

註(一) Jean Martin Charcot (1825—1893) フランスの醫者、近代神經病理學の代表者、Salpêtrière 婦人科病院醫、巴里醫科大學病理解剖學教授、一八八二年政府特に彼の爲に Salpêtrière に神經病理講座を設く。ヒステリーに關する研究にて著名、催眠術の本質を暗示にありと主張する Nancy 派 (Liébault, Bernheim) に對し、催眠術をヒステリー症と關係せる病理的のものと考へた。

(二) hysterogenic=hystero+genic で、ヒステリーを誘發するの意、更に希臘文で hystera は子宮の意で、ヒステリーが子宮の加減で起ると考へられて居た。精神分析學が男子もヒステリーに罹るとした時世間が嘲笑したのは此處に由來するのである。尙 hysterology はヒステリー學ではなく、子宮學である。

(三) Hermann Boerhaave (1668—1738) 和蘭の醫學者、哲學、數學、神學を修め、傍ら獨學で醫學を習ひ、後神學を棄て醫學に專心し、一七〇一年 Leyden 大學理論醫學講師となる、名聲遠く東洋及び、當時支那から "Mr. Boerhaave, Europe" とだけ表書した手紙が届いた位。醫學に於ける折衷學派の祖。

(四) Sir Benjamin Collis Brodie (1783—1862) イギリスの外科醫、College of Surgeance の比較解剖學教授、王の外科醫、學士院長たり。關節病患の各型を明記し且局所性のものと、ヒステリー或は神經痛によるものとを區別した。皮下外科學の開拓者の一人。

(五)**原註** シャルコー派の「ヒステリー誘發帶域」說は Gilles de la Tonrette 著 "Traité de l'Hystérie," "Hystérie Normal" 第六、七章に明細に紹介されてゐる。

性の領域がやうやく表面的に問題になり出したのは、其の二年後である。一八八一年に、巴里の Asylum de Sainte-Anne 實驗室主任エルネスト・シャムバード[一](今日でこそ彼の名を餘り聽かないが、當時は相當知名な醫師であつたらしい)は、「一般夢遊病論、其の類似現象、疾病學的意義、及病源說」(Du Somnambulisme en Général; Analogies, signification nosologique et étiologique) と題する著述を發表して、催眠的現象(ヒプノテイツクフエノメナ)を論じた。此の書

物は、引例も目新しく、研究方法も興味深くて、良く著者の獨創的才幹と鋭い觀察力を示して居る。同書中、特に吾々に關係あるのは、六五頁の一箇所である。曰く『特に女子に認められる現象であるが、常態に於いて、人體の皮膚面には、ブラウン・セカール氏(二)の所謂『癲癇誘發中樞』(epileptogenic centers) にも比すべき帶域が幾つか存在し、此には『發情中樞』(centres érogènes)、或はその樣な意味の名稱を與へて然る可きものである。斯かる中樞の內、外部性器(エキスターナルジエニタルオーガン)を被ふ表皮粘膜部とは別に、膣の粘膜面、大腿の內側、鼠蹊部から股の腸管に至る區域、取り分け乳房部の如き、常時一定不變に反應するものもあれば、又個體々々に依つて變るものもある。例へば、前頸部とか、頸の兩側とか、手足の裡の如きものもある。此等は、ある特殊の感覺(センセーション)、反射(リフレックス)の誘發點で、感覺、反射の內にある者は、器官生活の神經裝置に、又他のものは性的生活の神經裝置に繋りを持つものとの別はあるが、何れも性的機能を驅り立てゝ、必至的(オブリガトリ)・本能的にするのである。或る條件の下に、此等の部位に刺戟を與へる時は、只に色情を誘發せしめるのみならず、性的機能を亢進せしめ、之を規定し、且之に伴ふ所の種々の筋肉運動を誘發せしむるのである。唯、與へる刺戟は輕く且速かでなくてはならない。例へば、鼠蹊部に就いては、強く壓迫する時は何の效果も齎さず、時には却つて痛覺を起させるが、速かに輕く觸るれば、人に依つては際立つて淫情を催起する。此等の中樞の分布は非常に區々で、人によつて違ふのみならず、同一人に就いても、時々によつて變る。と云ふのは、精神狀態(メンタル・テート)が大いに其の感覺や反射の強度を左右するからである。又、餘り刺戟が度重なると遂に感受性を失ふに至る事があり、時には刺戟を反復する事に依つて、曾て存在しなかつた箇所に新に發情中樞が現はれる事がある』云々。

而して彼シャムバール氏は、斯かる中樞が特に感覺過敏で催眠中に掌にフーと息を吹き掛けただけで完全なる機能亢進を起した一ヒステリー少女の例を擧げて居る。

註(一) Ernest Chambard 譯者の手の屆く範圍內にて、此の人に就いて何も知り得なかつたが、御存知の方あれば、御敎示を煩したい。

(二) Charles Edouard Brown-Séquard (1817—1894) フランスの神經生理病理學者、父米人、母佛人、一八六四年 Harward で神經系統の生理學及病理學の講座を擔當、一八七八年 Claude Bernard の死後、彼の後繼者として Collège de France の實驗醫學の敎授となる。頸部交感神經の刺戟の影響に關する觀察に對して大いなる榮譽を受ける價値あり、一八八九年血液腺か

ら血液に與へられた物質は、遠方の臟器に運ばれ、其處で影響を及ぼすとの見解を述べ、又睾丸エキスを自己の皮下に注射し身體、精神能力の向上を觀察したと云ふ。臟器療法の祖。

此の一節は一般神經作用の發情の樣相を明確に論じ、且命名した最初のものであるが、同時に又、其の敍述の正確さ、綿密さは全く驚嘆すべきものがある。唯に此の現象を完全に認識して居るのみならず、明確に之を論じ、且病的神經狀態に於いては、もつと誇張され勝ちであつても、本來は正常的現象だと斷じたのも、是が初めてゞある。故に今日に於いても、此の現象の正確なる記述と云ふ事が出來る。が、此の一節を載せた書物は、左程注意を引かなかつたらしい。若しフェレ（Féré）が、之に目を留めなかつたならば、或は夙に看過し去られたかも知れない。フェレは令名ある開業醫で又研究家でもあるが、當時催眠術の研究に沒頭し、後年性的本能に關して佛文で書かれた最も優れた小冊子を著した人で、シャルコー派と緊密に接觸し、其の唱導せる「ヒステリー誘發帶域」說にも親炙して居た。故に彼はさしものシャムバールが見遁した「發情中樞」とシャルコーの「ヒステリー誘發帶域」との類似（アナロジー）を見落す筈はない。一八八三年の神經學年鑑 Archives de Neurologie（第六卷、一三一頁）中、催眠中のヒステリー患者に就いての實驗を扱つた一論文に、フェレは次の如く記して居る、「ヒステリー患者の身體には、ヒステリー誘發帶域とは或る程度迄同樣に論ずべき特殊な帶域（リージョン）（發情帶域）が、幾つかある。夢遊狀態に誘いてから其箇所に觸れて見れば、其れだけで機能亢進を誘起する程、强烈な感覺を性器部位に起させる事が出來る』と。而して脚註に於いてシャムバールに言及し、且胸骨の上部に觸れられて膣から夥しい粘液を流出した一婦人患者の例を擧げてゐる。そのやゝ後、一八八七年に至り、フェレ、ビネー共著の『動物磁氣論』Magnetisme Animal（一一一頁）中に、再び此の現象を論じ、――わざ〳〵シャムバール氏の「發情帶域」と銘を打つて――ヒステリー患者に現はれる事があると述べ、但し半夢遊狀態でなく、全夢遊狀態に限つて現はれ、又磁氣に依つて傳導されるものらしく、而も異性によつて誘發された時にのみ現はれるものだと附言して居る。

その後又數年を經て、『性的本能論』L'Instinct Sexuel 中で、フェレは殆ど同じ文句で「發情帶域」を再論して居るが、此度は正常狀態に於いても此の現象が起り得る事を認めて居る。故にフェレの記述は、彼が明かに依據して居るシャムバールの所論よりも、正確さ、完全さに於いて劣つてゐるが、此の術語及概念は、何と云つても

シャムバール直接よりも、フェレを通じて始めて世間一般に認められるに至つたことは明かである。シャムバールは、シャルコーよりも寧ろブラウン・セカールを念頭に浮べて居た爲め、「發情中樞」とのみ呼んで、一度も「發情帶域」と呼ばなかつたのに、フェレに至つては、故意か故意でないか分らぬが、シャルコーの「ヒステリー誘發帶域」との類似に釣られて斷りもなく、術語を〔中樞を帶域に〕改刪し、然も自分がやつた改刪を全く知らずにシャムバールに轉嫁して居るのだ。が、吾々後人は何も此の改刪を卸す必要はない、フェレの此の改刪は寧ろ改善なのだ。

英文で書かれた文獻中、最初に「發情帶域」を說いたものは、一八八七年に出たビネー、フェレ共著の譯本 Animal Magnetism であらう。其には erogenic zones と譯されてある。隨つて此の術語が、彼の浩翰なるオックスフォード大辭典に、ビネー、フェレの譯本からの引用文を添へ、『性的欲望を起させる』と解されて挿入されたのも此の儘の形であつた。其れ丈けならよいが、後に尙ほ附け足して、此の字は佛文の érogenique から轉來したとしたのは、あれだけに綿密に編纂された典據的辭典としては驚く可き誤述である。シャムバールが命名した最初から、佛語形では常に érogène となつて居るからだ。其後十年間、英文で此の術語が用ゐられたか否かは詳かでないが、一九〇三年に至り、拙著『性の心理研究』Studies in the Psychology of Sex 第三卷の中で zones érogènesを譯す段になつて、以前に讀んだビネー、フェレの共著にあるのを忘れ、其場で英語形で思ひ當るのが無くつて、私はツイ erogenous zones と譯してしまつたが、今ならば私は寧ろ erogenic zones[一] の形を採る。英國の精神分析者達は、時々 erotogeneous と云ふ形を用ゐて居るが、何れが好いかは、不肖は斷ぜずに措かう。

註(一) 英語形として今一つの形 erotogenic が考へられる。フロイド『精神分析入門二十八講』英譯には、此の形に譯してある。

獨逸で此を最初に問題にしたのは、クラフト・エービング[二]であらう。彼は此の術語をこそ用ゐて居ないが、彼が矢繼ぎ早やに出した『性心理病論』の改訂版の一つの内に、之に觸れて居る。シャムバール、フェレの發表より數年後に出た第十版には、『シャムバール其他の觀察に依れば、ヒステリー患者が病的狀態にある時に、乳房や性器の周圍が感覺過敏になる事があるが、男子では正常狀態に於いては、過敏になり得る帶域は性器の表面のみで、病的狀態に於いては、肛門帶域も過敏になる事がある』と極く不完全に曖昧に述べてゐる。ブロッホ Bloch

は其の數年後、一九〇三年に、其著書『性心理病原論』Beiträge zur Aetiologie des Psychopathia Sexualis 第二章一九二頁に於いて、恐らくシャムバールからでなく、拙著『性心理の研究』から此の問題を取上げて、次の如く一層精確且詳細に亘つて記載して居る、『身體の諸感覺は何れも性的行爲に對して、共感覺的刺戟を傳へ得る故、數多くの發情帶域が現はれる許りでなく、或る特殊な刺戟にして、最初の內は只共感覺的であるに過ぎなかつたものが、徐々に完全な享樂に必須なものになつたり、又時には其れ丈けで事足りるに至る事もある』と。彼は更に『愛は觸覺の一層高尙な形態だ』(Love is a higher form of the sense of touch)となすマンテガッザ Mantegazza の言を引用し、性器以外に、例へば、口、乳房も重要なる發情帶域であると云ひ、尙進んで、感覺は全て皆此の種の共感覺的作用を有し、從つて發情帶域は多岐多樣に亘り、又斯かる共感覺的刺戟は、正常の性愛に於いても性慾倒錯症に於いても、均しく絕大なる意義があると主張して居る。此の見解も實に妥當である。只問題は、吾々が、『發情帶域』を、ブロッホに倣つて極端に廣義に解して凡ゆる感覺に迄推廣む可きか、或は、シャムバール及フェレに倣つて私がした樣に、觸覺、換言すれば、特に身體表面にのみ局限して解すべきかにある。

註(一) Freiherr von Richard Krafft-Ebing (1840—1902) オーストリアの醫學者、催眠術、性慾病理學に從事し、Lehrbuch der gerichtliche Psychopathologie (一八七五年)、Psychopathia Sexualis (一八八六年初版、一九二四年第十七版) の著がある。

一九〇五年、フロイドに至つて初めて之を大いに活用し、彼の有名にして廣く影響を及ぼした小冊子、『性說に關する三論文』を發表し、性愛的機制に對して彼の宿論たる動的心理學說と、立派に符合する所の發情帶域說を取入れた。此の考へを何所から取入れたかを彼は明示して居ないが、彼の論述中に彼が贊意を表して引用する數多くの著作、取りわけブロッホの『性心理病源』の中に、此の考へ方が現はれて居るし、又、ブダペストのリンドナー Lindner が自分の觀察に基いて一八六九年に初めて幼兒の拇指シャブリ、更に推廣めて一般に「おしやぶり」(Ludeln)は一種の性的行動であるとの意を述べた論文にも負ふて居る。(二) が、フロイドも先人の例に洩れず、發情帶域を主として病理的見地から扱つて、發情帶域とヒステリー誘發帶域とは元來同じ物であると唱へたので爾後精神分析者は、發情帶域は謂はゞ抵抗減退せる箇所であるから、ヒステリー症の場合では、當然ヒステリー誘發帶域に成り變ると主張するに至つたのである。が、

フロイドは又、發情帶域は性的發達の正常なる過程であるとも明言して居る。卽ち『オシャブリ』や拇指しやぶりと類似の色々の仕草を典型的と見做し、發情帶域とは或る種の刺戟に逢へば、ある特殊の快感を覺える所の皮膚、又は粘膜の部位を云ふと述べてゐる。又、身體のある部位は先天的に發情帶域であるが、其他の部位も發情帶域たり得るとして(一) フロイドもブロッホに倣ひ、凡ゆる感覺器官、特に眼、或は更に推廣めては、身體の如何なる部位をも、發情帶域たり得ると見做す氣持で居る。勿論、彼とても、皮膚が最も著しい發情帶域であると主張する事を忘れて居ない。

註(一) Ludeln は獨和の辭書に載つて居らず、Sander にも見當らない。幸ひフロイド『精神分析入門二十八講』英譯、二六三頁に "lutschen" or "ludeln" German words signifying the enjoyment of sucking for its own sake—as with a rubber "comforter", etc. と解說してある。

(二)原註 周知の如く此のリンドナー及フロイドの見解は、かなり方々で論駁されて居る。例へば、彼の賢明にして分別ある研究者Löwenfeldの如きは、舊派なだけに幼兒の表情を觀察して直ちに吸乳が性的滿足であると斷ずるに反對し、此は寧ろ大人の場合と同樣に單なる愉悅の表情とした方がより適切なる說明らしいと主張して居る (Sexualleben und Nervenleiden 一九一四年、第五版、九頁參照)。指しやぶりも時には性的意義を持つ事もあらうが、大抵の場合ではさう見做す可きでなく (Löwenfeld は此點では Moll や Bleuler と意見を同じうして居る)、個人々々の體質に依つて色々の意味にも解され得る表情があるとして居る。此の論爭も、若し精神分析者達が斯かる仕草に、後來特に性的快感と見られる點に觸れず、只快感が經驗されるんだと認めるに肯んずれば、左程重要でなくなるのだ。

發情帶域から得られる快感は、幼兒期に於いては、一種の誘導手段でもあらうが、本來は其自身が目的なのだ。フロイド說に依れば、リビドー〔發展〕の最初の段階、卽ち自己色情段階は、別に目的があるのでなく、謂はゞ、其の目標は發情帶域の支配下にあるが(此の見方に依れば、シャムバールが用ひた「中樞」(Centre)の方が寧ろよく當て嵌まる)、思春期後になれば、もつとほんとうの性的目的が現はれて來、發情帶域の機能は、『幼兒期に於いては、快樂の全てであつた快感が、今度は豫備快感として、より以上の滿足を獲得する爲の手段に使用される』の方式を取るに至る。故に前後を綜合すれば、催淫帶域の意義は、性器の補助裝置になつたり、時には之

に取つて代つたりする點にあるのだ。隨つて、精神神經症、殊にヒステリー症の場合には、不相應に出しやばつて、却つて性器部位を出し拔いて、其の埋め合はせに極度に敏感に成り得る譯である。フロイドは又、操作する所の刺戟の性質にも大いに左右されるもので、例へば、律動的である場合、又溫感を伴ふ場合、效果が殊に著しい事を指摘して居る。[一] つまり、彼は此の發情帶域を自己流に解して、更に進んで之を洞察探究したのである。故に發情帶域說は彼が發議したのではなく、只之を見付け出し、自家藥籠中に巧みに取入れて、遂に彼自身の學說に吾人が如何程の價値を認めようとも、其れから離れても此の發情帶域說が存立し得る樣に盛り立てたに過ぎないのであるが、發情帶域の考へ方及名稱を一般世人に流通させ、受け容れさせたのには、大いに彼の功績が與つて居るのである。

(原註) Löwenfeld は (Ueber die Sexuelle Konstitution 四二頁) 尙、濕り氣(ウエットネス)をも之に加へて、濕り氣があると皮膚面(スキン)を發情帶域たらしめるに、一層好都合で、殊に神經症患者に於いて著しいとなし、熱い風呂は性的感覺を刺戟すると述べて居る。

今日では發情帶域の存在は既に一般の認める所となつたが、其の範圍及意義に就いては尙、若干意見の相違が存する樣である。されば精神分析學を離れて、性心理學の分野に於ける二大權威者の見解を顧る事は價値ある事と思ふ。モルは發情帶域を、『身體表面にしてそこに刺戟を與ふれば直接乃至間接に色情を喚び起す帶域』と記述し、更に之は幼兒期に於いて屢々見られ、特に肛門部及臀部に現はれ、他所には餘り現はれないが、成人ではもつと數多く、且個人々々に依つて多種多樣であると記して居る。彼は幼兒期に就いて口唇部に言及しなかつたのは、或は特にさうしたのかも知れない。[二] ヒルシフェルドは、[二] もつと系統立てゝ此の問題を扱ひ、『人間に於いて特にその性感に近接してゐる諸感覺は、取り立てゝ口唇帶域とか性器帶域とかにあるのではなく、表皮一般に瀰漫して居るものであると云ひ、また皮膚の內でも手や頰を互に接觸させることは元來性感的なものであつたのだが、後に習慣的挨拶、又は同感の表現に成り下つたものがあるとも言つて居る。彼は又、『性感的特質を附與するのは、部位に依るよりも、受ける感覺の種類に依るのである。勿論ある特定の部位が特に此の種類の感覺を起すに都合がよいと云ふ事はあらうが』とも主張し、發情帶域たる可く特に適した箇所として次の八つを擧げてゐる。毛が生えて居て嗅覺にも訴へるもの四ヶ所(頭、顎、腋下、恥部)、及び、粘膜面四ヶ所(口、乳房、性

器部、肛門部）是である。就中、乳房が最も顯著で、『男は心で愛し、女は乳房の尖きで愛する』と述懐した『ローランの史詩』(三)の作者は天晴れな性愛鑑識家だと附言して居る。尚、ヒルシフェルドは第二次的發情帶域として手の掌、足の裏、手指・足指の先端、膝頭、肱、及び薦骨一帶を擧げて居るが、(四)其れならば更に耳朶をも擧げる可きであつたらう。

註(一)原註 Albert Moll 著『兒童の性的生活』英譯本Sexual Life of the Child 九一頁參照。

(二) Magnus Hirschfeld 先年日本にも來朝した事がある、獨逸の、否世界最大の性學者、伯林に Institut für Sexualwissenschaft を開き、Zeitschrift fur Sexualwissenschaft を刊行して居る。近時ヒツトラーの彈壓により追放の憂目を見たと云ふ。

(三) Chanson de Roland イギリスの Arthur 大王譚、西班牙の Cid 英雄譚、ゲルマンの Niebelungenlied に並ぶ可き、中世フランスの英雄傳、ローランはシャーレマン大帝に仕へ、帝がキリスト教の選士としてサラセン人を討つ可く西牙班に攻め入つた時、猛將オーヂャ Ogier（本誌第二卷第三號五三頁參照）等を猫兎の如くあしらつた巨人フェラスを平げ、帝の凱旋に當り、彼は手兵を率ゐ殿りの役を務めたが、ピレネ山峽でサラセンの夥しい伏馬に襲はれ、Ganelon に裏切られたが、名馬 Veilantiff に跨り寶劍 Durindana (Durendal) を揮ひ奮戰し、衆寡敵せずも尚急を告ぐる角笛 Olifant を吹くのを拒んだ。最後角笛は響き、三十哩外にあつた帝が驅け付けた時は、ローランは、Turpin と枕を併べて討死して居たが、尚降らなかつた。Chanson は十一世紀後半のノルマン人の手になつたと云ふ。

(四)原註 M. Hisschfeld 著『性病理學』Sexualpathogie 第三卷、二八、二九頁參照。

フロイドに至つては、ヒステリー誘發帶域が何所此所のけじめなく現はれ得る樣に、發情帶域も身體の何の部位にも現はれ得ると認めようとして居る。が、一般世間は尚も此の術語を、其の命名當初から發情的とされ、フロイド自身も發情帶域の主なる座（シート）を認めて居る所の身體の表皮膚面、及粘膜面に限つて、用ゐようとして居る。私も、斯く制限した方が好ましく、且便利であると思ふ。理論的には成程他の感覺器官も例へば、元來皮膚面であつたのが變形し發展して形成された眼の如きものも、色慾的な性的感動を傳達するからには、發情帶域であると云へるに違ひないが、比較的原始的感覺器官のある特殊な場合に充てる爲に案出した術語を、より高等な感覺器官にも適用せしめるは好ましからず又不便でもあらう。

（三三頁下段に續く）

ドストイェフスキーの作品分析（ノイフェルト）

平塚義角譯

一、幼兒性感の描寫

それ故に、詩人のエディポス・コムプレクスが餘りに強烈であつたので、このコムプレクスは、彼の各ゝの生活相に於けると同様に、彼の各ゝの作品の中にも現はれてゐるに違ひないと、我々は上述の理由で、期待せずにはゐられない。實際また現れてゐるのである。それで、我々は詩人の波瀾多い生活を我々の立場から眺めて來たので、我々の期待が彼の文學作品の分析に於いても、滿足されるかどうかを見よう。

ドストイェフスキーが大衆に目見えした時、彼は既に出來上つた詩人であつた。で、彼の青年期の作品に就いては、たゞそのタイトルしか我々は知らない。故に我々は、ほゞ二十歳の時の作であるこの小說を、この立場からより詳細に眺めよう。デェヴーシンは主人公の相手方とはなつてゐるが、總ての樣子から見ると完全に主人公であつて、彼は近親姦的願望に囚はれてゐる男である。彼は凡てのエディポス・コムプレクスの定着ある者と同様に、戀愛はしても肉的慾望を持ち得ない。そのためにこの小說は沒性慾的に見えてゐる。主人公の愛する乙女は、主人公の母の面影である。彼女は自由な身の上ではない。卽ち一つの過去を持つてゐて、その過去の影の中に彼女は生活し、その過去に再びこの小說の結末に於いて彼女は歸るのである。この小說は本來は、救助空想を表はしたものだ。卽ち英雄的な犧牲を、愛人に對するヂェヴーシンの犧牲の喜びを表はしてゐるのだ。フロイドによれば、その性感が典型となつてその人の全人格が決定されると云ふが、この小說の主調が諦めであると言ふ事の由つて來る所以もそこにある。それは詩人に於いて常に繰返された態度でもある。にも拘らずこのロマンス

は明かに、幼兒性をその儘に保存してゐる人の近親姦空想である。それは恰も詩人が己れの無意識を法廷に引据えてゐるかの樣である。自らを道德の法に屈服せしむる爲めに、罪の判決を下してゐるかの樣である。

イプセンは、詩人の生活は己れのコムプレクスに對する鬪爭であり、彼の文學は己れの無意識的傾向の爲めの法廷である事を意識的に理解してゐたが、それはイプセンばかりではなく、ドストイェフスキーも知つてゐた。徹底的な轉位と變更とのために、それが詩人のコムプレクスを取扱つたものだとは表面的には認められない作品に就いても、彼はその事を感じてゐた。それ故、詩人はゴルヤトキンを完結して、ナスターシャ・ネスワノーフナを書き始めた時、弟に宛てゝから書いてゐる。『この作品も、一つの懺悔となり、自己判決となるだらう。たとひ形式は前のとは違つてゐるにもせよ……。』と。

初期の短篇小說、小主人公、ナスターシャ・ネスカノーフナ、祭日、結婚等は、成人のエロティッシュな感情と同じ樣に、子供のエロティークをも取扱つてゐる。無邪氣な筈の幼年期に性感があると云ふばかりか、而も「倒錯的」な性感さへもがあると主張するフロイドの發見を醫者や教育者達は今尙ほ憤つてゐるのに、ドストイェフスキーはナスターシャ・ネスカノーフナと云ふ娘が父に對して感傷愛を抱いてゐることを、如何にも力强く活々と描いてゐる。のみならず、そこから從つて生ずる相反並存（アムビヴァレンツ）感情や同性親に對する死の願望をも、詩人の心理的烱眼は見落しはしなかつた。父に對する彼女の愛に就いて、詩人は、乙女をして次の樣に語らせてゐる。『あの時に、私の中にお父さんへの無限の愛が目醒めました。然しそれは一つの不思議な、云はゞ全然子供らしくない愛でした。私にはお父さんが可愛さうで〳〵たまらなかつたので、全く思慮も何も失ふばかりに愛し慰さめずにはゐられなかつた位でした。父に情深くしずにはゐられなかつた位でした。……私はもう、幼年期の眠りから漸く眼醒め始めたことに就いて、意識的な生活に於ける最初の意識的な發情（父への愛の目醒めを意味してゐるのだ）（原著）に就いて、お話しいたしましたね。私の心臟はこの瞬間以來傷つき、私の發展は始まりました。そして、信ぜられぬ程の早さで、急速な、然かもそのために疲れる程の迅速さで、私の心臟は完成しました。』父が怒りの餘り我れを忘れて、あんな女（妻）くたばつて了へば、さうしたら初めて俺は蘇生するのだと言つた時以來、この少女の心には、父の新生活は彼女にも、有意義なものとなるだらうとの希望が根を張つて來た。『しかしそれから、私が絕えずその事を反省して、次第にお父さんの

この怖ろしい希望に馴れて來た時、やがて例の空想が力添へしてくれました。少くとも私は不確實さの苦惱を長くは辛抱しませんでした。そして恐らく自然に、何か或る事を想像するやうに、ならないわけに參りませんでした。そしてその時、如何してそんな考へが浮び始まつたのかは自分にも分りませんが、然し最後に私は、お母さんが死んだらお父さんはこの退屈な住居を棄てゝ私と何處かへ引移るだらうと實際に信じるやうになりました。』それから彼女は、お隣りの立派な、綺麗な、もう久しく感心してゐた家で、父と共に暮すことの空想的希望を、細かに語つてゐる。近親姦的定着を持つてゐる子供が異性的に如何に冷酷であるかと云ふことに就いても、餘人はこの少女をしてかく語らせてゐる。『お母さんが嚴格であつたと云ふだけで、私が母さんをその樣に惡く思ふやうになつたのではないと思ふ。ところで、それが何故であつたか、私は知つてゐます。それは私がお父さんを空想上の愛人にしてゐた事でした。そしてその愛人を母が獨占してゐたために私には不快になつたのです。……後年になつて私は氣付くやうになつたですが、多くの子供達は大低怖ろしく無感情で、そのくせ誰かが好きだとなると、その一人でなくてはならぬやうに愛し、そしてそれは勿論第三者の迷惑になるときまつてゐるのです。その樣にして私は私達の屋根裏部屋で成長しました。そして私の愛情は次第に高まつて行きました。否、愛情と云ふよりは情熱と言つた方が正しいでせう。何故なら、私がお父さんに對して感じた樣な制し難い、自分ながら苦しい感情は、他のどんな言葉でも云ひ現はせませんから――。さう云ふ情熱が病的な感傷性にまで高まりました。私はお父さんの事を考へ、お父さんに就いて夢想すると云ふ快樂しか他に何の快樂も知りませんでした。私はたゞお父さんを喜ばせたい、或ひはもつと小さな事であらうと何か滿足させてあげる爲めには、全力を盡したいとの慾望と意志だけしか他の慾望や意志は持ちませんでした。私はせめて二三分だけでも他の人より早くお父さんの來る足音を聞き、その顏を見ようとて、如何に屡ゝ吹きさらしの階段の上で、寒さのために震へ乍ら眞蒼な顏をしてお父さんの歸りを待つた事でせう。彼が時折私に優しくしてくれ愛撫してくれでもすると、私は飛立つばかりに喜びました。でも、哀れなお母さんに對して私が强情に冷たく振舞つた事は、時々我ながら肉體的な苦痛を覺える程に惱ましい事でした。實際、この不思議な愛着は何か一つの小説にある話のやうでした。』

　我々が此處にこの少女の心臟の吐息を（簡約に）再錄したのは、單に、詩人がこの子供のエディポス・コムプ

レクスを、その最も微細な動きまで知り悉してゐた事を示さうしたにばかりあるのではなく、ドストイェフスキー自身がこのエディポス・コムプレクスを持つてゐたからである。少女はか様に、酒で零落する父を愛してゐる。故にそれは本來、詩人のエディポス・コムプレクスが出てゐるのだ。後に檢討する樣に、「青年」もこの同じ問題を扱つてゐる。たゞこゝでは、直接には男兒の相反並存感情が主調をなしてゐるだけの相異だ。

詩人の初期の作にかゝる他の小說の中にも、子供の性感や、子供を性的の玩具として持遊ぶことの亂暴さや（小英雄）、幼時の印象の如何に根强いかと云ふことや、幼年時の變態本能などに關する判決とも云ふべきものがある。（ナスターシヤ・ネスワノーフナ、小英雄、祭日、結婚式）

二、初期作品中のエディポス

「二重人格者」はほゞ同じ頃に彼がその空想を描いたもので、これも一つの自己判決である。この事は詩人も、弟に宛てたその書翰中で認めてゐる。ゴルヤドキンと云ふ人物は、詩人のあの最も悲しかつた時、卽ち、父の死後、そしてペトラシェフスキー事件の前、第一の大成功につゞいて第二の成功の現はれない時期に、彼が思ひついたものである。この自己判決に依つてゴルヤドキンの性格は、二つの對立した部分に分たれてゐる。一方には自己戀愛的（ナルチスティッシュ）な理想我は、力倆もあり、自覺もした、性格の豊かなゴルヤドキン二世となつて、他の自我（卽ち小さな、壓迫されて、生活の暗黑面を彷徨し、喜びもなく功もたてぬ小役人が如何にもまざ〳〵と、ゴルヤドキンとは敵對的に對立したものとして感ぜられる、さう云ふ別の自我）から分離せられてゐる。他方では、ゴルヤドキン二世は小役人（卽ち詩人自身）の願望空想を具體化したもので、彼は小役人が單に願望したゞけで、決して實現し得ない事を成しとげ、不幸な役人には許されてゐない運命の凡てが、彼には可能である。フロイドの自己戀愛（ナルチスムス）に關する多くの研究や、ランクの「二重人格のモティーフ」には、ドストイェフスキーの空想が完全に符合してゐる。詩人はこの小品傑作を非常に誇つてゐるが、これの成立には、神經症者の劣等感と罪の自意識とが與つて力あるものだらう。この作に關して詩人の屢々述べてゐる病的な誇りは、恐らくは作品の中に現はれてゐる劣等感への補償として理解すべきであらう。人を卑屈ならしめる貧困、不成功、交友の圓滑、それ等がこの作の現はす氣分の或る部分を成して、前意識的材料を構成したものであらう。然し本來の衝動力は確かに無意識意識

から、卽ちエディポス・コムプレクスから發してゐる。本來この相手方は、その不幸な、嘲笑された、叶へられぬ戀のために破滅するのである。卽ち、戀人の誕生日に招待されなかつた時、彼の狂氣は顯現した。子供時分の不幸な初戀が嘲笑され、叶へられずに終ることになり、それがこの神經症者の惡評ある劣等感を誘致したのであるが、我々の詩人がその主人公達を叶はぬ戀で破滅させることにしたのは、實にその事を無意識に考へてゐたからである。

三、彼のニヒリスムスの分析

初期のこれ等の作品は凡て、エディポス・コムプレクスを素材としてゐる。が、言はゞ單に序曲に過ぎない。精神分析が父殺しと稱してゐるエディポス的原始行爲はカトルガで償はれ、ペトラシェフスキー事件後は、この叛逆者は謙讓者となつた。然し追及の手をゆるめぬ善魂は詩人の背につき纏つて、彼に休息を與へず、彼はなほも自己の罪を贖ふ事を止めない。彼の作中人物等はニヒリスムスの改宗者となり、彼は、反ニヒリズムスの詩人となつた。卽ち父に對する叛逆と、それに對する刑罪と贖罪とは爾來彼の文學の、否、彼の文學的作品一般の、言はゞ唯一のテーマとなつた。ローヂォン・ラスコルニコーフ（一八六六年）を以て、彼のこの第二の創作期は始まつて、彼の死ぬまでつゞいた。この第二期の個々の作品がどれ程強くあつたにしても、そのいづれも彼をエディポス・コムプレクスから解放してゐない事は、ゴットフリード・ケラーの場合と同樣である。以後、彼の生活と詩作の一瞬間と雖も、彼は父殺しとの抗爭から解放されてゐない。何故なら、エディポス的原始行爲へのこの衝動は未だ十分には解消されてゐなかつたからである。メレジュコウスキーや他の批評家達は、あの殘酷なお芝居めいた死の判決（續いて恩赦は齎らされたが）のために詩人の魂の中に、再び消えやらぬあの龜裂が生じ、從つて彼の詩作の特徴であるあの謎の如き特性が生じたのだと云ふ風に考へようとする。詩人自ら屢々この死の判決を感銘深い事件として述べてゐるが、實際その通りであつた。然し乍ら、このやうな意識的記憶にはあれほどの魅惑的な特性はなく、それはたゞ無意識にだけ屬してゐるのだ。故にドストイェフスキーの作品の特性は、彼のエディポス・コムプレクスを考慮するだけで、完全に說明し盡される。アイメー・ドストイェフスキーは、その父が、ラスコルニコーフに於いて二十歲の若人を（殊に學生を）示さうとし、勇敢な、多才な、のみならず自我のない若人が、高慢であり自惚強く、且つ基督敎的情

操を缺如してゐる時、その目的に向つて如何に猪突するかを描かうとしたのであると言つてゐる。然し俗惡な教育家的意圖などは、强い感動を與へるこの小說と全然緣遠いものである。それは詩人の無意識の中に暴れ狂つてゐるエディポス・コムプレクスに對する人間の偉大なる鬪爭であつて、詩人は實にこれを表現してゐるのである。ラスコルニコーフに殺される年老いた女高利貸は、父の面影である。彼女の强慾には、恰度嘗て父に對して詩人の激昂したと同樣に、若い學生は激昂するのだが、たしかにこの强慾だけが、彼女の高利貸としての特徵となつてゐるに過ぎない。詩人が何故に父の面影に女性を選んだかは、次の事によつて說明される。卽ち、詩人が子供の頃に特別に愛した姉のバルバラが、後年病的な强慾者になつた事である。この不幸な女性は、立派な結婚をして夫から二三の貸家を受繼ぎ、然かも子供達は立派に身を固めさせたに拘らず、その生活はまるで最も慘めな女乞食の樣であつたと言ふ。週に一度しかパンやミルクを買はず、財布を開けねばならぬ時は泣いたり歎いたりして、使用人も使はずに暮し、遂に、近所に住んでゐる若者のために、一農夫と共謀して殺された。家族の仲間內では、姉がこのやうな悲劇的な最後を遂げることは豫想されてゐたらしい。だからこそ、詩人は男の高利貸の替りに、女性を描く事になつたのである。

註 カプラン Kapplan によると「老女を襲擊する」事は無意識の性的副意識を持つてゐるさうである。それは近親姦を意味してゐる。「悲劇的な英雄と犯罪者」參照。

詩人とラスコルニコーフとの一致は明白な事實である。同じ罪に對して此處でも同じ贖罪がなされてゐる。シベリヤへの追放は嘗て作者自身を醇化したと同樣に、主人公ラスコルニコーフを醇化するであらう。ソーニャは母の面影である。旣に述べた樣に、無意識的に母を醜業婦化する事は、母に定着してゐる神經症者の特徵である。もう一度詩人は自分自身のために法廷を開く、そして言ふ。謙虛であれ！ お前は一匹の虱なのだ、總てを斷念せよ！ と。

「虐げられし人々」で彼は再びエディポス・コムプレクスと戰つてゐる。この小說のナスターシャの性格には、最初の妻マリヤ・ディミトリエフナがそのモデルになつてゐるのださうであり、彼の遂げられぬ戀が、この小說の主題を提出したのだと言ふ。然しマリヤ・ディミトリエフナは旣に母の面影だと分つてゐる。それ故に、彼の斷念はするが戀慕を止めず、しかも彼に屬さぬこの婦人は再び母その人に過ぎない。「虐げられし人々」はドストイェフスキーの最も薄弱な小說である。彼は後に

自ら言つてゐる。彼は肉も血もない、紙製の、書物から抜け出した人間を描いたのだと。この自己批判は正しい。が、その價値に關して責を負ふものは、これまたエディポス・コムプレクス以外の何物でもない。老公爵ファルコフスキーが父の影であり、息子の近親姦的慾望を妨げるかの惡父である事は明白だ。然し息子の愛慾を抑壓するこの父は、幼兒的な愛憎並存的な心理態度から、醜怪に描かれてゐる。殆んどオペレットにでも出て來さうなこの病的な性格は、無意識から生じてゐる。こゝに表はれてゐるものは、明かに幼兒の聲である。しかもその聲にとつては、憎い戀敵の誹謗するためならば、どれほどの調子を出しても絶叫的であり過ぎたり不調和であつたりはしないのだ。

エディポス・コムプレクスの抑壓が最も首尾よく行つてゐるのは、『白痴』に於いてである。公爵の書いた美しい手蹟、彼の手蹟鑑定の知識、彼の「聖病」、死刑に就いての彼の考へ、それ等凡ての特徴に依つて見ると、公爵が詩人の理想的な自畫像であることは明かである。が、勿論、公爵の身邊の者等の奔肆な本能や、卑しい情操や不消化の思想などは、これまた詩人自身の性格の片割れである。詩人自身の性格が不調和であつたに對して、白痴の性格は調和ある、分裂せざる（愛憎並存的《アンビヴァレント》でない）ものであるから、これは一種の願望空想でなければならない。單純であること、神なる父の選ばれたる子（神はその單純と無邪氣との故に子供を最も愛する）となること、情熱や慾望をなくすること、エディポス・コムプレクスも持たないやうになること、――この無意識の願望が、この獨自な小說のモティーフをなしてゐるのだ。能働的に母を求めずに、詩人は此處では誘惑の場面（誘惑《ポティファール》空想《ファンタジー》）を空想してゐる。情熱的なナスターシャ・フィッリポフナとアグラーヤは再び母の面影である。無意識の近親姦的感情の抑壓は、こゝで最も完全に行はれてゐて主人公は一見沒性慾的に見える。斷念の命令がこゝでは最も鋭い語氣を以て下されてゐる。斷念せよとの一言はこゝでは單に近親姦の諦めばかりでなく、性愛一般のそれをも意味してゐる。近親愛は、人間愛、隣人愛として完全に昇華されてゐる。詩人のキリストへの同一化は、此處では全く判然してゐる。昇華はこの作で、最も完全に成功してゐる。

次の小說「惡魔」に於いて、この鬪ひは益ゝ激しく荒れ狂つてゐる。詩人はニヒリズムス（卽ち父への叛逆を）批難して書くためには、如何なる色彩もあまりにあくどく、如何なる調子もあまりに絶叫的であると思つてゐない。人も知る如く、父コムプレクスにひどく惱まされて

ゐたドイツ詩人シルレルは、常に自由の英雄（例へば、群盗やキルヘルム・テルの如き）を描いたのに、ドストイェフスキーはこのコムプレクスの激しき抑壓の結果、單に英雄のカリカトゥールだけを、ニヒリズムスの滓だけを知つてゐたに過ぎず、ロシヤ自由思想の高貴な殉教者、例へばクラポトキン公の高貴な風姿の如きは、彼には大體存在してゐない。「この書には激しい憎惡が注ぎ込んであるので、激しい憎惡を喚起された」と或る文學史家は言つてゐるが、然し當つてゐない。自分自身に對する憎惡、エディポス的犯行に對する憎惡こそは、この書の根幹である。意識的な人格、詩人の言はゞ政治的信條を代表してゐるのは、シャトーフなる人物である。然し詩人が無神論に對し、ニヒリストの性的不道徳に對し即ち自分自身に對して法廷を開いてゐるあの一面は、政治的ニヒリズムスに對する罵詈よりも心理的には更に深い層に根ざしてゐるのだ。スタフローギンは完全に信仰なく、變質者的な、倒錯者的な、神の否定者の代表で、死と犯罪を周圍に蒔き散らし、惡意のために惡をなす。何故なら、彼は根を持たないから。「故郷との結合」なしには、地上に何等の救ひもないのに、彼は郷土から引離されて了つてゐるから。然し、大地に對する愛、母なるロシヤに對する愛が、無意識の近親姦空想から生じてゐる事は、既に強調した。それ故、スタフローギンの性格を創作してゐた間に、詩人の心の中に近親姦願望が動いてゐたのだ。キリローフと云ふ人物は、父に對する叛逆の人格化である。彼は不信仰の狂人で、詩人自身と同樣に、癲癇症者であり、思辨家であつた。人間は、地上の生活や死の恐怖に耐へ得んがために神を發見したのだと、詩人は彼に言はせてゐる。この欺瞞をあばく者、無に對しても怖るゝ事なく、自殺を敢行するものは神自身であると。此處に於いて、父への否定は最も極端な形に達した。詩人は天國的なものへの幼兒的憧憬、卽ち地上の父への幼兒的憧憬から解放されん事を欲する。愛や、憧憬や、恐怖から解放されて、盲目的信仰の子供らしい天國を何等怖るゝ事なく放棄して、現實のスヒィンクスの眼をしつかりと見入りたかつたのだらう。キリローフは死によつて救はれる、が詩人は叛逆を以て、再び法廷へと這入つて行く。そして再び信仰へ、父なる神に對する子供らしい心持へ歸つて行くのである。然しそれは彼が戰ひ取つたせめてもの勝利であり、尙幾同か決戰されねばならぬものである。何故なら、彼の萬歳は瀆神によつて發せられるのだから。

四、エディポスへの還元

エディポス・コムプレクスへの鬪爭は、ラスコルニコーフから惡魔に至るまでの上述の小說の中で、言はゞニヒリズムスとの鬪爭に轉嫁されて反映したが、本來のコムプレクスは「青年」の中で、再び活潑になつてゐる。マカレヴィツ、アルカーディは或る奴隷女と、彼女を掠奪した地主との間に生れた息子で（ランクの所謂家族ロマンスの好一例だ）私立學校の澤山の大盡子に混つて、唯一の貧棒學生として敎育された。彼の父は僅かの敎育費を支出したが、子供の事は殆んどかまはなかつた。子供の空想が、一度見た父の素晴らしい姿によつて、如何に捕へられたか、父に對する愛憎並存的（アンビヴァレント）態度が子供の全心を如何に捕へ、そこに充滿してゐたか、これがこの小說の本來の素材である。この小說の缺點として當然擧げられるものは多からうが、また詩人の敍述に飛躍の感ぜられる所があちこちにあつて、この作が詩人の僅少の薄弱な作品の一つに數へられようとも、子供の愛憎並存的態度が、かく輝かしく描かれたことは嘗てない。「寢ても醒めても私は父に膠着してゐた。私の夢はどれも彼に結びつき、普通は專ら彼に關してゐたが、さもなくば結果に於いて父との事に終つた。私は彼を愛してゐるのか憎んでゐるのか、自分でも分らない。」と詩人はこの青年に言はせてゐる。息子のこの愛憎並存的態度の意識的根據は、傷けられた虛榮心である。父に棄てられ、低い境遇の下に育てられると云ふ神經症者に普通の『家族ロマンス』である。然しエディポス・コムプレクスも、轉位はされてゐるにもせよ、露はに出てゐる。一方では主人公は、母をフェルシローフ公との愛に燃え立たせ、その夫を棄てさせることに依り、彼女を娼婦にし、他方ではこの青年は、父の愛した女性を愛し、たえざる不信と嫉妬とがやがて彼の心の中に燃えて來るのである。主人公と作者との一致を示すものは、この作では、單に自敍傳上の無數の特徵ばかりではない。青年の諸々の行爲に驅りたてるモティーフである所の、無限の富を得たいとの考へも、詩人が青年期中父に對する憎惡のために隨分屢々懷いたらしい慾望に外ならないと云ふことも、この一致を示してゐる。

このやうにエディポス・コムプレスが、言はゞ直接的に生活に出て了つたゝめに、どうやら詩人に洗ひ流し療法的（カタルティッシュ）の效果が生じたかのやうで、後年は詩作が涸渇してゐる。この詩作の源泉は、實はエディポス・コムプレクスに根ざす罪惡意識だからである。一八七三年から一八八〇年に至る年代は、全然新聞記者的活動に向けられたが、然しこの活動がまた非常に主觀的なもので、その根源をなしてゐるものはやはりこのコムプレクスであるこ

とが認められる。政治、時事、犯罪事件は注釋され、青年時の回想が浮び上る。然し「エディポス」の永久のメロディーは、かゝる緣遠いこの分野の上でも相變らず我々に聽き取られる。母なる大地ロシヤへの愛、神＝皇帝＝父の法律に對する畏敬、母なる正統派敎會への歸依、これ等メロディーが凡ゆる變曲となつて響いてゐる。その上、神の選んだ民族とはロシヤ民族のことゝなつてをり、さうして自分こそは救世主であると云ふことになつてゐるのだ。

この抒情的發露、この記者的浪漫主義が如何程主觀的であつたらうとも、それでは無意識の遂行は永久に滿足されなかつた。で、もう一度、罪惡意識は嘗て無かつた程の力と高聲を以て活動する。詩人は彼の白鳥の歌を、即ち不滅の歌の最後の變曲を唱ふのである。然しそれはかの三冊の部厚な小說となつても僅かにその根本主題をしか響かせたに過ぎず、また最後まで唱ひ盡されなかつた。一八八一年一月十九日、詩人の不安な生活は、咯血によつてその終焉を告げたからである。此の小說に於いては全く聲高に、殆んど意識的に、良心の葛藤が現はれてゐる。然しエディポス・コムプレクスとの鬪爭はたゞ詩人自身にとつてだけ終つてゐるのであつて、彼の小說中の人物等はこの永久の鬪ひを戰ひ續けてゐる。萬歲の歌聲は詩人に與へられず、彼が歌を唱ひ始めた時、絃は切れた。そして三人の父殺しのより大なる運命が、スフィンクスの如く永久の謎を以て、我々をみつめるのである。ミーチヤは自ら十字架を負ふであらうか？又、イヴァンの快樂說や懷疑說や物質說が破れても、彼はスラヴ贔屓となり正統派信者となるだらうか？そして彼の力強い性質は死を克服するだらうか？またアリョーシャは生命の淨罪火で淸められて立ち上るだらうか？かく父殺しの物語は終了せずに大きな疑問符を讀者に殘してゐる。恰も詩人は自身に、人は母を拒絕し得るか？人は父に向けた死の願望を放棄し得るか？と問を發してゐるかの樣だ。この小說が力強い未完成品（トルソ）で終つた最後の原因は、詩人の死にあると言ふは當らない。寧ろ、己のコムプレクスが不滅のものであるために何とか調和的な結びを與へることを許さなかつたゝめである。（此項完）

×　×　×

夫婦生活と「坤卦」

長谷川誠也

所謂モダンの夫婦生活觀といふものは、既往のものに較べて見ると、甚しく異なつてゐるやうだ。この相違を明かにするために、實例と文學上の作品とから幾多の材料を蒐集するならば、餘程おもしろい物が編纂されやう。また、それは心理學の大切な資料となり、あるひは家庭生活改善案の有益な參考ともなるだらう。しかし、今は物に成るほどの材料も持合はさず、またこれを多方面に互つて採集して、役立つほどの物を作り上げようと言ふほどの勇氣もないから、たゞ一つだけを、文學の方面から拾ひ出して紹介することにする。

ゴールズワージの作『花咲く曠野(フラワリング・ウイルダネス)』の中に、かう言ふ場面がある。或家庭で、近親少數だけの晩餐會を開いたところ、話は身内の者の噂となり、某女が、十七歳も年上の紳士と結婚したのは、どう言ふ氣であつたか分からないが、男の方も、女の方も、共に薄氷を踏むやうなことが好きだから、多分冒險のつもりで結婚したのだらう、と言ふ推測が立てられた。結婚は冒險であるといふ考へ方は、必ずしもモダンの創見ではない。そんな考方は大昔から有つた。結婚は人生の一大事といふ言ひ傳へには冒險といふ意味が含まれてゐるのではないか。ギリシヤの諺には、結婚は天國でもあり、地獄でもあるといふ意味のものがあり、スペインの諺には、結婚の日には殺されるか助かるか、どつちかである、と言ふのがある。して見れば、結婚と冒險とを一緒にして考へるのは、東西ともに、餘程古からのことであらう。

しかし、薄氷を踏むのがおもしろくて結婚する者もある、と言ふ見方は、モダン頭腦か、モダン雰圍氣を分析してゐる者の間からでなくては發見しないだらう。同じく冒險と言つても、モダン的でない人は、これに伴なふ恐怖、不安だけを感じ、さらに危難の發生を豫防するた

めに、嚴肅な道德的意義を、結婚に添附するのだ。さうでもなければ、恐らく結婚忌避者が多くなつて、世の中が寂しくなるだらう。ところで、モダンの頭となると、さやうな道德的意義のにほひは七里結界、たゞ冒險の興味を感得しようといふのだ。一體に、モダンの感性は、不安の美味とでも言ふべきものを追求するのである。

話はこの小說の同場面へ戻る。噂は他の若夫婦のことに及ぶ。この若夫婦は結婚後、直ちにナイル上流の地方に赴き、一年半を過ごした今日、歸國の途上に在るのだ。食卓を圍む一夫人は言ふ、一日も早く若夫婦に會ひたいものだ、スーダンで一年半も樂しく暮らした後には、どつちが「勝ち犬」(top-dog)になるだらうと。ヴィクトリア女王朝の敎育を受けた人が、この語、しかも未だ中年にも達してゐない婦人の口からそれを聞くならば、駭いて肝をつぶしてしまふだらう。どこの國でも昔から、琴瑟和す、と言ふ語を金科玉條として、自他の夫婦生活を觀察せよ、また、そのやうに勉めよと敎へて來たものだ。ところが、モダンの者は、夫婦生活を一種の鬪爭と心得へて、どちらが勝ち犬になるか、負け犬(under-dog)になるかと考へるのだ。彼等は自ら喧嘩するか、あるひは、他の夫婦生活を見る場合には、恰も犬の嚙合か、シャモの蹴合の場に居るやうに思つてゐるのだ。さもなければ「勝ち犬」などといふ言葉は出て來るものではない。若しこの語は、單純な社交上の無邪氣な諧謔に外ならぬと言ふ人があるならば、その人は言葉に水派のあることを知らないであらう。

結婚生活を鬪爭と見る考方は、恐ろしい料簡だと言へば、頗る凄いもの、また、剽輕と言へば、たしかに無邪氣なところがある。とにかく、かやうな料簡はすさまじいもの、あるひは陽浮無毒、いづれであるにしても、ロマンティク脂肪の拔けてゐるところが特色だ。

さてどちらが勝ち犬になるにしても、結果は夫唱婦隨か、婦唱夫隨、あるひは亭主が關白の位にすわるか、ヘンペクト(女房天下)の家庭ができるか、どつちか一つにきまるのだから、表面は誠に平和な狀態が現はれるわけだ。ラティンの文獻に「予は妻を娶り、持參金のために君主權を賣りたり」と言ふのがあるさうだ。これを書いた男は、もと〳〵強い女性が、持參金といふ武器まで持つて來たから、已むを得ず主權の地位を去つたのだらう。想ふに、彼の家庭は表向き平和であつたらうが、彼の內心には不平が絕えなかつたらう。だから、上記のやうな語を書いて、わづかに慰安を求めたのであらう。

ところで、「勝ち犬」もなく、「負け犬」もなく、しかも和合してゐる夫婦生活については、これをどう說明し

たものであらうか。實際、大部分の家庭は、夫婦生活といふ試驗において、及第點を取つてゐるのだ。だから道德論者は主張する、古への聖人が、ちやんと言つてゐるではないか、「男女別ありて後に夫婦義あり、夫婦義ありて後に父子親あり、父子親ありて後に君臣正あり」である、「男敎」と、「女順」、「陽道」と「陰德」、「外治」と「內職」、これは天地自然の理である、「この故に、男敎脩まらず、陽事得ざるときは、適、天に見はれ、日これが爲に食す、婦順脩まらず、陰事得ざるときは、適、天に見はれ、月これが爲に食す」(以上『禮記』)とある、夫婦生活は本來爭鬪だなどと言ふのは、とんでもない誤解であると。かやうに事實と敎理とを示されて見ると、モダンの立ち場は無くなつてしまふやうだが、モダンはモダンで、近頃の心理學を味方として、所謂平和の家庭の解釋を立てるのだ。

『禮記』の主旨は、夫婦それ〴〵の活動範圍を截然區別して、平和を維持させようと言ふ所にあり、若し男女それ〴〵にその範圍を踏み越えると、日や、月が「食す」と戒めたのである。日月の食とは夫婦衝突とその惡影響とを象徵的に示したものであらう。昔から夫婦喧嘩は、犬も喰はないと言はれてゐるが、心理學者ならば、貴重な材料はこれであると思つて、丁寧に味はつて見なければなるまい。勿論、喧嘩の原因は、一件ごとに異なるであらうが、幾多をレトルトにかけて見れば、この生活の持あぢに爭鬪のあることが分かり、かつ『禮記』がそれを除くために苦心してゐることが分明になるだらう。「負け犬」も「勝ち犬」もない平和の家庭といふものは要するに、兩方が優越慾を引込める、言ひ換へれば、これを無意識內に抑壓するから成立するのだ。つまり、無言の內に、休戰條約を結んでゐるから、風波が起らないのだ。ところで、何かの機會に、この意慾が無意識內から跳ね出す——意識の檢閱官の威力を無視して——さうなると、夫婦喧嘩が始まる。この場合、休戰條約の文書があつたところで、それは三文の値打もない紙片となる。まして、そんな文書は、もと〳〵夫婦の間に無いのだから、お互に無遠慮な行動に出ることになる。この「男敎」「婦順」の決裂は、珍らしい例でなく、世間到る處に見られる。して見れば、平和の家庭は天地自然の理の現れではなく、兩性本然の爭鬪の生活を中止したものに外ならず、時々に勃發する夫婦喧嘩は、この本質が、あらゆる抑制、修飾、彌縫を破つて、輪郭太く現れ出でたものであると言へる。一體、孔子の說く「禮」の意義や、『禮記』の要旨を正解すれば、その敎ふる所の反對が人間性の自然であり、「禮」は自然性の統制、訓練、陶冶の方法

であると見なければなるまい。さうすれば、道德論者がモダンの見方を攻撃するのは、全く見當はづれになつてしまふ。

夫婦生活の爭鬪であることは、上古の人々も知つてゐたのだ。何よりの證據は『周易』である。この書の「坤卦」に次の文章がある。

「上六。龍、野に戰ふ、その血、玄黃。」

「坤」は女性の豫徴であり、この卦全體は婦道の敎誨である。「上六」は坤卦の極點であつて、女性の勢力の伸張された頂點を表象する。女子が勢力を張ると、從順溫和の德が消えて男性のやうになるから、「牝馬」といふ象徴では、これを言ひ表はし得なくなる。むしろ男性の象徴「龍」を借りて、その面目を表はさなければならぬ。孔子穎達の說「上六はこれ陰の至極、陰、盛んにして陽に似たり、故に龍と稱す」といふのは、おそらく諸家の贊成するところであらう。今日の語をもつて言へば、女性の優越慾が旺盛になると、女子は變じて男性的となる、と言ふ意味で、「龍」をその象徴としたのだ。かうなると、男性の龍と女性の龍とが、野に出でて戰ひ、共に傷つき「その血、玄黃」といふ慘憺たる狀態が發生するぞよ、と古への聖人が誡めたのだ。やさしく言へば、女房が增長すると、亭主と衝突し、遂に腕力沙汰の夫婦喧嘩となるから、愼めよと言ふ警戒がこの爻辭である。ここに「野」とあるのは、專門家の解說にあれば、「卦外」の意味と言ふことだが、それだけの言葉では、素人の頭に明白な觀念は浮ばない。一體、「卦」といふものゝ形が、まことに變なもので、易學者の說明を聞けば聞くほど分からなくなる。だから、素人考へを立てさせてもらうとして、これは倍理的統制――禮の範圍――の象徴であると見たい。さうすれば「卦外」とは、道德禮儀の境界を踏み出した處だと解することができて明白になる。西洋の諺に「家庭は最も安全なる避難所なり」といふのがあるが、『周易』は、女性の優越慾が强烈になると、家庭が荒野になり、遂に血を流すに至ることもあらうと說いたのだ。そこで、「その血、玄黃」の「玄」は乾龍の血の色、「黃」は坤龍の血の色のことだ。乾（陽）は天の象徴であるから「玄」の字を用ゐ、坤（陰）は地の象徴であるから、「黃」の字を用ゐたのである。

「文言」には、この爻辭を明白に解說してある。「陰、陽に疑すれば（この「疑」の字については異說もあるやうだが、「似」または「匹敵」の意と解すべきであらう）必ず戰ふ。その陽なきを嫌ふが爲の故に龍と稱す。猶ほ未だその類を離れざるなり。故に血と稱す。夫れ玄黃とは天地の雜なり。天は玄にして地は黃なり」と。

すべて『周易』の語は、漠然としてゐるだけに、種々の人事關係に應用することが出來る。この爻辭も、應用の途はなか〳〵廣いが、特に夫婦生活に當てはめて見れば、無意識的爭鬪が、遂に表面に顯出することを指摘した點において、心理學上の價値を見せてゐる。また、爻辭の筆者は、「龍戰于野」といふ現象は、決して偶然に起るのではなく、もと〳〵さうなるやうな傾向があると見てゐる。同卦の初六に「霜を履みて堅氷至る」と書いてある所は、筆者のこの深い觀察を、好く表はしてゐるではないか。周公もなか〳〵立派な心理學者である。

三千年以前に書かれた文字「履霜堅氷至」と、結婚は薄氷を踏む冒險のやうで、おもしろいとするモダン思想とを併せて考へて見ると、非常に古い頃の人と現代人とが「肝膽相照」にやりと笑つて握手するやうに感ずると共に、今さらながら、人間性の無變化に驚かざるを得ない。同時に、優越慾の矯正に苦心した古今の賢哲に敬意を表すと共に、今後、モダンの冒險熱を善導する任に當たる人の苦勞は一方ならぬものであらうと思ふ。

（をはり）

前號正誤

頁數	行數	誤	正
一	四	ナルチスティッシェ	ナルチスティッシュ
同	同	如實を	如實に
一六	一七	頭をもだげ	頭をもたげ
三八	上段 九	とか云ふと	かと云ふと
同	下段 一	自分等自我	自分等自身
三九	上段一四	シューミレール	シェレーミール
四〇	下段 一	二的の頷	二重の顏
四二	上段二一	學問と藝術	學問と道德
五四	上段 八	きらいだい	きらひたい
五六	上段一三	そのものを	そのものの
五八	上 一七	然も	宛も
五九	下 九	無意議	無意識
九四	上 一	ビドー	リビドー
九五	下 一一	ナルチムス	ナルチスムス

時評

時言數題

大槻憲二

一、少年救護法の實施

久しく我々の耳に暗い感じを以て響いて來てゐた感化院の名は廢せられて、教護院となることに、この十月十日から定められた。名は實の賓であつて、この改稱は、明治三十三年に制定せられた少年感化法がやうやく少年教護法として改制せられることになつたにつれての變革である。

教護法が感化法と異る諸點は、次の三つに要約することが出來るやうだ。卽ち(一)不良兒童の鑑別には科學的方法を用ふること。(二)從つてその取扱態度は道德的懲罰的でなく、處置的治療的であること。(三)院內保護のみならず、院外保護にも努めること。換言すれば、惡くなつて了つてから心配するばかりでなく、惡くなりかけに早く處置すること。

教護法が感化法よりも遙に進歩してゐるものであることは云ふまでもない。その點に於いて斯法の實施を我々は大いに同慶する。ところで教護院に於いて用ゐられるその科學的方法とはどう云ふ方法なのであらうか。その點を考へると、我々はあんまり同慶ばかりもしてゐられない。從來の所謂科學的や所謂醫學的では、結局有名無實に終るべきことは火を見るよりも明かだ。

二、松田文相の教育方針

松田源治氏が文相就任後、最初の具體的教育方策としてパパ、ママを禁じ、且つ『孝經』を重用すべきことを聲明した。これは既にあまりに世間周知の事であり、且つ世上に毀譽褒貶の聲の決定的に聞えてしまつた今日に於いて、再びこれを取上げることは、知慧のないことのやうであるが、私はパパ、ママの禁止や『孝經』重用に對する是非の論を試みようと云ふのではないのだ。私は何故に文相がこの二つの事を最初に思ひついたかと云ふことの心理的詮鑿をして見たいと云ふのである。

疑ひもなく、文相の幼時に於ける經驗がこれ等思ひつきの根柢になつてゐる。何事によらず自分の幼時的經驗を土臺とすることは、最もあり勝ちであると共に、他面に於いて最も危險(非實踐的)なことでもある。パパ、ママを用ゐるから『日本古來の孝道が廢れる』と云ふそ

の科學的根據は何處にあるかと訊かれたら、文相も答辯に窮するだらう。これは文相の個人的趣味（分析的に云へばコムプレクス）に外ならない。（私とても個人的趣味から云へば、パパ、ママはあまり好きではない。現に自分の家の子供等にもさう呼ばせてはゐない。）且つ、文相就任後に、自分の手許にさへなかつた『孝經』を下役に捜し出させて、それで一國教育の方針を云々しようなどゝ云ふのは、輕率と云へば隨分輕率な話である。そんな併思付の（根柢の淺い）自分の幼兒的趣味が土臺になつてゐる方針で教育行政を掌らうと云ふのだから、政黨出身の大臣はその鼎の輕重を問はれるのだ。政黨者として政治家として松田氏は相當な人物であらうとは私も思つてはゐる。併し氏や鳩山氏のやうに平生教育の事なぞあまり考へたこともない人がその任に就かねばならないと云ふことは、政黨政治と議會制度との大きな缺陷であらうと思ふ。併しそんなことは政治上の問題だから我々の闘知するところでない。たゞ一國の教育行政方針の確立に幼兒的個人的趣味を持出すことの（勿論それと氣付かず）馬鹿らしさを反省して貰ひたいと云ふのみである。

三、乃木伯爵家の斷絶

乃木將軍の歿後、その爵位を襲ぐべきか否かと云ふことは、隨分喧しい問題になつたことを私はなほよく記憶してゐるが、その爵位をついでゐた人がこの度、それを返上したと云ふ事が、十月廿六日の夕刊紙上に見えてゐた。私もこれは當然であらうと思ふ。

一體乃木將軍のあの悲劇的な性格はどこから由來してゐるのだらうか。これを東鄕元帥の春風の如き樂觀的な性格と比べると、一層興味が深い。二人の男兒を殺し、あまつさへ自分自身までも明治大帝に殉死しなければ氣のすまなかつたのに依つて見ると、よく〳〵根深い罪障感と自己懲罰慾とが將軍のコムプレクスにあつた事は疑ふまでもない。そのコムプレクスは若い頃に錦旗を敵軍に奪はれた事にあるとは、普通に人々の云ふところであるが、それを奪はれた時の本當の事情（無意識心理狀態）は將軍以外には誰も知る人はない。否、無意識的心理根柢は將軍自身にも分らぬ筈だ。併し錦旗事件以前に、その幼兒時代にその兩親に對して如何なるエディポス的定着を抱いたかは、これまた何人にも今は探究しようのない事となつた。併し將軍の傳記を細かく分析的に調べて見れば、意外の新事實を發見するかも知れない。

一體、旅順口攻圍もあれほどまでに日本陸軍の大悲劇にしなくても濟んだのではなかつたらうか。既に奉天方面の本營との連絡の絕えて了つてゐた旅順口の露軍など

はあんなに大きな犠牲を拂つて急いで攻め立てる必要はなかつたのだ。金州城外あたりでのんびりと遠卷きしてゐれば、旅順の敵は糧食のためだけでも自滅して了ふだらう。或はこれは素人考へかも知れない。併し乃木將軍幕下の山本少佐××××、××××××××ならないとの建言が將軍に用ゐられなかつたゝめであるとの風評さへある。とにかく旅順攻圍の悲劇は、あのサド・マゾヒスティックな攻擊的態度は、乃木將軍の悲劇的な（超自我の苛責の甚しかつたと云ふ意味では神經症的な）性格が作り出した藝術であると云つても、甚だしい過言ではなからうと私は考へてゐる。攻圍の悲劇が行動方面に表れたる將軍の藝術であるならば、文字に表れた藝術は例の有名な『金州城外立斜陽』の詩だ。この詩は私の最も好きな名句の一つだ。これを詠じて涙なきものは人に非ずと私は云ひたい。東郷元帥が全然詩人でなく、徹頭徹尾健康な現實家であつたのと實にいゝ對照だ。併し乃木將軍は最も現實的に行はれねばならない戰爭をまでも詩にして了つたのは、國民としては或る意味で迷惑であつた。將軍は神經症的であつた故に超自我が高く詩人であつた。多數の兵を殺したことに就いてまた將軍自身の罪障感は倍加することになつた。將軍の自刃は重なる罪障感を何もかも清算しようとした行動であつた。その名籍と爵位とを存續せしめることは、斷じて將軍の本心ではない。悲劇の詩人は飽くまでも悲劇の主人公として遇すべし。これに敬意を拂ふことは、いくら拂つてもよい。併しその國民的記憶を華やかにせんとするが如き一切の努力と好意とは、ひいきの引倒しである。

四、上林曉作『景色』

雜誌『作品』十月號所載上林曉氏作小說『景色』は、分析的見地から見て非常に面白い作である。典型的なエディポス・コムプレクスの作品である。

作の主人公（勿論作者の分身）は若い小說家である。彼にとつて現在、父コムプレクスの轉嫁對象となつてゐるのは『Tさんと云ふ有名な作家』である。彼はその小說家を『小說の神樣』とさへ呼んで恥ぢないほどである。且つ『Tさんのしたであらうと思はれることをして見なくてはTさんの味つた情趣と心境とを完全に理解することが出來ない』と考へてゐるほど、父への同一化的態度を判然と示してゐる。さうしてそのT氏が愛して始終その側に住み、且つその作中に描いたのが或る沼である。『その沼の名前を聞いたゞけでも、なにか郷愁のやうな氣持が湧き起つて來て身慄ひするほどだつた。』（圏點は大槻附之）これは主人公にとつて、母コムプレクスの轉

嫁對象である。併し今はそのT氏はその沼のほとりの家にはゐないのだ。この主人公は父のゐなくなつた母の許へ遊びに行くことになつた。卽ち、主人公にとつては既に行く前から、エディポス的な亢奮があつたのだ。然るに行つて見ると、この亢奮に更に大きな拍車をかけるものが現はれて來た。それはこの沼の『景色』が主人公にとつては過去のエディポス・コムプレクス的事件に聯關してゐることが發見せられたことだ。

主人公は舟に乘つて沼を渡つてゐると、突然『これはたしかに見たことのある景色である』ことを思ひ付いた。『この景色を僕は何遍も見てゐるではないか。たとへば故鄕の川景色を見るやうに、僕にはもうお馴染の風景ではないか。……』それは『子供の頃、一人の中學生が町から來て、僕の村で一夏を送つたことがあつた。宮永さんと云つて、眉目秀麗な人であつた。』この文學青年から古雜誌など借覽してゐる內に、その口繪の一つに『好きで好きでたまらない一枚の水彩畫があつた。たしか「雨後」と云ふ題であつた。筆者は……明治時代の水彩畫の大家であつた。……その畫面には、白い薄雲の棚引い淺綠の空が麗々と廣がつてゐた。雨後の水のなみ〳〵と溢れた川面に、一艘の渡し舟が點景になつてゐた。渡し舟の中に、桃色の日傘が一つ交つてゐた……これだけでも少年の夢を滿してくれるには十分であつたが、しかしこれだけの景色では、二十年の後、沼の上を舟で渡りながら、僕の腦裡に遺る瀨ない追憶となつて閃くことはなかつたであらう。』

では何故にこの景色が、主人公の腦裡に『遺る瀨ない追憶となつて閃』いたかと云ふに、それは宮永と云ふその中學生が不在の間に、その雜誌からその口繪「雨後」を破つて盜んだからである。主人公はその畫が『欲しくて欲しくてたまらなかつた。あんまり欲しくなつたので僕はたうとう前後の見境もなく、その繪を引き千切つて盜んでしまつた。「この繪をくれませんか」と云へば、宮永さんは雜作なく呉れたにちがひない。しかし僕の欲望が昂じ、頭がほてつて來ると、引き千切つてしまふよりほかに手立てがなくなつてしまつたのだ。……胸の動悸は高く鳴つてゐた。そして雜誌は行李の一番底へ入れ口繪は二つに折つて肌へつけた。……その翌る日から僕はぷつつりと宮永さんのところへ行かなくなつた。却つて怪しまれはしないかと思ひながら、どうしても足が向かないのだ。それきり僕は宮永さんと會ふ機會はなかつた。村から歸ると間もなく宮永さんは死んだと聞いた。僕が中學校へ通ふやうになつて、初めて圖畫敎室へ這入つて見ると、そこには宮永さんの書き殘した紫木蓮の繪

が懸つてゐて、僕は宮永さんから見下されてゐるやうに胸が騷いだ。「雨後」の繪を盗んだことを思ひ出して、かすかに心が痛んだが、僕は極力思ひ出さないやうに努めた。……』

つまりこの當時の主人公にとつて宮永さんは父であつたのだ。その父から母（「景色」）を奮ふことに亢奮を覺えたのだ。これを斷つて貰つたのではエディポス・コムプレクスには何の觸れるところもないから、亢奮を覺えないのだ。つまりこの關係に於いて、フロイドの所謂「憤る第三者」が必要なのだ。

要するにこの小説の面白味は、時代を異にする二つのエディポス的關係に於いて、その母（「景色」）が同じものであつたと云ふことの偶然性（偶然と云ふにはあまりに必然的な形に見える偶然性）に存するのだ。『景色』殊に水のある風景が常に母及び母胎の象徴としてこれとコムプレクスされることは、フロイドも既に云つてゐるがその根柢には生物學的なものゝあることは、フェレチーの「性交と受胎」（前號及び本號所載）をよめば、首肯せられ得ることである。

五、弘津千代作『妖鱗草紙』

『妖鱗草紙』は上田秋成の有名な『雨月物語』中の『蛇性の淫』を材料とし、作者が工夫を加へて劇化し、八月號の『新演劇』に掲げたものであるが、去る九月廿四日から五日間日本俳優學校劇團に依つて帝國ホテルで公演せられた。芝居の出來映えや、原作の詮鑿（上田秋成が既に支那の物語から飜案したものであることは周知の事實だ）は只今の我々の云々すべき限りでない。我々は今これを弘津女史の創作として分析的に觀察して見たい。

處は紀州三輪ヶ崎の新宮と云ふ漁村、及び大和國初瀨寺附近、吉野山中、道成寺本堂前などである。時は不詳となつてゐるが、秋成が江戸の文學者であるに徴し、少くとも徳川時代以前と見るべきだらう。男主人公を大宅豐雄と云ひ、三輪ヶ崎の網元大宅竹助の次男であるが、漁家の子に似合はず、學問好きで神經質で空想的な性質である。女主人公を眞女兒と云つて蛇性の美女である。筋と云ふほどのものはなく、このヴンプ型の眞女兒が幼兒型、インテリ風の青年豐雄を籠絡するが、遂に道成寺の住職法海和尚の法術に依つてその蛇性を暴露せられる。併し眞女兒はあくまで法力に抗してその愛慾の魔力を最後まで振はうと叫ぶに對し、法海もまた自分の法力が勝つか、お前の魔力が勝つか、戰ひ拔かうと答へ、大般若經轉讀の聲耳を聾するばかりなる内に、嚴かに幕は下るのである。

この劇を單に怪談劇として了つたり、また某君の云ふやうに草双紙風の單なる美しい見世物劇視することは當らない。私はこれを、佛教的に云へば煩惱と解脱との永遠の人間的努力の葛藤を象徴的に表現したもの（最後に於ける法海の一言がよくこれを證明してゐる）だと見る。精神分析的に云へば、本能（エス）に對する自我と超自我の共同戰爭の布告であると見られる。この二大心力――ジーキルとハイドと云つていゝかも知れない――の闘爭葛藤が中心主題であればこそ、この作は戯曲になつてゐるのだ。

兩主人公の性格に就いては、既に云つた通り、眞女兒はヴンプ型の妖婦であるが、恐らくは秋成が彼女を『眞女兒』と命名したところを見ると、彼はこれこそ女人（女性的愛慾）の眞性と考へてゐたに相違ない。私もさう思ふ。分析的觀察がその見方を是認する。併しこれは決して悪い意味に於いてばかりでないのだ。父コムプレクスを未だ脱せざる少女の愛は父親型の男を對象として選ぶが、このコムプレクスを卒業して一人前となつた女の愛は必然的に母親型となつて、その對象を『わが子』として扱はうとする。フロイドの云ふやうに、女にとつてその相手を愛するとは、これをわが子とすると云ふことであり、男にとつて女を愛するとは、これをわが母とすると云ふことである。併し『わが子』にして了ふべき愛人を、何故にそのやうに取殺さんばかりに執拗に追廻すかと云ふことは、常識的には理解し難いことだ。併しそれは分析的には（無意識心理的解釋では）もう判然し過ぎる位に分つてゐることだ。念のために繰返して云ふならば、それは去勢コムプレクスへの補償としてのペニス（男性器）所有者への取込的、喰込的衝動（愛憎二元の矛盾した衝動）が一つになつて現はれたものだ。リビドーの纒綿と攻撃慾とが一如の姿となつて顯現してゐるのだ。實に女人は煩惱の塊りである。併し女人が解脱し得る境地に達するためには、まづ男性器を獲得せねばならない。卽ち、彼女等にとつては、煩惱もまた、否、煩惱こそは解脱への必然的一階段であるのだ。高所に昇るこれのないものはまづ階段を捜し出すことに焦慮狂奔しなければならない。そこまで、女性の心理を理解したものは、佛教者にもなかつたのではなからうか。

豊雄は幼兒型の男である。このやうな男を籠絡するためには、その『救助願望』に訴へることが最上の策であることを、常に妖婦型の女はよく心得てゐる。眞女兒はこの奥の手を二度も用ゐてゐる。卽ち、第一回は新宮な

る眞女兒の家に於いて。第二回目は、初瀨なる田邊金忠の家の近くで。第一回の時には、眞女兒は自分が『十五の時にこの紀の國の受領の下司をしてをりました男に買はれましたも同然で嫁いで來たのでございます……可愛さうだと思召しまして？』と云ふと、單純な豐雄は早速『それと共に義憤を感じ』てしまふのであつた。第二回の時は、田邊の家で眞女兒を入れてくれないものであるから、早速『二本の杉の下から川へ身を投げ』るのであつた。それで田邊金忠も豐雄も救助願望（愛）を起すのであつた。

これに對して豐雄は幼兒型の純な青年で、作者はこの性格を描寫するために、意圖的に筆を用ゐてゐる。で、眞女兒が彼にとつて如何に母代償であるか、その證據を二三擧げて見よう。それは豐雄の眞女兒に對する崇拜的態度を見れば十分であるが、なほこの作全體に見られる怪異的雰圍氣がそれに重大なる關係を持つてゐる。何となれば、母は幼兒にとつて最もなつかしく、同時に最も恐ろしい對象であるからだ。幼兒がその愛慾を纒綿させるべき唯一の相手であつて、而もその纒綿が禁斷（タブー）せられてあるのは母親である。で、その纒綿の慾望が强烈であればあるほど、その禁斷の恐怖は反比例的に增加して行く。一體、妖怪變化の類は我々近代科學の洗禮を受けたものにとつては、承認し難いものとなつてゐる。併し事物を變化視して恐怖する人間心理の機能ならば、これを承認するに吝でない。卽ち、我々は妖怪を見たと稱する人間の心理現象として、彼の心理の中にその原因を探索せんとする。併し、藝術は科學でないから、心理現象（妖怪）をも客觀的に存在するものゝ如く描寫（客觀化）する。私はかつて『マクベス』に於ける三妖巫の出現と言動とを、マクベス自體の心理に卽して說明した。『妖鱗草紙』に就いても、私はこの方法を適用せねばならない。

家と女、殊にその女の住むでゐる家とその家の主人公たる女とは、無意識心理現象として見られる限り、分析的には同じものと解釋せられる。（拙稿「家と女」文學時代誌所載參照）換言すれば、家は常に女の象徵となつてゐる。この劇の場合に於いても、眞女兒の家は彼女自身の象徵となつてゐる。

『……宏壯で雅びやかなお住居が、新宮の片ほとりにあらうとは全く思ひがけませんでした。何だか昔の繪卷物の中にでもありさうな建物ではありませんか』

『いゝえもう、住み荒して居ますので、晝間は二目と見られる家では御座いません。』

『おゝこれは珍しい。櫻が咲いてゐる。』

總て場所錯誤、時代（時期）錯誤である。晝間（現實）

に於いては『二目と見られ』ない、父に依つて『住み荒ら』された家でも、夜目（空想、夢想）には非常に美しく魅惑的に見えるのである。この夢の家へ來て彼は、眞女兒（母）からその先夫（父）の帶代（刀、ペニス）を貰ひ受けるのである。卽ち、彼は父の代理となつて母と婚したのである。帶代護渡の象徵は『雨月』にも出てゐるのである。

その他、彗星、蛇性、などの象徵的意義に關して云ふべき事は多いが、それ等はなほ詮鑿を要する點が多々あるので、今日はこれだけに止めておく。

六、市電爭議に於けるエディポス

過般、市電爭議の際、女車掌連の多い大塚車庫の籠城場所に、山下局長の位牌が飾られ、然も蠟燭までとぼされてゐた。女車掌連中が代る代る佛前に行つて叩頭をする度に、部屋内にドツと晴れやかな笑聲がわいたと、朝日新聞（九月五日）は報道してゐた。

これは父（局長）殺しのエディポス的願望充足であることは分析的に判明し過ぎてゐる。夢に於ける如く、この願望が旣に實現されて了つた形をとり、局長の位牌となつて現れてゐるのは、非常に我々には面白い。

また再度罷業の際に、男車掌連の籠城場所で大鼓を持出し、その皮の上に山下と書き、それを兩側から交互にバチで打つてゐる寫眞が都新聞（十月八日）に出てゐた。これもやはりエディポス的父殺しの代償行爲であることは、云ふまでもない。一體、大鼓を打つと云ふことは、攻擊と讃美の二つの矛盾した、アムビバレントな心理を一つの形に表現する方法であることは、これが神社佛閣の祭禮に用ゐられたり、軍事に用ゐられたりするに徵して明かだ。この再罷業時に於ける『山下打擲』にも、このやうな父（局長）へのアムビバレンツの表現（勿論この場合には陰性面—憎惡—の方が勝つてはゐるが）を見ることは、必ずしも不可能ではない。

から云ふ群集的な行動の場合には、人類の心理が個々人の場合よりも退行し低下するものであることはルボンの旣に說いてゐるところであつて、敢て珍らしいことではないが、併し無意識コムプレクスをこのやうにはつきりと露出させることは、罷業當事者に於いて必ずしも名譽ではない。プロレタリア文學にもやはりこのやうな幼兒的エディポスの露出してゐるのが、その文學價値を低くすると、私は屢々論じて來たが、實際運動に就いてもこれは同樣に云はれねばならないことだ。併し實際運動がこのやうに幼兒性を暴露してゐる間は、庸主側はまづ高をくゝつてゐていゝ。どうせ子供の騷ぎだ位に思つて

ゐてゐる。併し彼等にこのコムプレクスが解除され、純粋な經濟運動となつた場合には、もう高をくゝつてはゐられなくなるだらう。あらゆる意味でさう云ふ日の早く來むことを祈るものだ。

無意識的犯罪と刑法

岩倉具榮

近頃見た映畫に猫眼石怪事件といふのがあつた。刑法學上種々な問題を私に暗示した。その梗概を語れば——富豪ジャック・ブルックフィールドは、宏壯な自分の住宅で賭博場を經營してゐた。一八九〇年代の或る夏の事…クレイはジャックの娘ナンシイの戀人で、その夜は就職の吉報をもたらしてジャックを訪ね、ナンシイとの結婚の許可を得た。その時クレイがジャクの嵌てゐる猫眼石の指輪の怪しい魅力を恐れたので、指輪を用ひて施す催眠術が得意だつたジャックは、術を用ひてクレイを眠らせ、指輪に對する恐怖を除き去つた。そして彼に指輪を貸し與へた。翌朝クレイは、殺人の廉により投獄された。實はジャックに術を施されたクレイは、彼の意志を我が意志と感じて、ジャックが殺したく思つてゐた男を殺したのだつた。ジャックとクレイの母ソーン夫人とは、老法官プレンティスを訪ねて、クレイの辯護を依賴した。かつてソーン夫人の母マーガレットと戀仲であつたプレンティスは昔を思ひ出し、戀人の孫のため老軀を提げて辯護に立つた。

クレイは指輪の事實を述べたが、誰一人信ずるものはなかつた。そこでプレンティスは判事とジャックを說いて催眠術の實驗をすることになつた。全法廷の嘲笑裡に豫め彈丸を拔かれた銃によつて實驗が行はれ、ジャックの催眠術にかゝつた陪審員の一人は發砲するに至つた。

結局クレイは無罪となり、ジャックも別に敎唆したわけではなく無意識願望があつたに過ぎぬとて無罪を云ひ渡された。プレンティスは相抱くクレイとナンシイの姿を眺め、マーガレットの面影を胸に浮べ乍ら靜かに法廷を去るといふハッピーエンドで、幕は閉られる。

フロイドは催眠術と無意識について次の如く云つてゐる。(大槻氏譯、精神分析要領)人々は催眠術から二つの根底的な、忘れ難い說を引出さゞるを得なかつた。

第一に、被術者の驚くべき肉體的變化が矢張只、術者が被術者に惹起させた心理的影響の結果に過ぎないことを人々は認めた。第二に、人々は、被術者が催眠終了後

に示す態度からして、彼等が只「無意識的」と名づけろほかないところの心理過程が存するとの、明白な印象を受けた。「無意識は既に久しい以前から哲學者の間には理論的概念として問題になつてはゐたが、併しこゝに催眠術の現象としてそれは始めて實驗の對象となつたのである。更にまた、催眠術的現象は神經症者の爲すところと類似してゐることが分つたのである。云々。

映畫「猫眼石事件」に於ては、ジャックのかけた催眠術のためにクレイが心的影響を受け、思はざる殺人事件が生じたわけである。そしてそれは無意識の中に行はれたのである。クレイは無意識裡に殺人の無意識的命令を受容れたのであらうか。クレイは自分に催眠術をかけたジャックの精神力に支配されたのである。強い精神力は他人に傳達され得るかも知れない。フロイドも以心傳心の可能を認めてゐる。（本誌第一巻第八號所載、フロイド「夢と神靈現象」）クレイの殺人はその意なき行爲だつたので無罪となつた。日本刑法でも、第三十八條にその通り規定してゐる。ジャックまでも無罪になつたのは疑問であると思ふ人もあるかも知れないが、彼のかけた催眠術がどの程度のものか分らない。クレイを敎唆して殺人を犯さしめたのでなければ、罪にはならないわけだが、法廷に於ける實驗の場合は發砲の命令が意識的に（無言裡にではあるが）下されたのでないか。實際、たとへ催眠術によつても自分の意志を他人に意圖的に傳へ得るなら、敎唆犯が成立する譯であらう。日本刑法第六十一條の規定を御覽なさい。併しジャックの場合は、自分の意圖を判然と傳へたのではなく、無意識の殺意がクレイに感應的に傳つたので無罪となつたのであらう。實際問題としては、かなり危險な殺人事件で、かゝることが可能だとしたら催眠術恐るべしである。今後の刑法は、無意識心理の發見に依つて根柢的に書改められねばなるまいと思ふ。刑法學者が精神分析學に風馬牛でゐていゝわけはない。（完）

エディポス劇の上演

精神分析學と切つても切れぬ關係のあるソフォクレースの「エディポス王」は、我等の研究所主催で、昨年四月末に朝日講堂で上演したが、今度また新協劇團の手により十一月十日から末日まで、築地小劇場で、村山知義氏演出の下に上演されることになつた。この劇はわが國では澤田正二郎が上演したのが最初で、その次が我々の研究所の上演で、今度は第三回目である。脚本は本誌創刊號に松居松翁氏譯が載つてゐるし、上演記錄は本誌創刊次號に載つてゐる。我々の上演の時は雜務多端でこの劇を十分に鑑賞出來なかつた。丁度、料理人には自分の作つた料理がよく味へないやうに……。今度は他人の据膳を喰べればいゝのだ。あゝ思ひ出深きかの「エディポス王」よ！

ブリル孃（マンスフィールド作）

Miss Brill (Katherine Mansfield)—1922

岩倉具榮譯

大變輝かしい上天氣であつた。青空は金粉をふりかけた樣で、光りの大きな斑點が白い酒の樣に公園の上にはね飛んでゐた。が、ブリル孃は毛皮の襟卷をかけて來ることに決めたのを喜んでゐた。空氣は動かなかつたが、口を開けると丁度氷水を吸ふ前に感じる樣なひやつとした寒氣があつた。そして時々木の葉がちら〳〵と飛んで來た。——何處からともなく、空から飛んで來た。ブリル孃は手を上げて彼女の毛皮の襟卷にさはつた。何と可愛いんだらう？もう一度觸つて見て、如何にも心地よく感じた。午後に彼女はそれを箱から取出し、しみとり粉をふりかけ、十分ブラシをかけ、かすんだ小さな眼も拭いて活々とさせた。「私は何うなつてゐたんだらう？」と哀れな小さい眼が云つてゐた。おゝ、赤い綿毛からも眼が彼女の方に跳び付かうとしてゐるのを見て如何にも快かつた。けれども何だか黑いもので出來てゐる鼻はあまりしつかりしてはゐなかつた。何處かに打ちつけたに違ひない。なに、心配はない——時が來れば、——どうしてもそれが必要だと云ふ時には、黑い封蠟を少し塗るんだ……小さないたづらつ子！さうだ、彼女はこの毛皮の襟卷について本當にそんな風に感じた。その小さないたづらつ子は、丁度彼女の左の耳の所で自分の尻尾をかんでゐる。彼女はそれを外して膝の上に置いて撫でることも出來たのである。彼女は手と腕に痛みを感じたが、それは步いてゐる爲だと彼女は思つた。そして彼女が呼吸をした時に、何か輕やかで悲しい——いや悲しくはない、確かに——何かおだやかなものが、彼女の胸の中で動く樣に思はれた。

今日の午後はこの前の日曜日よりもはるかに人出が多かつた。そして樂隊は一層高らかに、又愉快げに聞えた。それは季節(シーズン)が始まつたからであつた。何故なら、樂隊は一年中日曜日には演奏するのであるが、季節以外は決してかういふ風ではなかつた。それは丁度誰かが家族だけに聽かせるために演奏してゐるやうであつた。家族以外の人が居なかつたら、どんなに演奏するかに就いて頓着しなかつた。指揮者は着物まで新しいのに着換へて居るのでなからうか。それは確に新しいと彼女は思つた。彼は右足を後にひいて、時をつくらうとする雄鷄の樣に腕をバタ〳〵動かした。そして綠の圓堂に坐つてゐる樂隊の人々は、頰をふくらまして音譜をにらんでゐた。今や小さな笛の音が一寸聞えて來た——大變美しく！——明るい滴の一續き。彼女は確にそれが反覆されるだらうと思つた。果して反覆された。彼女は頭を上げて、ほゝゑんだ。

彼女と同じ「特別」席にゐるのは、たつた二人だけであつた。一人は天鵞絨の上衣を着た立派な老人で、彼は大きな彫刻のついた散步用ステッキの上にその手を組合してゐた。もう一人は大柄の老婦人で、刺繡のあるエプロンの上に一卷きの編物をのせて、眞直に腰かけてゐた。彼女は話をしなかつた。この事は殘念であつた。といふのは、ブリル孃はいつも他人の會話を聞きたがつてゐたから。彼女は、他人が自分の周りで話してゐるほんの一瞬間、宛かも聞いて居ないかの如くにして聞き、他人の生活の中に這入ることにかけて自分は相當なものになつたと彼女は考へたのである。

彼女は老夫婦の方をチラと見た。多分、彼等は間もなく行くであらう。この前の日曜もやはり、いつもの樣には面白くなかつた。一人の英國人とその細君とが居て、夫はひどいパナマ帽を冠つて居り、妻君はぼたん靴をはいて居た。そして妻君は眼鏡を掛けなければならないと云ふことについて、その間中云ひ續けてゐた。彼女はどうしても眼鏡が必要だと云ふのである。併し眼鏡を買ふのはつまらないと云ふのである。それは壞れるに違ひないし、又彼等は決して物持ちのいゝ方ではないのである。しかし夫の方はなか〳〵辛抱强く妻君の相手になつてゐた。彼はあんなのがいゝとか、こんなのがいゝとかいろ〳〵注意してゐた。——金緣は耳のうしろにまがつてゐるのがいゝとか、鼻梁のと

ころには小さな詰物のあるのがいゝとか。併し、どんな眼鏡でも彼女は滿足しない。「それはいつも私の鼻からずり落ちるでせう！」ブリル孃は彼女と握手し度いと思つた。

老夫婦は彫像の様に、じつとベンチに腰掛けてゐた。心配御無用、その彫像を見てくれる群衆には事を缺かない。あちらこちらと、花の床や樂隊の圓堂の前を、夫婦連や群衆が步き廻り、立止つて話したり、挨拶したり、手摺の所に花籠をくつつけて賣つてゐる年寄りの乞食から花を買つたりしてゐた。小さい子供達が跳んだり笑つたりしながらその人達の間をかけ廻つてゐた。男の子達は顎の下に大きな白い蝶形ネクタイをして、女の子達は天鵞絨レースの眞物をつけた小さなフランス人形を抱いてゐた。すると時には忽ち可愛い子供がよち〳〵と樹の下から廣いところに出て來て、立止り、目を見張り、急に尻餅をつく。と、小柄なお母さんが、若い雌鷄の樣に大股で、かけ寄つて來て叱りながら子供を助け起す。他の人達はベンチや綠色の椅子に腰かけてゐた。けれども、彼等は殆ど何時も同じであつた、來る日曜も來る日曜も。そして彼等の殆ど凡てに何か滑稽なものゝあることを、ブリル孃は屢々氣がついた。彼等は少し變で、默々として、殆ど皆老人であつた。そして彼等が物を見つめるその眼付きから見ると彼等は宛も丁度暗い小さな部屋から――いや戸棚からでも來たやうであつた。

圓堂の後には黃色い葉の垂れ下つた細い樹木が立ち並んでゐて、その間から海が丁度線のやうに見え、その靑空には金色の筋の入つた雲がたゞよつてゐた。

タム、タム、タム、チッドラム！チッドラム！タム、チッドラム、タム、タ！…と樂隊は吹き鳴らしてゐた。赤い着物を着た二人の若い乙女がやつて來て、靑い着物の若い兵士と出會つた。すると彼等は笑つて一緖になり、腕を組んで行つて了つた。二人の百姓女がおかしな麥わら帽を冠り、美しい鼠色の驢馬を堂々とひいて行き過ぎた。寒さうな、蒼白い尼さんが急いで通つた。美しい婦人がやつて來て、すみれの花束を落した。すると小さな男の子がそれを彼女に渡さうと後からかけて行つた。彼女はそれを受取つたが、宛かも毒でもついた樣に投出して了つた。おや〳〵！ ブリル孃はそれを感心してよいのか惡いのか分らなかつた！ すると今度は、貂の毛皮の縁なし婦人帽の

女と灰色の着物の紳士とが、丁度彼女の前で出會つた。男は丈が高くて、様子がこわばり、威張つてゐた。そして女の方は自分の毛が黄色かつた時に貰つた貂の毛皮の縁なし婦人帽を冠つてゐた。ところが、凡ゆるもの、その髪と云ひ、その顔と云ひ、その女の眼と云ひ、何もかもが、その見すぼらしい貂の毛皮と同じ色をしてゐた。彼女はやがてさつぱりとした手袋をはめた手を上げてその唇のあたりをたゝいてゐたが、その手は小さく黄色くて武骨であつた。おゝ、彼女は男に會つて大變喜んでゐた――浮々してゐた！　彼女はむしろ、その日の午後に會ふことになるだらうと思つてゐた。彼女は自分が何處に居たかを話してゐた――凡ゆる所にゐた。こゝにも、かしこにも、海邊にも……。その日は大變いゝ日であつた。――男の方はさう思はなかつたのであらうか。そして彼は多分さう思はないのであらうか……。けれども彼は頭を振つて、煙草に火をつけ、ゆつくりと大きな深い息を彼女の顔に吹きかけた。そして彼女が未だ話したり笑つたりしてゐたのに、輕くマッチを捨てゝ歩いて行つた。貂の毛皮の縁なし婦人帽の女は獨りになつた。彼女は前よりももつと明るく頰笑んだ。けれども彼女が何と感じてゐるかは樂隊さへも知つてゐる樣に思はれた。そして一層おだやかに演奏し、やさしく演奏した。太鼓は「頓！　頓！」と繰返し打ち續けた。彼女は何うしようといふのだらうか。今や何が起るのであらうか。併しブリル孃がさう思つてゐた時に、貂の毛皮の縁無し婦人帽の女は向きかへつて、宛かも丁度あちらの方で前のよりはるかに立派な他の誰かを見付けたかのやうに、手を上げてパタパタ行つて了つた。そして樂隊はもう一度變つて、前よりももつと早く、もつと樂しげに演奏した。するとブリル孃の席に居た老夫婦は立上つてドンドン行つて了つた、すると長い頰髭の大變滑稽な老人が折よくトボトボとやつて來て、並んで歩いてゐる四人の少女にぶつかりさうになつた。

これは實に面白いことであつた！　如何にも彼女には樂しかつた！　こゝに腰かけて、凡ゆることを眺めてゐるのが彼女には誠に好ましかつた！　それは芝居見たいであつた。それは確かに芝居みたいであつた。背景の空が塗つたものではないと誰が信ずることが出來よう。小さな褐色の犬が、藥を飲まされた「芝居」の小犬の樣におごそかに歩いて來てそれからゆつくり行つて了つた時に、やうやくブリル孃は、それが大變面白いのは何故であつたかが分つた。

彼等は皆舞臺の上に居るのであつた。彼等はたゞの見物人ではなかつた。たゞ見てゐるばかりではなかつた、彼等は自分で芝居を演じてゐるのであつた。彼女さへ一役受持つて、毎日曜やつて來たのである。彼女がそこに居はしないかと注意してゐた者も確にゐたであらう。彼女は結局演技の一部であつた。彼女は以前に決してさういふ風に考へなかつたのは、寧ろ不思議であつた。それに、さう考へて見れば、何故彼女が毎週必ず丁度同じ時間にその演技に後れない樣に――家を出たかと云ふことの說明もついた。またさう考へることに依つて、彼女が日曜の午後を如何に過ごすかに就いて彼女の英國人の生徒たちに話すことを何故彼女が妙に恥づかしく感じたかと云ふことの說明もついた。それに違ひない！ブリル孃は聲を出して笑ひさうになつた。彼女は舞臺に出てゐたのだ。彼女はあの病める老紳士のことを考へた、彼女は一週の中四日、午後に彼が庭に寢てゐる間新聞を讀んでやつたのである。彼女は木綿枕の上の橫へられてゐるかよわい首や、うつろな眼や、開いた口や、中高の鼻に全く慣れてゐた。若しも彼が死んだとしても、彼女は何週間も氣が付かなかつたらう。彼女は氣にもとめなかつたらう。けれどもその老紳士は新聞を或る女優に讀ませてゐるのだと云ふことを彼女は知つた！『或る女優！』老紳士は頭を擡げた。二つの老眼には光りがふるへてゐた。『女優――なのかあんたは。』するとブリル孃は宛かもそれが自分の役の臺本でゞもあるかの樣に新聞を撫でゝ、おだやかに云つた。『えゝ、私ずつと前に女優でしたの。』

樂隊は一休みしてゐたが、またやり始めた。そして演奏は熱烈で陽氣であつたが、そこにかすかに寒けを感じさせるものがあつた――そのものは何であつたらうか――悲しみではない――いや、悲しみではない――何か人をして歌ひ度くさせるものだ。調子は上り、上つて、光りが照り輝いた。そしてもう一瞬間すると、彼等みんなが、全隊が、歌ひ始める樣にブリル孃には思はれた。若い人達、一緖に步いて笑つてゐる人達、彼等も歌ひ始めて、大變しつかりした素晴らしい男の聲も合唱したのであらう。それから彼女も、彼女も合唱する。そしてベンチにゐる他の人達も――彼等も一種の伴奏を以て入つて來る――何だか低音で、高くも低くもならず、何か大變美しく、動きつゝ…。するとブリル孃の眼は涙で一杯になつて、彼女はその一團の他の全員をほゝゑみながら見つめた。さうだ、吾々は理解

する、吾々は理解すると、彼女は考へた。——吾々が何を理解したのか、彼女には分らなかつたけれども——。
丁度その時、少年と少女がやつて來て老夫婦がゐた所に腰を下した。彼等は美しい着物を着てゐた。彼等は愛し合つてゐた。云ふ迄もなく、この主人公と女主人公とは男主人公のお父さんのヨットから、丁度今着いた所であつた。で、ブリル孃は猶も口の中で歌ひ乍ら、未だふるへる微笑を湛えて、聞耳を立てゝゐた。
『いゝえ、今はいけないのよ』と少女は云つた。『こゝではだめ、私出來ませんわ。』
『どうして？　あそこの隅つこにおいぼれがゐるからだつて』と少年は訊いた。『何だつてあの女はこんなところへ來てゐるのかしら。——誰が來てほしいと云つたのだい。あんな老ぼれ面なんか家にすつこめてゐりやいゝんだ。』
『あの人のえり—えりまきがとてもおかしいのよ』と少女がクスクス笑つた。『本當に鱈のフライの様よ。』
『あゝ、そんな話はよせよ！』と少年は腹立たしさうに、さゝやいた。『それよりさあ、云つとくれ、ね、いゝ子だから——。』
『いゝえ、こゝではだめ』と少女は云つた。『まだよ。』

× × × × ×

彼女は家へ歸る途中、いつもぱん屋で蜂蜜の菓子を買つた。それは彼女の日曜日の御馳走であつた。その一切れにはあめんどうが入つてゐることもあつたし、又入つてゐない事もあつた。それは大變な違ひであつた。若しもあめんどうがあつた時には、可愛らしい贈物を——一つの驚異を——多分そこにはなかつたものを家へ持つて行く様であつた。彼女はあめんどうの日女日には大急ぎで歸り、まるで突進する様にして鍋の下にマッチをすつた。
けれども今日彼女はパン屋を素通りし、階段を上り、小さな暗い部屋に——戸棚の様な彼女の部屋に——入つて行つた。そして赤い雁のわた毛の上に腰を下した。彼女はそこに長い間坐つてゐた。毛皮の襟卷を取出した箱は寢床の上にあつた。彼女は小さな頸飾を急いで——急いで、見もしないで、はづし、それを箱に入れた。けれども彼女が蓋をしてゐる間に、彼女は何かゞ泣いてゐるのを聞いた様に思つた。（完）

——九〇頁参照——

講　座

夫婦生活分析臨床講義

高水力太郎

一、症狀及び病歴

廿年前、夫は廿六歳、妻は十九歳の時、相思相愛の二人は、一部親類の反對を退けて結婚した。その後一年足らずして夫は事業に失敗したが、妻は失望する夫を勵ましながらあらゆる困難を排し、數年後には商賣も順調に進み、生活の安定をも得るやうになつた。處が或る夏、夫は商賣の餘暇に友人と旅行したが、そこで或る藝者と情交關係を結ぶやうになり、遂に妾として受出して了つた。その時の妻の驚きは大きかつた。一生を托し全部を任せた夫が愛を分つ女を拵えたのを知つたのであるから尤である。死にまさる苦みであつたが、三人の子供まである間柄であるからと一生懸命に夫に意見し、その女と綺麗に手を切らせることが出來た。處がそれから五年經つて、夫は再びその女と關係を續けるやうになり、且つ忌まはしい病毒の感染をさへ受けてゐた。泣いて詫びる夫に強いことも云へず、たゞ共に泣き苦しむばかりであつた。これでもう落着いてくれたと妻が思つてゐたところ、數年を經た昨今、夫の外出が瀕々として續くのでよく訊いて見ると、又例の女との關係をもり返したらしくこゝまで來ると、妻も殆ど絶望に陷つてしまつた。妻はそれに就いてから云つてゐる。『女は客商賣の事ではあり、來る客は拒まれぬ道理でせうが、夫のやうな人はほんとの遊蕩兒といふものでせうか。結婚してから長年月の事ではあり、私には兩親も兄弟もなく、唯一人賴りの夫はこんな始末です。例に依り夫は子供に免じてゆるしてくれと申しますが、もうとても信じることが出來ません。店の方は日增しに繁昌し、子供も夫々育つてまゐりますが、夫の愛を獨占した逆境時代の方がどんなに樂しかつたか分りません』と。

二、診斷及び處置

我々はかう云ふ夫婦を見ては、どちらにも氣の毒になる。道德的に云へば、勿論夫が惡く、妻は一點非の打ちどころのない立派なものである。併し二人の性的關係が

どのやうになつてゐるかは、紙上診察だけでは何事も分らない。併し恐らく夫が妻に滿足してゐないと云ふことだけは確であるらしい。と云つて、講者はその滿足を與へないのが全然妻の責任であると、云はふとしてゐるのではないのである。責任などゝ云ふことは、道德上（意志上）の問題で、こゝではそのやうな見地からの批判はやゝ場違ひである。これは全然性慾上の問題であるから

これはまづ科學的に研究してからの事である。

が、一方、見地をかへて、妻の方にかう云ふ性的不滿がある場合に、道德的見地からの批判を姑く差控へて貰へるかと云ふに、なか〳〵普通の人はさうはしない。これは不公平と云へば確に不公平である。少くとも、最初相思相愛の間柄で、親戚の反對を押切つて一緒になつた以上は、そこに夫妻共に大きな責任を世間に對して負ふてゐると云ふ事は考へねばならない。けれども人間の本能的慾望や傾向は道德ばかりで支配し統制することが出來ないと云ふのが事實であるとすれば、まづこの事實を事實として見て行くことから始めなければ、何とも考へが進まない。

この夫は道德的見地から判ずれば、自分の方が全然惡いと言ふことを、よく承知してゐる。だから、事がばれる度に平謝りに謝つてゐるのである。妻が云ふやうに、『遊蕩兒』などゝ呼ぶべきほどの人とは考へられない。現に、妻の助力の功もあるとは云へ、商賣にも熱心であるし、仇し女と關係するにしてもさうだらしなくやるわけではなく、たつた一人だけに終始してゐるのだ。常識も道德心もあり、一言以て掩へば、精神は大體に於いて健全な人である。恐らくこの夫の妻への心理的態度を判斷して見ると、夫にとつてこの妻は人として尊敬すべく、家政者として有用不可缺な存在であるが、性的對象としては少くとも現在では十分な滿足を與へられてゐないのであらうと思はれる。

夫の妾への心理的態度を判斷して見ると、人としては尊敬も出來ないし有用でもないが、性的對象としては滿足を與へられるのであらうと思はれる。「つまり夫婦關係と云ふものは、人格上の相互尊敬と、經濟上の相互協力（共稼ぎと云ふ意味ではない、妻が家を守ることも經濟上の協力に外ならない）と、性慾上の相互滿足とがあつて始めて圓滿に行くのである。併しこの三つが完全に揃つてゐると云ふ夫婦は、さう滅多にはない。一時は揃つてゐても、やがて揃はなくなる時期の來る可能性も甚だ多いし、夫婦關係のむつかしさは、實に察するに餘りがある。大抵の夫婦はこの三つが揃はないながらも、何かの點で妥協したり、諦めたり、胡廂化したり、相互に

或る點で欺き合つたりして、とう〳〵一生を過ごすのである。だから夫婦は屢々憎み合ひ乍ら、愛し合つて行くものである。

只今問題の夫婦に就いて云ふならば、彼等はまづ夫婦としては現在のところ成功してゐる方の部であらうと思ふ。何故ならば、夫婦としての三大要件の内二つ（人格と經濟）までは滿足し合つてゐるのだから。たゞ第三の性關係だけがうまく行かないのだ。これが甘く行かないので、夫の方では妻を『欺いて』滿足を得ようとする。妻は併しそこに、夫は良心の苛責を十分に感じてゐる。妻はそれを夫の人格の劣等（遊蕩兒）のためであると解釋しようとする。そこで三大要件の一つのために今一つの方（人格尊敬）までが崩れかゝつて來る危險に今や瀕しつゝある。さうして夫妻がもし互に輕蔑し合ふやうになつたら、勢ひ商賣にも身が入らず、從つて第三の要件（經濟生活）までが破綻する危險に瀕して來る。

その危險に瀕することを避けたいがために、妻の方では二度までも「妥協」して來たのだ。この「妥協」をしなければ、子供までも犧牲にしなければならないからだ。これを犧牲にすることの妻にとつて如何に苦痛であるかを夫はよく知つてゐる。夫が妻に「子供に免じて許してくれ」と云ふのは、妻のこの弱點につけ込んで妥協をさせようと云ふ狡猾な方法であるとも解釋出來る。

この夫は浮氣をするにしても、たつた一人の女に對してこのやうに忠實であるところを見ると、さうすれつからしとは思へない。また相當な年配になつてゐるに拘らず、妻に泣いて詫びたり（よく男はかう云ふ場合に照れかくし半分に怒鳴つたりするものだが）するところを見ると、その戀愛態度は幼兒的であると見られる。換言すれば、母コムプレクスをまだ十分に卒業し切つてゐない。彼にとつて妻も母であれば、妾も母であるのだ。妻はこれに信頼の情を捧げることの出來る强い型の母であると共に（妻はまた實際、人から信頼されるに足る男まさりの母親型の女であることが、右の叙述だけに就いて見ても分ると思ふ）、妾の方は救助願望を刺戟する弱い型の「女」であるのだ。彼はつまり種類の違つた二人の母を持つことに依つて、種類の違つた二つの幼兒的願望を滿してゐるのだ。幼兒時代にはこれ等二つの願望（信頼の滿足と、救助の空想と）を一人の母に就いて果されてゐたのだ。だから、この夫はまた、傾向の違つた二人の母親（實母と姑）の間に立つて、どつちにも濟まぬ思ひをしてゐる、人のいゝ婿さんのやうでもあるのだ。

だから、このやうな夫婦生活の處置法としては、やはり分析に依つてこの夫の幼兒的傾向を消散し、その現實

自我を强固にして無意識本能を自由に支配し得るやうにするより外に途はないであらう。換言すれば、夫をしてさう我儘をさせないことである。と云ふよりは、自分で自分の我儘を制することの出來るまでに、自我を强くさせることである。彼をして一人の母（妻）で滿足させるのである。彼を夫婦生活の三大要件の內の二つ半位で滿足すべきことを悟らせるのである。あまり多くを望むことは、却つて總てを失ふ所以であることを悟らせるのである。現實の生活は幼兒時代に空想したほどの極樂ではない。極樂でないところへ來て、極樂での夢を追及してゐるものは、地獄に陷らねばならない。地獄に陷ることの恐ろしさのために、頭だけが極樂へ昇天して了ふと、それが氣狂ひである。現實生活は極樂でもなく、地獄でもなく、その中間にぶらさがつてゐる不安定なところだと思はねばならない。贅澤を云はずに、然しいぢけずに、不斷に懸崖を攀ぢ行く。それが人間の健全な生活だ。夫婦生活だ。（完）

精神分析語彙（十四）

一、定着觀念 idée fixe――フランス學派のジャネーの造語であつて、これの假定に於いてこの學派と精神分析とは密接の關係がある。たゞ精神分析はその觀念が無意識的である點を强調するものであつて、この觀念が他の觀念と混淆し而も一方に伴ふてゐる感情が他方にも自由に轉移することを認め、これをコムプレクスと名付けたのである。

一、剃髮――頭髮は男性器（性慾）の象徵であつて、これを剃ることは去勢を意味する。本誌第二卷第六號十四頁參照。

一、敵愾心――「社會的感情は、最初敵愾心であつたものが、同一化の性質を帶びた積極的な調子の結合に變ずる、その逆轉に基くのである。我々がこれまでさま〴〵なるこの成行を見通し得た限りでは、この逆轉は集團外に立つ或る一人に對する共通の優しい（感傷的）結合のために影響せられて生ずるものゝやうである。」（フロイド「集團心理と自我の分析」）但し別に術語ではなし。

一、徹底操作 Durcharbeiten――「醫者は患者の抵抗に逆らひつゝ分析的根本法則（その條參照）に依つて操作を續けることに依つて、彼のために相當の時間をかけねばならない。彼自身にまだ十分に分つてゐない抵抗を深く知悉させなくてはならぬ。抵抗を徹底操作し克服しなくてはならない。さう云ふ徹底操作の高頂に於いて始めて、醫師は被分析者と共同して、抑壓されてゐる本能感情を發見するものである。抵抗はこの抑壓されてゐる本能感情に支持されてゐるのであつて、その感情の存在と力とを患者はそのやうな操

作の經驗に依つて確信するのである。その間に醫者として僞すべき事は、たゞ期の滿つるまで待つてゐることである。期の滿つることは避けることは出來ないが、また促すことも出來ない。これだけの洞察を確實に持つてゐると、醫者は自分が正しい方向に處置を進めてをりながら行詰つたのではないかしらと云ふやうな誤認を屢々避けることが出來よう。

このやうな徹底操作は、分析實施に於いて、被分析者に對して甚だむつかしい仕事となり、また醫者にとつて忍耐試驗となるであらう。併しこの部分の操作こそは、患者を改變せしめる最大の影響力を有するものであると共に、また分析的處置が暗示的處置と異る所以でもある。理論上ではこれを抑壓に依つて閉込められてゐる感情の總量の『發散』Abreagieren に比較することも出來る。この發散と云ふことがないから、催眠術的處置は無力に終つたのだ。」（フロイド「分析療法論」）

一、轉位 Verschiebung——定着觀念がコムプレクス（錯綜）され、一方に附隨してゐる感情が他方の觀念に移されることを云ふ。「置換」「見當違ひ」「歪み」なゝ々譯して却つてよく意の通ずる場合もあると知るべし。

一、轉嫁 Ubertragung——コムプレクスに基きリビドーを對象に纒綿（交付、備給）することを云ふ。殊に神經症患者の分析者に對する關係に於いてそれが判然と現れる。「患者は醫師に對して或る程度の溺愛的な感情——でも屢々敵愾心を混へた感情——を抱く。これを轉嫁と呼ぶ。而もこの感情は何ら、現實的な關係に基づくものでなく、その現れ方について何から何まで患者の古い、無意識的になつた空想願望から源を發してゐるのである。患者にも、もはや記憶中に呼び起す事も出來ない樣な、彼の感情生活の一片がかくして今や醫師との關係に於いて再體驗され、轉嫁に於けるこの再體驗によつて醫者も始めてかゝる無意識の性的感情の存在、並びにその力量を確知するに至るのである。症候は、化學の用語で比喩するならば、最廣義に於ける以前の戀愛經驗の沈澱物であつて、これは轉嫁と云ふ體驗の高溫度においてのみ、溶解されて、別の心理的產物へと變形するものである。この反應に於いて、醫師は、フェレンチの巧みな表現を借用すれば、淨化的酵素（Katalytisches Ferment）の役割を演ずるもので、この酵素はこの過程の間に解放されてゐる感動を一時自分の方へ引寄せるものである。轉嫁作用をよく硏究して見ると、また催眠術的暗示の何たるかゞ理解出來る。」（フロイド「精神分析五講」）

一、轉嫁神經症 Ubertragungsneurose ——リビドーを自己の內に引揚げてしまつてゐる神經症をナルチスス型神經症と呼ぶに對立し、對象に纒綿し過ぎるものを轉嫁神經症と呼ぶのである。即ち、ヒステリー、强迫神經症の如きは、この範疇に入るものである。この病氣は精神分析法が最も適當

する治療對象であるが、ナルチスス型の方のは、固よりこれを大いに研究する事が出來るが、これに治療的影響を及ぼすことは原則的に困難とされてゐる。

一、轉換 Konversion――「ヒステリー徴候は、轉換に依つて身體的表現にまで齎されるやうになつた無意識的空想に外ならない。さうしてそれが身體上の徴候である限りは、それ等は（當時はまだ意識的であつたところの空想に本來伴つてゐたのと）同じ性的感情並びに言動的神經作用の範圍内から取つて來られる事が甚だ屢々である。」（フロイド「ヒステリー空想と兩性具有」）

一、轉換ヒステリー――「まづ第一に、自我は抑壓されてゐる亢奮の不斷の反抗に對して己れを守るために始終、逆纏綿を支出してゐなければならないし、從つてそのために自我は貧窮を告げる。他方に於いて、今では無意識であるところの被抑壓物は別途に發出と代償滿足とを求めて行き、かくて抑壓の意圖を無效に終らせるのである。肉體轉換のヒステリーに於いては、つまりこの別途が肉體の神經作用に出てゐるのであつて、抑壓されてゐる亢奮が何故か或る個所から洩れ出し、それが徴候（症狀）となつてゐるのだ。で、つまり徴候とは妥協構成であつて、代償滿足ではあるが、やはり歪められてをり、自我の抵抗に依つてその目的を轉向せしめられてゐるのだ。」（フロイド「自傳」）

一、典型的の夢 Typische Träume――「類型的の夢」と譯するも可。人類に普遍的なる象徴に依つて構成せられてゐる夢。フロイドの發見命名。なほこの種の夢については、ステーケルの「夢の言葉」に詳論あり。

一、纏綿 Besetzung――「備給」と譯するも可。リビドーの對象への傾注を云ふ。電氣の用語としては「充電」と譯せられてゐるもの。「纏綿」は必ずしもよい適譯語とは云へず、併し現在の日本語としてこれ以上、妥當なるものは他にないやうに思はれる。

一、デジャヴュ Déja vu――人々が自分は嘗て既に現在のと同じやうな立場に立つたことがある、このやうな經驗をしたことがあるとの感じを自然に持つこと。「親熟感」とでも譯すべきか。分析的には過去の類似の經驗とのコムプレクス（錯綜）に依ると、說明せられる。

一、傳記的の夢 Biographische Träume――夢の本人の全生涯を表現してゐる夢。

一、偸視慾 Schaulust――窃視慾と譯すも可。對をなして現れる部分本能の內、露出慾と對照するもので、相手の性器又はその代償を見ることに快樂を覺ゆるもの。偸視はサディスムに相當し、露出はマゾとスムスに相當する。前者は昇華せられて知識慾となり、後者は昇華せられて藝術的乃至演劇的娛樂となる。

一、偸視症者 Vojeurs――病的に偸視慾强く、これを制し又は昇華すべき自我の力弱きもの、例へば出齒龜の如き。

アブフウブ

川柳に依る夫婦生活の分析

高橋　鐵

1、夫婦になる迄

日本語トツグの語源はト（水の出入する戸口、性器、）をツグ（接觸する）のであつて、如何なる民俗誌や風俗史を見てもその婚姻形式は性的象徴で充滿されてゐる位だから、川柳家が見逃す筈はない。「あの聟が聟じやと思ふ綿帽子」――大部分の夫婦が商品の如く心無く一對になる。ハッキリ描けば「妹は湯文字一つで値が出來る」ので、此の過程はベーベル不朽の著「婦人論」に婚姻取引（つまり職業としての結婚」の論據を以て解析せられてゐる。

併し、たとへ取引にしろ、此の手段によつて初めて公然と性生活が開けたときめきは激しいので、それだけに一層、それの描寫は社會的抑壓を蒙つてゐる事をお斷りして置く。そしてそれと同時に社會制度の私有性と並存して初夜權を握られた恐怖と羞恥は女の一生に決定的影響を與へる。

「綿を冠つて起きたいは翌る朝」ではあるが、流石に處女時代に近しくしてゐた母や友人へも「怖かつた事は花嫁筆にせず」――絶えず其の處女性放棄の外傷的印象を無意識界へ抑壓せんと努力する。それがヒステリックな悲喜劇となつて現れるのだから恐ろしい。ここに分析の必要が生ずる。

2、新婚時代の價値論

かうして、「親にも許さぬ」生理學的誓ひを交すと、異性同志は賣買淫とは違つて一生を投資した事業であるだけに深刻な享受の心理に到達する。勿論、所謂戀愛結婚ならば勝利感に伴奏されてエクスタシーが大きいが、全然取引的婚姻でも間接的には社會的重壓により、直接的には一種の秘密協約の親しみに入つて行く。（秘密の相互把握は戀愛に於ても、犯罪に於てすらも、强大なカスガイになり得るであらう！）。

「新世帶、夜具に屛風を立て廻し」と云ふ句が示す樣に逃避的本能が新婚夫婦の心理を煽つて行く。彼等は、再び弛緩を求める童心を取戻し、その上性生活の閉展をプラスして白痴の樣な心的オルガスムスに耽るのである。「新世帶、欠伸の口に指を入れ」、「若夫婦ご飯を食ふに暇がいり」、「いつそ面白く食ひこむ新世帶」「新世帶釘一本の打ち所」……さう云ふ生活が續いて、一度戸外へ出る時には性の原罪を脊負つた樣な悲哀と歡喜とのアンビヴレンツ的情感をさへ分つ――「二三町出てから夫婦、連になり、」

新婚時代の人生價値は性本能の自然な奔流と、それに伴ふ性魂――アニマ、アニマス――の引上げと取込みに由來する樣である。又それは社會段階に於る私有性と密接に結びついて、外部に對する場

合、極端な態度を取る。男性性格の原則たるサディズムは獨占の欣びに燃え、女性性格のマゾヒズムは獨占された受身のエクスタシーに醉ふ。

「新妻を腮でしやくつて友に見せ」る夫と「叱られて見たい新婦の心もち」が相互に順調な對象愛を以て發展して行く。

3、同一化へ！

かうして、「仲人の噓で悲劇の幾番ひ」が成立し、又も一つは「もう誰も水を差さない新世帶」となつて實現される！

彼等は經濟生活と家族制度に向つて、性愛の力一つを賴つて鬪つて行くのである。この過程にも遺憾ながら所謂猥褻句（バレク）が多過ぎるが公開されてゐる古川柳を擧げれば……「辨慶と小町は馬鹿だなあかゝあ」なのである。夫がかう云ふ絶叫を現せば妻も亦「うつり香を胸に叩んで嫁しまひ」と云ふ反應を起す。

併し、勿論、生活はロマンスではない。姑とか家風とかを川柳は餘りに多く唄つてゐるが、其の樣な封建制度の殘骸は、資本主義の家族制度破壞力とエディポス錯綜の分析とを以て、大部分消滅に歸すべき問題である。

經濟生活との鬪ひだけが正しき性愛と共に重要になつて來る。二百年も前の無名の諸謔詩人はこの點を「しんじつになると互ひにやぼになり」と唄つてゐる。確かに戀愛と結婚との心理的差違は最も明らかに、此處にあるであらう。そして多くの無產大衆の中、最も平和な家庭で啄木の「友が皆我よりゑらく見える日よ花を買ひ來て妻とたのしむ」と云ふ歌の境地を實演してゐる。

噫！「唯一人妻を味方に生きてゐる」既婚男子が如何に多い事か。又「女房を大事に思ふもてぬ奴」がすくなからざる事よ。しかも今の世の矛盾せる道德に於て彼等こそ最も善き人と見られてゐるのである。そして此の點に、資本主義社會下の「家庭愛」の本態が見られる。たゞそれをどう轉化すべきかは言明すべきでないであらう。

此の同一化は新婚時代を過ぎて行くに從つて、ナルチスムス的轉嫁愛の强さを以て進み「一心同體」の心理的必然として買被りが互ひになされ、「女房が見れば亭主が美い男」になる樣に、家庭にヨリヨキ半分が居ないと「火の消えた樣に亭主が一人居る」樣な有樣になる。

4、性的差違の種々相

併し、いくら仲の好い家庭でも、夫妻ともに社會學、生物學、生理學、心理學、精神分析學等に依る自己分析が行はれぬ限り、一種の生物學的兩性鬪爭は免れぬらしい。殊に、性構造から現象的に投映する性的差違の種々なギャップは、前述の樣な經濟生活と性生活の二面に於て露骨に對立する。此の兩性の比較研究はウエスターマーク、ベーベル、H・エリス、ロムブロゾー、タムソン等の諸著に於て成されてゐるが、質的にも量的にも、社會狀勢の把握すら考慮しない對象論などが如何に無意味なものであるかは判然たるものではなからうか。

例へば、女性の嫉妬、男性の多婚慾、

女性のアナボリック(靜止的、蓄積的)性質、男性のカタボリック（活動的、消費的）性質は生理學的には本質と見做され得るが、一度生物界を眺めると外部狀勢により、寧ろ逆轉したものがある。

「嫁入つて女は損なものと知り」と云ふ悲劇、「理に勝つて女房あえなくくらはされ」と云ふ終幕。併し現在の有るがまゝに於ては女性は結局、消極性に於て勝利を得てゐる樣である。「女房の云つた師走になりにけり」となると痛切であるが「女房に相談をして義理を缺き」又「米の値を聞けば女房笑つてる」と云ふ日常生活に於ても、カタボリック男性の敗北があるらしい。

此の女性特有の消極的な强味は「どつからか出して女房は帶を買ひ」と云ふ脅威となり、「町内で知らぬは亭主ばかりなり」と云ふ行動性となる。

５、鬪ひの分析

夫婦は愈々鬪つて行く。「夫婦喧嘩は犬も喰はない」彼の深刻で愚劣な日常鬪爭へ！

「仕舞には毆る權利を亭主持ち、」しかもその擧句「大聲で泣くと亭主の負になり、」亭主關白くさつてゐると「叱られた女房は寢やうともしない」で、持久戰になる。その最中を仲裁なんかした者は災難で、出しやばりの樣に、納まつた後で夫婦に語られる。それでは、どう云ふ風に鬪爭が終るかと云ふと――「臑の毛をひくが女房の仲直り」！

何しろ、夫婦喧嘩の近因たるや家庭を護る爲のことが多いので、嫉妬や經濟問題や子供に絡んだ事件なのであるから、そんな事では前述の樣な愛の構成にはひゞも入らぬであらう。――「仲直り元の女房の聲になり」

６、夫婦愛の特殊性

確かに夫婦愛は、戀愛や友愛や肉身愛とは著しく變つた所がある。俗に「腐れ緣」と呼ぶ樣につながつて一種の惰性の力で共白髮になつて行く。

「生傷が絶えぬに女房別れない」で連添つてゐる。まるで亭主以上に亭主を買被つてゐるかの如く。であるから、たとへ凄慘な亂鬪と罵倒の末別れてもコッソリどつちからともなく忍び逢つて「仲裁を又出し拔いて腐れ緣」を結んだりするから仕末に終へない。

「浮かれてる面を見たいと女房云ひ」或ひは夫が他にも性生活を持つてゐるのを知つて「有る甲斐はござりやせんと女房嫉き」したりしながらも「ふられたと聞けば女房も口惜しがり」するのが夫婦愛の極致(?)ではあるまいか。殊に、種屬保存の大目的を果すと女性は本能的な安心立命を得ると見える。(尤も大體に於て此の爲に單婚家庭が最も便宜的方便として存在理由を持つのであらうから。)

「産擧句、亭主使ふが癖になり」床拂ひすると今度は「子が出來てからはあらはに肌を出し」そして「子守唄もう悋氣などせぬときめ」る。此處に至れば、もう前ほど性的牽引の必要はなくなつて、實に落莫たる夫婦心理が互ひの胸にくすぶつてゐる丈であらう。

性行爲の嚴肅さも情感もなく「家にないものではなしと女房やき」亭主の方も「律義者まじりくと子をこさへ」る許りである。

それに較べれば、「年上の女房、必死の糠袋」を武器とし「惚れてゐる丈けが女房、弱身なり」と感じる方が、まだ人生的ではなからうか。否、それよりも賢明なる自由結婚には質的な夫婦愛を見る事が出來る。其の者、戀情を貫く爲に自分に捧げてくれたマゾヒスティックな愛――「指一本足らぬ女房を大切(だいじ)がり」と云ふ風に。

７、單婚制の悲劇について

併し、おそらく一生情熱と理解とを注いで續けられた結婚と云ふものは嚴正に數へたら至極僅かなものであらう。時間的に云つても價値漸減の法則が心を支配することは否定しきれないから――「目についた女房此の頃鼻につき」と云ふ我がまゝな結果が生れる。さうなると男性のカタボリック性は妻の愛情さへ煩はしがつて「女房にいまいましくも惚れられる」などとほざく樣になり出す。

これは勿論、愚かな結婚にとつては當然な結果であるが、女性が家庭及び子供にリビドーの退行を果した時には、男性の外向的な攻擊慾は捌け口を失つて精虫の樣に俊敏に新たな性關係を追はうとするのが必然であらう。

「女房はすッぽん女郎お月樣」は民衆の多婚性を現はし、又封建貴族の殿樣すら「奧方(みつぼね)をすてゝ町女(わっち)を御寵愛」と云ふ仕義になる。

「人類の性愛史を建てた諸權威は、たとへ蓄妾制度は排擊しても、人間が性對象の變化を好む傾向は將來根絕するだらうと主張した者は一人もあるまい」と「多妻制下の女性(ウイメンアンダーポリガミー)」の著者ウォター・ゴリガン氏は最後に結んでゐる。

「兒を抱いた女房に腮で使はれる」
「添乳して棚にめざしがござりやす」
「妻の愛を兒にとられしうすら淋しさ」

かうして男性と女性と兒との不可抗的な鬪爭はくり返され、男性の道は何らかの方法で光源氏へか、ハムレットへかの二道を殘されてゐる。それ故にこそ、筆者が見る所によると、未だに單婚制と多婚制のいづれに進路を選ぶべきかについては古來より多くの學者も確定した論斷を敢て下してないと思ふ。

「好色な男は結句妻持たず」と云ふ江戸期の一句にも表はされてゐるのも險路の一つではあるが……。（完）

分析雜俎

森巢山人

一、蝶番

箱の蓋や家の扉が、かまちに柱に互して打つけてある仕掛けを「蝶番」と云ふことは、何人でも知つてゐる。「言海」を索いて見ると、「元は多く蝶の形に製した」とあるが、現今人々は大低その事さへ知らないで居るほど、今では蝶番が本來の無意識心理的意義を失つてゐる。併

し「言海」(中形)は、元は蝶の象に製したと教へてはゐるが、何故に「番」と呼ぶかと云ふことに就いては何の教ふるところもない。

近頃、私は一友の家に遊んで、その藏するところの朝鮮渡來の鏡臺箱を示された。上蓋は三七の割合で二分せられ、蝶番に依つてそれが結合せられ、小さい方の部分は箱に附着し、大きい方の部分だけが開閉して開いた時にはその裏に貼り附けてある鏡板が傾斜して箱の上に立つやうな仕掛けになつてゐる。そこに取付けてある蝶番は錫で出てゐて、箱の割合から云つて調子外れに大きい。而も二羽の蝶が――その蝶には觸角まであつて、必要以上寫實的に出來上つてゐる――互に相向ひ合つてゐるところになつてゐる。私はこの形を見て、その語義が釋然と了得せられた。これは蝶の番と云ふ意味であると。さうして「番(つがひ)」には一對、一組と云ふ意味と、交接と云ふ意味とがあることは誰しも知つてゐる。さうしてこれ等二つの語義は本來同一根柢から發してゐることは、他のあらゆる語に於ける二重又は三重意義の場合に於けると同じである。さうして「番ふ」ことは、元來「開く」ことを當然に豫想してゐるので、開くべき一切の場所に聯關して(恐らくは祝福的な意味と意圖とを以て)一番の蝶の形をそこに加へることになつたものであらう。結婚式場に「雄蝶雌蝶」の出て來るのは、何時、何處から始まつた風習かは知らないが、蝶は元來色事には付物になつてゐるのだ。孔子様が夢に蝶を見たと云ふ話なども、分析的に解釋したら、意外な結果になつて來るかも知れない。歌舞伎芝居では、夢の場に――元來、色模様の多い夢の場に――入ると云ふしるしに一番ひの蝶を出すのが習慣になつてゐたと、本誌昨年十二月號に松居桃多郎氏が書いてゐたが、その事なども只今の場合、當然思ひ當らねばならないことだ。

二、馬と性

同じ友はまた私に、蒙古の春畫を見せた。畫帳になつてゐて十枚ばかり貼込んであつた。着彩密畫であるが、不思議なことに、何れの場面もみな馬上に於いてなされてゐるのであつた。而も多くは全力を擧げて走つてゐるところである。內に二枚ばかり、靜止してゐる馬上に於けるのもあつた。狂奔せる馬上で性交するなど丶云ふ事は現實では絕對にあり得ない。併しこれを單なるナンセンスとして笑殺し去ることも出來ないであらう。何となればこれほど澤山に同一狀態に於ける交りが描かれてあるのだからだ。これは性交と云ふことの觀念に何等かの關係があるためであると解する方が自然である。併し分析學に於いては既に、すべて律動的な運動、又はかゝる運動をなさしむるもの――例へば階段、乘馬――などが、性交の象徴となることは、明かにされてゐる。私は併し要心深く、なほこの假定をこの蒙古畫集の場合に適用することを差控へておかう。何となれば、この畫集成立の年代や事情に就いて私は何も知らないから。他にもつと多くの類例が

上つてから後に、斷定を下してもおそくはない。たゞ今は、一つの暗示として、單なる感想として讀者諸氏へこの事實を報告するに止めておかう。

三、鳥居と鋏

立小便をされては困る場所に「小便無用」などゝ書いて貼出すことは、愚かである。かく掲示することは、その場所が立小便の好適地點と一般に認識されてゐることを新來の者等にまで告知する結果になる。さうしてエディポス的反抗心を刺戟してその禁を犯すことを誘惑する。言葉に依る禁止命令の如きは、かゝる誘惑には最も適當してゐる。人間と云ふものは凡そ何でも外部から禁止されゝば、一應それを犯して見たくなるのである。人をして或る行動をなさしめざらむと欲せば、その人自身の內から禁止命令が出て來るやうに仕向けねばならない。それには現代人の心理にもなほ多分に殘つてタブーを呼起すこと、又は何かのコムプレクスに訴へることである。

私はかつて下谷根岸の方で、「小便無用」と書いてその上に赤鳥居の畫を描いてあるのを見たことがある。その後なほあちこちに同じやうなのを瞥見した。これは成程、頭のいゝ方法である。鳥居はタブーである。これを瀆す勇氣のあるものはなからう。たゞ「小便無用」は無用である。それを高橋鐵君に話すと、君はかつて鋏の畫を描いてあるのを見たことがあると云つた。なるほど、これも面白い方法である。これは、放尿者への去勢の脅威に依つて禁止せんとする方法であつて、去勢コムプレクスに訴へるものである。

四、「ブリル孃」について

岩倉氏が本號に譯出してゐられる「ブリル孃」はマンスフィールド獨特のナルチスムスの幻滅の悲哀を描いた短篇だ。主觀の世界ばかりしか眼に入らなかつた者に、急に客觀の世界の見え出した時の驚きと淋しさとが、よく描いてある。自分は見物人だと思つてゐる內に、いつしか見物せられる方に廻つてゐることを發見しての非常な周章がよく書いてある。その手法には分析的な見方も這入つてゐることを見落してはならない。「ブリル」Brill と云ふ名前には、やはり brilliant（輝かしい）の意味があるに相違ない。現に作者は第一行にこの語を用ゐてゐる。その「輝き」孃が「戸棚のやうな部屋」の中に疊つてしまふまでの心理過程が主題である。實にいゝ作品だ。（完）

フロイド精讀會

毎月第一月曜日の夜に、研究所で、フロイドの著書の精讀會を催してゐます。出席希望の方はお問合せを乞ふ。只今用書は「精神分析總論」の內「五講。」

内外彙報

「イマゴー誌」本年度第二册

一、『表白慾と强迫的記憶』ギインのD・T・バーリンガム稿。――思ふこと云はざれば腹ふくるゝ心理と、何事かを記憶せずにはゐられない心理。

一、『憤怒の感動』ギインのA・ギンテルシタイン稿――精神分析學では、今日までまだあまり憤怒と云ふやうな感情の研究はなされなかつた。これは新しい試みである。

一、『本能の概念について』オスローのJ・ランドマルク稿――斯學に於て本能觀の未だ確立してゐないことはフロイドが屢々告白するところである。この論文はその方面の缺を補はんとした野心的な論文である。

一、『治癒の謎と不可思議』スキツルのA・キイルホルツ稿――治療に際しての醫師の患者に對する感情移入の必要を說ける論文。

一、『ディオニソス的なものゝ心理』ベルリンのA・ミッテ稿――ニイチエのディオニソス的とアポロ的との對立論を分析的に再考せしもの。

一、『日常生活に於ける遠隔感應的現象の精神病理』ニウヨオクのP・シルダー稿（新刊批評）

一、『心理生理學的論文二三に就いての報告』ギインのS・ベルンフェルド及びS・ファイテルベルグ稿。（同）

一、『二十年後に名前を混同したことの分析』オスローのO・フェニヘル稿。

一、その他、雜報。

「イマゴー」誌本年度第三册

一、『罪惡感』フィラデルフィアのヘルマン・ヌーンベルグ稿――アムビバレンツとしての罪惡感の研究。

一、『退屈の心理』オスローのオットー・フェニヘル稿――リップスの美學的退屈心理論を、更に分析的に再檢討せしもの。

一、『發生的心理學と精神分析學』ジェネバのR・ド・サウシェーレ稿――兒童心理を各方面から研究した纒つた長論文である

一、『モナ・リーザと女性美』ニウ・ヨオクのフリッツ・キッテルス稿――男性的な女性とその美に關する研究。

一、『口唇的厭世思想家は如何にして生ずるか』ギインのエドムンド・ベルグラー稿――ドイツ十九世紀の悲觀詩人グラッベに就いて厭世思想の心理的根據を研究したもの。

一、その他、斯學と他の科學との關係分野に交渉ある各種新著の批評。

ラドーの新著

ニウ・ヨークの研究所長サンドル・ラドーは『女性の去勢恐怖』に關する研究を最近公にし、女性の性慾發展の種々相を詳にした。男子に於ける去勢恐怖と婦人に於けるそれとの相違に就いて、特に獨自の見解があると云ふ。

最近國內事實

★『現代英國小說家の宗教觀――ウォルポールとロレンスのキリスト敎觀――』長谷川誠也稿（「藝術殿」十月號）

★『精神分析より見たる變態心理』古澤平作稿（「科學畫報」十月號）

★『子供の喧嘩の精神分析』霜田靜志稿（「兒童」十月號）

★『性慾心理講話』大槻憲二稿（「人生創造」十月號）

★『女性とヒステリー』同氏稿（「新青年」十月號）

★『チエホフ作品の分析鑑賞』同氏稿（「書物」九月號）

★『精神分析から見た瀧の白絲』同氏稿（「日刊キネマ」九月下旬三日連載。）

★『强迫觀念の本態』森田正馬稿（「神經質」七月號）

★『フロイド主義と方法論』長谷川虎男稿（同誌同號）

★『小說家ローレンスの畫論』齋藤黄葉邨稿（「雲雀」九月號）

★『新青年』十月號に精神分析を應用せる小說『網膜透視症』を掲載。

★『ドストイエフスキーの生理』林髞稿・「中央公論」十月號・

★『夢とシネマ』河上雍也稿（S・Y・本鄕座ニウス」十月十一日號）

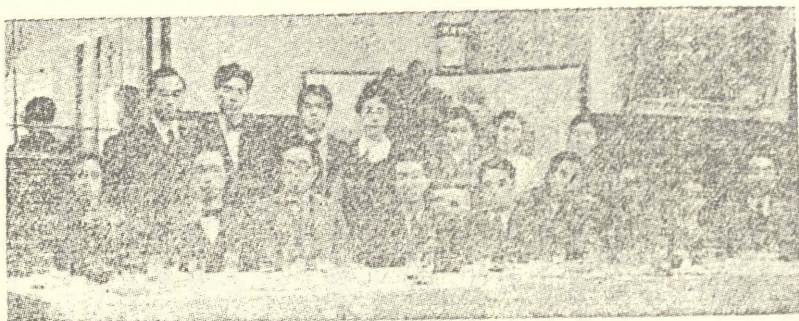
★本誌前號內容に關しては、巻末廣告を參照ありたし。

本研究所研究會九月例會

九月例會は十七日午後五時半から日比谷美松百貨店五階貴賓室に開かれた。今後每月この會場を借りることになつた。平塚らいてう女史の盡力に負ふものである。

食前、雜誌の講座欄論文に就き、司會者より講習あり、終つて食事に入り、續いて講習の續行を經て、研究談に入つた。

まづ高橋鐵氏、『精神分析的機智論より見たる江戶小話』に就いて、非常に機智的な研究談があつた。出席各位との間に質問應答があつて、やがて

大槻憲二氏から『精神分析學から見たキリスト敎と佛敎との相違』について研究發表があつた。續いて質問應答があり、暫く諸氏の間に種々の話柄が交されて、充實した一夕を終つたのは十時頃であつたが、それ以前に、奧村博史氏が新調のライカ寫眞機を以て出席者一同を撮映して下さつた。次に掲出してあるのが、卽ちそれである。向つて右の前列から岩倉具榮、小杉

長平、小杉禮二、窪田甲子郎、生形要、高橋鐵、大槻憲二、霜田靜志、平塚らいてうの諸氏。後列右から福間光、伊藤芳子、渡邊ユキ、大槻岐美、土屋喜一、立川玄一郎、長崎文治の諸氏。なほこの外に寫眞技師となつて下さつたために、こゝには姿の見えない奥村博史氏があるわけである。

新來者は甲府からわざわざ見えた窪田氏（山梨民報社々會部長）と、福間孃の紹介で見えた伊藤孃と、小杉長平氏の紹介で見えた渡邊孃とであつた。

本研究所研究會十月例會

十月十六日・第三火曜日・前月通り美松五階に開く。折惡しく雨天であつたに拘らず、出席者多く、廿一名であつた。食前、例に依り雜誌九・十月號講座について、大槻憲二氏と長崎文治氏と相分擔して講義あり。終つて食事に入つた。この例會に日本食の出たのは始めてゞ出席者諸氏も珍らしげであつた。

食後、別席に退き圓陣を作つて、研究談に入る前に、雜誌について雜誌委員より報告と相談とがあつた。

研究談はまづ長谷川誠也氏、「ロレンスの宗教觀」と題して、ロレンスの默示錄への批評（ヨハネ默示錄が現實的敗北者の願望的妄想であるとの分析的批評）を紹介せられ、それに就いて種々の敷衍があつた。

次に高橋鐵氏、古今東西の贅澤家の珍談を數多く上げてその心理を考察し、最後に大槻岐美子氏兒童の攻擊慾に就いての分析的觀察とその處置法についての經驗を語られ、それに就いて霜田靜志氏、小林貞雄氏、それ〲また自家の兒童に就いての體驗を語られ、十時頃、無事に散會となつた。

出席者は以上言及の諸氏の外に、岩倉具榮、大久保眞太郎、辻修、立川玄一郎、伊藤芳子、福間光、土屋喜一、朴永鎭、窪田甲子郎、小松德氏等、並びに、小林正、高橋はる（鐵氏令妹）岩倉良子（具榮氏夫人）、浦野傳、小林貞雄氏等新來の方々であつた。散會後、霜田氏の洋傘が見當りませんでしたが、どなたか間違つてお持歸りの方は御申出で下さい。缺席挨拶のあつたのは小山良修、田内長太郎、平塚義角その他の方々であつた。

編輯後記

本號を以て第二卷を終ります。本卷續刊中に於いて、本誌は五月號（二ノ五）以降月刊制から隔月刊制に移りました。卽ち、六月號を休刊して、七・八月、九・十月號を刊行して現在に至つたわけであります。

本號卷頭を御覽になります通り、關係者も漸次增加して參りますし、雜誌の需要も追々と多大になつて參りまして、編輯關係者は非常に多忙を加へ困つてをりますが、併し多忙に苦しむくらゐは結構な事と申されねばなりません。

卷末に總目錄の代りに、第二卷第一號心理療法研究號以降の廣告を揭げておきました。なほ、創刊號以來の第一卷總目錄御希望の方は御申出下さい。

×

本號も御覽の通り、自信を以て讀者諸氏にお勸め出來る內容を具へ得たことを滿足に思ひます。執筆者諸賢の御努力にも深謝いたします。いつも本誌は豫告以上の出來映えになるやうに思ひますが、或は編輯者の一人よがりでせうか。――と謙遜するのは、分析者の自己分析のためでありまして、普通雜誌の編輯者ならば、も少しナルチスティッシュに呼號するところでせう。

×

今度は新執筆者は千葉廣洋氏だけであります。氏は昭和七年東京帝國大學農學部卒業、目下滿洲國新京に同國官吏として活動せられる傍、この通りの大勉强であります。敬服の外ありません。嘗て屢々本誌に通信を寄せられたが、暫く音沙汰なかつたところ、突然この稿が届いて我々を喜ばせられた。

×

千葉氏のを始め、何れも長論文でありまして、編輯が多少やりにくかつたが、それだけに又力强いものともなつたと思ひます。

長崎氏は久しぶりの長論文、例によつて愼重な態度です。

平塚氏の譯文はもう一同分「分析者としてのド氏」と云ふのがあるわけであるが、今度のを以て一まづ終りとしておきます。他日單行本にする機會には、それを生かすことにされるとよいと思ふ。

×

前號發行以後、會計係に於いて入手いたしました繼續前金支拂の方々だけの芳名を擧げておきます。土屋喜一、古澤平作、竹ノ下學山、窪田甲子郞、澁田見勝亮、浪越春夫、小野田幸雄の諸氏。

×

合本の第二卷下・昭和九年五月から十二月まで・は近日中に出來いたします。御希望の方は早速御申込を乞ふ。値段はこれまでの各册と同一で二圓五十錢であります。送料なし。

×

春陽堂發行書にして本誌に廣告の出たものは總て一割引いたしてあります。本研究所へ御送金の方々に限ります。

通信分析部創設

分析法は每日、患者が分析者の許に通つて、處置を受けるのが正當でありますが、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を新設いたしました。

×

希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金(十圓)を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後にお送りします。手記その他は絕對に他に洩らすことはありません。文字は明瞭に書いて下さい。

×

擔當者は研究所に御一任ありたし。それぐ\適當の人々にふり向けます。……

(昭和九年十月)

研究所事業案內

一、分析部

●神經症治療 ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他)

●性格改造(惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの)

●客員の診察(分析的又は醫術的)希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、敎育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

●所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

每月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。(但し誌代を別に申受く。)

五、講習會

每月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

昭和九年十月二十五日印刷 第二卷
昭和九年十一月一日發行 第八號
(隔月刊) 定價五十錢 (郵稅二錢)

編輯及發行 東京市本鄕區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷所 東京市牛込區改代町廿四 理想社印刷所

定價一部 五拾錢 (郵稅二錢)
半年分 一圓五十錢 (送料共)
一年分 三圓 (送料共)

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割增に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所 東京市本鄕區駒込動坂町三二七 東京精神分析學研究所 振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂 大東館・北陸館

次號內容豫告

第二・兒童心理研究號

本誌第一卷第五號（昭和九年八月號）「兒童心理研究號」は非常に好評を博しまして、その後の研究を要望する聲が連りに讀者諸氏の間から聞こえたのでありますが、遂に荏苒今日に立至りましたことをお許し下さい。

フランス兒童心理學者の業績…長谷川誠也
ボートンの兒童分析論…………霜田靜志
指しやぶりの研究…………高水力太郎
兒童犯罪の實話數例…………窪田甲子郎
子供の攻擊慾とその處置……大槻岐美
少年トルストイの心理分析…平塚義角譯
（オシポウ博士が文豪の幼年時を研究せし名論）
少年ハンスの分析（フロイド）……大槻憲二譯
（分析學史上有名の古典であります）
理想の家族（マンスフィールド小說）…岩倉具榮譯
バーナード・リーチに英國心理學界の情勢を訊く（記者）

月刊雑誌
定價五十錢
送料ナシ

半年 二圓九十錢
一年 五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年二月 **女性心理研究號** 第二巻第二號

青年期に於ける女性と自殺意識（妙齢女子の沈着冷静なる自殺例多數に就いての心理學的研究）……宮田修

コリオレーナス母子（シェークスピア最後の作に就いての母子關係の精緻なる研究）……長谷川誠也

女性論（男性器羨望、陰核自慰、男根期女性心理その他の研究）……大槻憲二譯

婦人同性愛の心理的起源（女流分析家ドイチ女史の徹底的大論文の紹介）……高水力太郎

心理學（K・マンスフィールド原作小説英國分析派女流作家の傑作）……岩倉具榮譯

現代の英國女流心理派作家に就いて（マンスフィールド、ウルフ、その他の總覽）……安藤一郎

時評（長崎醫大の博士號賣買問題○日本人の罪惡意識○非心理學的な醫師觀○常識的な精神病名○英語教育者に望む）……大槻憲二

母性衝動（母たることの意義の分析）……長崎文治

チビの悲劇（劣等者の奇妙な心理）……田内長太郎

俳優術と小説分析法（分析的な藝術論）……伊東豐夫

家と女（女性の象徴としての家の數例）……川上水夫

ロスメルスホルムの女主人公（イプセン再檢討）……今福由江

その他「講座」（女心の分析）、「精神分析學語彙表」、「探訪」（阿佐ヶ谷幼稚園見學）、「外國分析學雑誌内容紹介」、「最近國内分析學關係諸事實詳報」、「相談」（他では見られぬ深刻な獨特の答辯）

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

月刊雜誌
定價五十錢
送料ナシ

半年 二圓九十錢
一年 五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年三月 傳説研究號 第二卷第三號

公開講習會案內（三月中各日曜、但し最終日は土曜、午後一時――四時阿佐ヶ谷公會堂にて、會費一圓二十錢――）

東京精神分析學研究所出版部
本鄉區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

月刊雜誌
定價五十錢
送料ナシ

半年 二圓九十錢
一年 五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年四月 **文學研究號** 第二卷第四號

ユングの藝術觀（ユング說はフロイド說よりも藝術解釋には適切と云はれてゐる）……長谷川誠也

近代文學の心理と技巧（ローレンス・プルーストその他に就いての心理文學の研究）……北村常夫

科學的（精神分析的）文學批評論（科學的文學批評は如何にして可能なるかの問題）……大槻憲二

ドイツ二文豪の精神分析觀（トマス・マン及びヘルマン・ヘッセが文學のために斯學の如何に必要なるかを說ける辭）……平塚義角譯

近代的人間の精神問題（モダン人たることを誇る人々はまづこれを讀んでその意義を知れ）……武田忠哉

キルヤム・モリス「地上樂園」の研究（二）……大槻憲二

マンスフィールド作短篇小說『逃亡』……岩倉具榮譯

時評（一、非醫者の分析者出でよ。二、野心の小さい文藝家。三、小山良修氏の分析書。四、水谷八重子に與ふ。五、川端龍子氏作『愛染』の分析批評）……大槻憲二

『子供への理解』……今福由江

文豪マコーリ卿の妹コムプレクス（マコーリの獨身者であつた理由始めて闡明さる）……大崎黃村

「闇の力」、「野鴨」、「春の眼覺め」の分析評……瓜山森巢

野口米次郎の分析（その他興味ある資料多數）……高水力太郎

春の自由聯想……高橋鐵

性感と性格（性格改造を欲するものは先づ讀め）……岩倉具榮

その他、「內外彙報」、「鈴木雄平博士探訪」、「相談」、「質疑應答」など

東京精神分析學研究所出版部 本鄕區動坂町三二七 振替・東京七八八一七番

月刊雜誌
定價五十錢
送料ナシ

半年 二圓九十錢
一年 五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年五月

第二卷第五號

ドストイェフスキー研究號
(又は人間性研究號)

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七一番

隔月刊雑誌
定價五十錢
送料二錢

半年一圓五十錢
一年三圓
送料ナシ

昭和九年七月 戀愛心理研究號 第二卷第六號

東京精神分析學研究所出版部　本郷區動坂町三二七　振替・東京七八八一七番

藝術殿

坪內逍遙博士會號執筆

十一月號（第四卷第十一號）

要目

年極讀者募集

本誌は舞臺藝術の研究を中心とし、併せて一般文化の向上に裨補せんことを目的とする高級文藝雜誌であります。一ケ年分誌代を金五圓（特別號、送料共）とし、國劇向上會主催の演藝會、講演會等に對しても種々の便宜を計ります。詳細は早稻田大學演劇博物館內『藝術殿』編輯部へお問合せ下さい。

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人　國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

新演劇　十月號　要目

發行所　東京市豐島區西巣鴨二丁目一九六九番地　演劇研究社

定價　三十五錢

昭和八年七月七日第三種郵便物認可

II. Jahrgang, Heft 8. Nov.-Dez. 1934. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Ehelebensstudien)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.